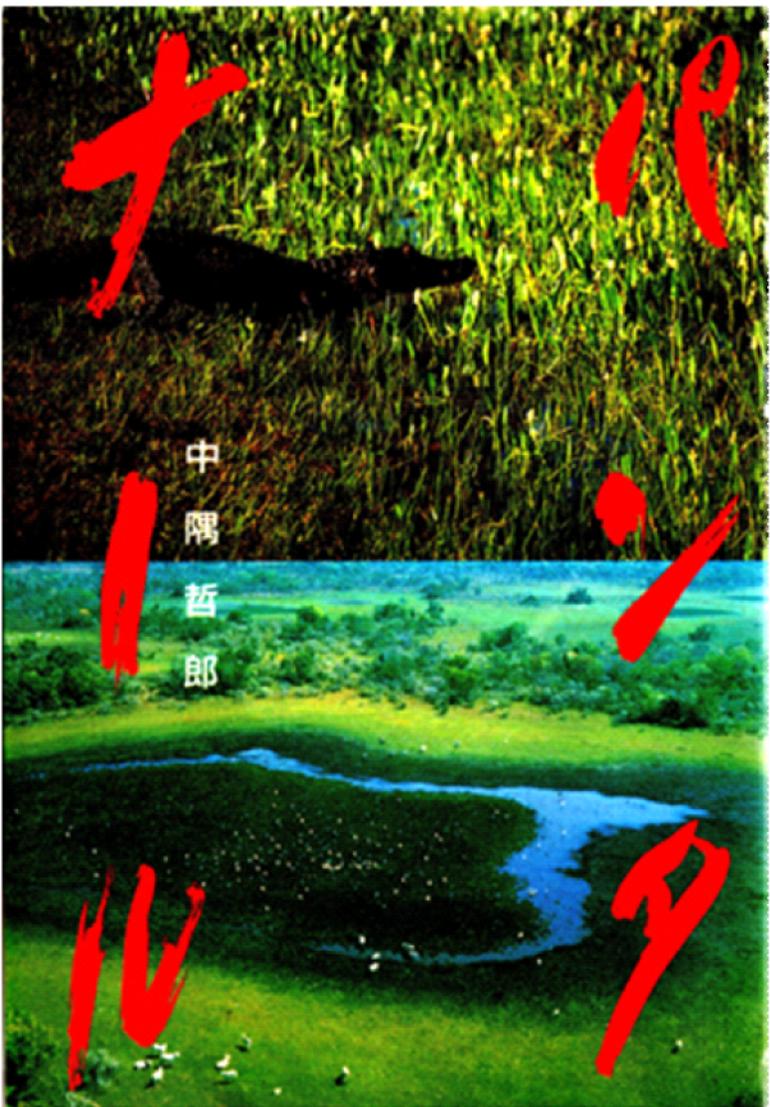


パンタナール

中隅哲郎

無明舎出版



パンタナール

知られざる
地球最後の
大湿原
パンタナール。
その大自然と
動植物生態系の
聖地をルポする。

目次

I パンタナールって何？

13

無明舎出版 ● 定価1,550円

(本体1,505円)

本州の大きさの大湿原
かんたんには行けない
つらい闇夜の河下り
整備されてきた”山小屋”
感電死する鳥

II 夢の王国・釣りと食

33

絶妙な自然のサイクル
めまぐるしい水路の変化
ピラニアに襲われない鵜
人を恐れぬワニもいる
ピラニア除けフンドシ
独特などピラニアのうま味
強精効果
ピントードの味噌焼き
場所で違う魚の味
釣り人の夢
ピラニアの仲間
アカエイの毒
食性の幅広い淡水魚
性転換する魚
独り者には毒
果敢に抵抗する“剣魚”
淡水カレイは劣等生
怪異な容貌ナマズ目
視覚にたよらぬ魚
陸上移動する魚
多い古代魚

III 森の生活

103

変わった習性・アニニューマ

時計がわり

動物と対話する女性

本家奪った"マラゲツタ

トウガラシが好きな鳥たち

忍者もどき、ダニの襲撃

強烈なムクインのかゆさ

防虫効果もある着色染料

IV ヘビとトカゲの話

129

蛇喰い蛇ムスラーナ

ニコチン毒に弱い蛇

原始的な大蛇スクリー

昔からある大蛇論争

蛇が好物のカエル

逃げ足の速いイグアナ

怪力の珍獣ワニトカゲ

V 奇怪でゆかいな動物たち

154

楽観できぬ” 聖地” の前途”
繁殖率悪い大アリクイ
” 残酷物語 ” オンサ狩り
勇猛なザガイエイロ
激減した大カワウソ
不当な蔑称 ” ナマケモノ ”
勝手に生きる牛の群れ
危険な動物の伝染病
” 悪魔の化身 ” バンピーロ
短足だが素早いタツ
卑怯なタテガミ狼
怒りっぽいペツカリ

VI

支配人もつらいよ

193

” 森林の精 ” カイポラ”
樹から降るアリ
気化熱で身体を冷やす
満月に ” もの狂い ”
「イルカの子」も満月が原因
「産婆」もつとめる支配人
たまには ” 異常 ” な客もいる

VII インジオと植物

217

万病に効くジャトバ樹液
食用だった大オニバスの実
珍種”水中ラン”

奇妙な学名

アリと共生の野生バニラ

「絞殺木」マツタ・パウ

悪草ホテイアオイ

さびれた「吐根」の採取

混乱しているカマラ名

バカにならぬ薬草伝説

毒草で対抗するインジオ

”禅味”あるボロロ民話

野生イネを利用する

VIII ものぐさ鳥類観察記

261

屋根で卵を産むニワトリ

配偶者を他に求める

種が劣化する家畜

乱舞する水鳥の大群

受難の歴史もつ白サギ

ツバメの大集結

タカを追い払うカモメ軍

気の荒いチドリの間

「ダニ喰いドリ」のアヌー

カラスのいない中南米

王様ウルブー

中毒しない腐肉食動物

珍鳥スミレコンゴウ

VIII 稀有な生態系を守れ

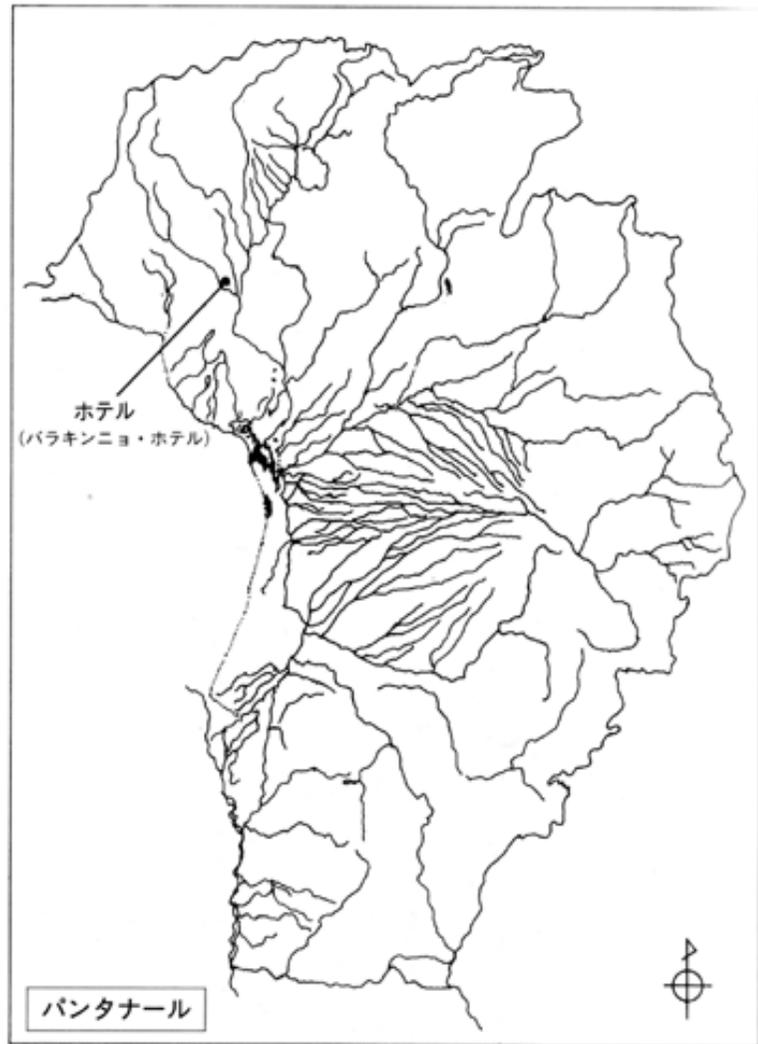
305

バツタ退治の煙霧

生態学の野外教室

あとがき

312



まえがき

パンタナールに行きはじめからもう六年が過ぎた。その前はブラジルの海岸山脈の山の中に五年ほどいたし、もつと前はアマゾンに六年ばかり住んでいた。

三〇年前にブラジルに移住して以来、半分以上ドサ回りをしたことになる。

ただし、現在はサンパウロに居を構え、ここから出かけることにしている。もう若くもないし、むかしのように無理は利かない。マイ・ペースでゆっくりやるのが永續きの秘訣だ。

なにをやっているのかとよく聞かれるが、これに答えるのがむずかしい。ブラジル生薬の研究を主としてやっているのは事実だが、そればかりでもない。

アマゾンの樹種の分類と分布も調べれば、淡水魚の分類も手がけている。生態学もやれば、インジオ文化の研究もする。ついでにツピー語もやってみる。最近ではブラジルを構成する各民族の特性とその歴史的背景に興味を持っている。

どうしてこんなに明るくて、楽天的で、野放図で、デタラメなブラジル人やブラジルの社会構

造ができ上がったのか、というテーマである。

言うならば、私は「ブラジル学」をやっているつもりなのである。「ブラジル学」というのは、かつて日本にあった「支那学」（シナロジー）のもじりだ。

ブラジルは国土が広い上に、各地域によって気候、風土が異なり、それぞれに独自の歴史と文化をもっている。こういう多様化国家のブラジルを解明しようと思ったら、ひとつやふたつの方法では間に合わない。それなら何でもごちゃ混ぜにしたマルチ思考方式の「ブラジル学」でいこうと考えたのだ。

私自身は「ブラジル学」をたいへん楽しくやっている。だが、こういうことを楽しみながらやっていたのでは絶対にメシは食えない。そこで身すぎ世すぎの生業（なりわい）が必要になる。

アマゾン時代までは会社づとめをしていたのだから問題はないが、やめてからはいろいろな会社の顧問をやった。また、パンタナールに行き出してからは、パンタナールに山小屋「バランキンヨ・ホテル」を持つサンパウロの大手日系旅行社の役員になっている。

これは、パンタナールにホテルを買えとそそ

のかしたのが、かく言う私であり、その責任上、パンタナール担当役員を引受けざるを得なかったのである。が、この仕事は気に入っている。一ヶ月に一度の割合いでパンタナールにでかけ、じっくり大自然を観察することができるからだ。

このホテルの支配人が北林博章・千鶴子夫妻で、旦那の方は日系植民地アサイ出身の二世。ポルトガル語と日本語の完全なバイリンガル奥さんは長崎出身の日本人である。

もちろんホテルは現在も続いているが、北林夫妻がいなかったら、とつくに手放していた。北林夫妻のいない、バランキンヨ・ホテルなど考えられないのである。

子供のない北林夫妻はパンタナールの自然を愛し、動物に愛情を注ぎ、訪問客を心からもてなし、そのひたむきな気持が、いかなる人達でも感動させる。

この記録は当然ながら北林夫妻の協力によるところが大きい。とくに夫人の自然や動物に対する詳細な観察がなかったら、こうした記録や解説は書けなかったに違いない。その意味で、これは三人の共同執筆といってよいのである。記

して感謝する次第。



パンタナールの森と沼

パンタナールって何？

本州の大きさの大湿原

ブラジルで大当たりをとったテレビ・ドラマ「パンタナール」のせいか、このところパンタナールが話題になっている。考えてみれば、これだけユニークな地域がこれまで世界的に知られていない方がおかしいのだが、今までは“秘境”でアクセスもなく、物理的に入れなかったのだから仕方がない。

最近のように交通事情がよくなればいろいろな人が訪れるし、当然のことながらそれだけ情報量も豊かになってくる。

パンタナール（大湿原）は、ひと口に言えば、野生動物のもっとも密度の高い棲息地であり、同時にあらゆる動植物の相互の関連を観察できる生態系の聖地である。

さらに、この生態系の外的環境である地形、地質、気候などを調べることによって、外的環境がいかに関係系と深くかかわり合っているかを知ることのできる、世界でも稀有の地域なのだ。

パンタナールというところは、地形気候、植生

が非常に特徴的であり、他のブラジルの地域とは明らかに異なっている。

これがアマゾンともなると、対象地域が大きすぎる上に場所による地理的差異がありすぎて画一に論ずることがむずかしい。

パンタナールだって北限のカツセレスから南限のポルトムルチンニヨまで直線距離にして六〇〇キロもあるかだから、厳密に調べる他域差は出る。だがこの差はごく僅かで全域を均一とみなしても差支えない。

ところで、最近のパンタナールは、道路網やその他インフラの整備により刻々にさま変わりが進んでいる。

まず最初に、パンタナールの外縁部を南北につなぐカンポ・グランデークヤバの国道163号線が舗装され、クヤバーカツセレスとポルト・ベリーヨの世紀のアマゾン道路も舗装された。

残りのカンポ・グランデーコルンバもコルンバ寄りのわずかが舗装工事を残すのみとなっている。これでパンタナールはボリビア側を除く三方が舗装道路で囲まれたことになる。

かつてカンポ・グランデーコルンバを結ぶ唯一の交通手段だった汽車は現在でも動いている

が、道路の舗装が終われば主役の座を道路に
け渡す運命にある。

とにかく道路、それも舗装道路ができる
と良くも悪くもその地域は急速に開発され、生態系
も変わってくる。

開発が良いことか悪いことか、これは実に判
断がむずかしい。おのおのの立場やものの見方
によっても違ってくる。

私はエコロジストの端くれだから、生態系保
護のためにはパンタナールに手を加えず、そつ
としておいてもらいたいと思う。

とはいうものの、道路や宿泊設備がなかつた
ら研究者だってそうかんたんに入れないし、一
般のツーリストならなお行けない。私が毎月
行って調査できるのも道路がついたおかげだし、
そこに泊れる宿泊設備があるからなのである。

これは私にとっての矛盾である。更に私はエ
コロジストであり、生薬研究者であると同時に
バランスニョというパンタナールのホテルを
経営しているユニウニベルツール社の人間でも
あるのだから話はややこしい。

まあしかし、この問題は余り考えないことに
している。開発と自然保護はしよせん両立しな

いが、そういう時代にめぐり合わせたのだからやむを得ない。

パンタナールをじっくり観察できるだけでも望外の幸運かも知れない。

まだ行ったことのない読者のためにここでパンタナールとその周辺の地理的説明をしておく。

パンタナールの面積は二二万平方キロメートル日本の本州の大きさ。このうち雨季で冠水するのがだいたい七〇パーセントである。

パンタナールは南米大陸のほとんど中央部に位置する堆積平原で、地殻の変動によってできた構造地形と呼ばれる大地形である。

南米の地形は大まかにいうと、アマゾン河低地をはさんで、北にギアナ楕状地、南にブラジル楕状地と呼ばれる前カンブリア紀の古い安定した地層があつて、これが南米大陸の核（コア）をなしている。

太平洋岸に沿ってはアルプス造山活動で隆起したアンデス造山帯が南北にのびており、このアンデス山脈とブラジル楕状地の間にチャコ・パンパ平原がある。また、二つの楕状地の間にもオリノコ・アマゾン平原が存在しているとこ

の二つの平原は造山活動のはじまる前に海だったところである。パンタナールはこのうちのチャコ・パンパ平原に属しており、その中でも標高一一〇メートルを越えないパラグアイ河流域の低地のことをいう。

パンタナールの周りは西北はボリビアのサンチャゴ山塊、北はアマゾン流域との分水嶺をなすパレシス山脈、東南はパラナ河と水流を分けボドケーナ山塊のケスタの急崖に囲まれている。

西と西南だけはチャコ・パンパ平原につながって開けているが、とり囲む山地がいずれも五百メートルから一千メートルの高さだからパンタナールは高い観覧席に囲まれた巨大な競技場の感じである。

雨季にはパラグアイ河やその支流の水が溢れ、一面の水の拡がりになる。

パンタナールは地質的には新世代第四紀に入ってきた若い平原で、土壌はパラグアイ河の押し流す堆積物である細かい泥、砂、細石などが約三〇メートルもの層をなしている。

これは昔のパンタナールがもっと低かったことを示している。現在でも堆積は依然として続いているから、一年で一ミリ堆積するとしたら

千年で一メートル一万年では一〇メートル堆積する。

実際はもっと早く堆積が進むと思われるが、いずれにしてもパンタナールは乾燥化の過程にあり台地の冠水しない場所では森林化の現象がかなり進んでいる。

パンタナールの中でも下流の地方が当然低いから、雨季の冠水面積はコルンバから下の方が大きい。

この地方は乾季になって水がひいても、半月形や楕円形の池沼が点々と残り、これがまたパンタナールの特色のある景観にもなっている。この池沼は「バイア」と呼ばれむかしの地文誌では「シヤラエスの湖」と呼ばれていた。

乾季が進むにつれて池の水はどんどん蒸発して池は小さくなってゆくが、逆に水に溶けた溶存塩基類は濃縮され、池の塩分は濃くなる。

バイアの周りの塩分の多いところがサリーナス（塩の場所）で、野生動物や放牧の牛が塩をなめに集まるところである。

バイアは有機塩類を豊富に含む富栄養水だからあまり辛くなつてはダメだが、プランクトンが増殖し、魚の繁殖に絶好の条件になる。

これがパンタナールに魚が多い理由で、世界でも類をみないほど規模が大きい。



わがバランキンニョ・ホテル

サンパウロからバランキンニョのホテルに行く方法を説明しよう。

マツト・グロツソ州の首府クヤバ市まで飛行機で行くのがふつうだが、車でももちろん行け

るし、南マツト・グロツソ州の首府カンポ・グラ
ンデ市までなら汽車でも行ける。

ただ、サンパウロからカンポ・グランデまで一
〇五〇キロ、それからクヤバまで七〇〇キロだ
から、バスでクヤバ、行きの直行にのつても二六
時間、汽車とバスの乗り継ぎなら丸二日で行け
るかどうかといったところだ。

ほんとうは、点と点を結ぶだけの飛行機より、
車の旅の方がブラジルの広大さがわかっておも
しろい。とくにカンポ・グランデークヤバ間には
一望千里、三六〇度視界の拡がる大平原があり、
地球の丸みを実感として味わえるようなところ
もある。

まあ、忙しい日本人には車の旅行はちよつと
無理。やはり飛行機でカンポ・グランデ経由、ク
ヤバに行くことになる。所要時間三時間だが、時
差が一時間あるから、朝九時にサンパウロを出
発すると、一一時にクヤバに到着する。

クヤバに着いたからといって、バランキン
ニヨのホテルはもうすぐなどと思つてはいけな
い。重ねて言うが、ユメにも思つてはいけない。
実はこれからが大変なのだ。

まずクヤバからカツセレスの町までの二〇四

キロを車で走らねばならない。この道路は良い。一九八四年に舗装の完成した、クヤバとアマゾンのポルトベリーヨを結ぶ国道Ⅲ号線は、未開発のアマゾンと先進地域をつなぐもつとも重要な道路でもある。

車は時速二一〇キロぐらいで走るから、追い抜きやカーブでスピードを落しても、二時間足らずでカッセレスに着く。

途中の景観はマツト・グロツソ特有のセラード（サバンナ）で、背の低い、幹や枝の曲った落木が草原の中に生えている。カッセレスの手前で四〇〇〜五〇〇メートル級の山脈を横断するが、これはブラジル楯状地の外縁部。この山脈を越えるとパンタナールの最上流地帯があらわれる。

カッセレスはパラグアイ河に画したパンタナール北限の町で、かつては金（きん）の集散地として栄えた二〇〇年の歴史をもつ古い町である。パラグアイ河はパラナ河と共にラプラタ水系の二大河川のひとつ。パンタナールの各河川はすべてパラグアイ河水系に属しており例外はない。

カッセレスで一息入れて、また出発する。雨季

はここからボートで二時間かけてホテルに行くが、乾季なら陸路で行ける。

パラグアイ河の橋を渡って五キロのところから、ボリビア道路を左に入る。ボリビアの国境の町サン・マチアスに通じているこの道路は、一名「麻薬道路」「密輸道路」と呼ばれる。意味の説明は不要だろう。この未舗装のボリビア道路を約三〇分走ってからまた左に入る。これからホテルまで二時間余りの道がすさまじい。

道といったが、これはセラード灌木林の砂地の上を車が勝手に踏み固めた、単なる筋なのだ。水があつて通れなければ、車は別に通れそうなところを探して進むだけのこと。はじめての人は驚いたり、不安になることうけ合いである。

口を利くと舌を噛むおそれのある、ひどい悪路だが、特徴あるセラードの植生も間近に見られるし、動物も観察できるから、体験としてはおもしろい。

つらい闇夜の河下り

それでも陸路で行ける乾季はまだ良い。車ならたとえ故障して、サバンナ林で夜を明かすこ

とがあっても、生命の危険にさらされることはない。

そこへいくと、雨季にボートでカッセレスからホテルに向かう時はかなりの覚悟がいる。ボートだって所要時間は二時間ぐらいだから、時間的には陸路と大差はない。

実際、まだ日が高く、エンジンも快調な時にはパラグアイ河の沿岸の風景や鳥の生態をたのしむことのできる河下りは、むしろこちらの方を好む人もいるほど。

ところが、クヤバ着の飛行機が大幅に遅れたり、舟のエンジンが故障したりして夜になると、とても快適とはいえぬ事態になってくる。

夜になっても晴れてさえいれば、寒さの問題は別としても走行そのものには問題はない。月夜なら言うことはないが、月がなくても星空なら、心配なく走れるものなのである。

ボートには車のようなヘッド・ライトはない。また、仮りにライトをつけたとしても、パラグアイ河のような大河だと、水面以外に反射するものがないから、前方の水面だけが光って、かえって見にくい。

こんな時には人工の灯りはすべて消し、月や

星の光が水面に反射したり、兩岸の森のシルエットが水に映るのを頼りに舟を走らせるのだ。

これにはかなりの経験と技術がいる。私はまったくダメ。岸の樹とその樹が水面に投影するシルエットが遠近感を狂わせて、目を凝らして見れば見るほど錯綜してわからなくなる。

北林旦那は慣れているから、晴れてさえいれば迷うことはない。それでも、パラグアイ河から支流のジャウルー河に入る最後の三〇分はかなり緊張する。河幅が狭い上にカーブが多いから、兩岸の樹の実像と虚像が複雑に交錯し、方向を誤りやすいのだ。

その点、地元の人間であるホテルの従業員は大したものだ。スピードも落さず、右に左にカーブを切りながらちゃんとホテルに着けてしまう。都会の文明生活に毒されていない彼らの五感は非常に鋭敏である。

このホテルには闇夜でも舟を自由に動かせる従業員が一人いる。さすがにこういう特殊能力は現地人の誰でもが持っているわけではなく、やはり珍しい存在。

雨季になって増水し、本来の水路以外にどこでも入れるほど水位が上がると、危険はいっそ

う増大する。どこが本来の水路かわからなくなるのである。

前に北林旦那と、水路を見失って大きな湾に入りこみ、どうしても出られず、遂に諦めてボートを岸に寄せ、夜の明けるまで待ったことがあったが、原住民でも一度や二度はこういう経験は誰でもしている。

だから北林夫人は旦那がボートでカッセレスに出かけ、予定の時間に帰らず夜遅くなると、居ても立ってもいられないほど心配する。途中で何が起ったかわからないからだ。

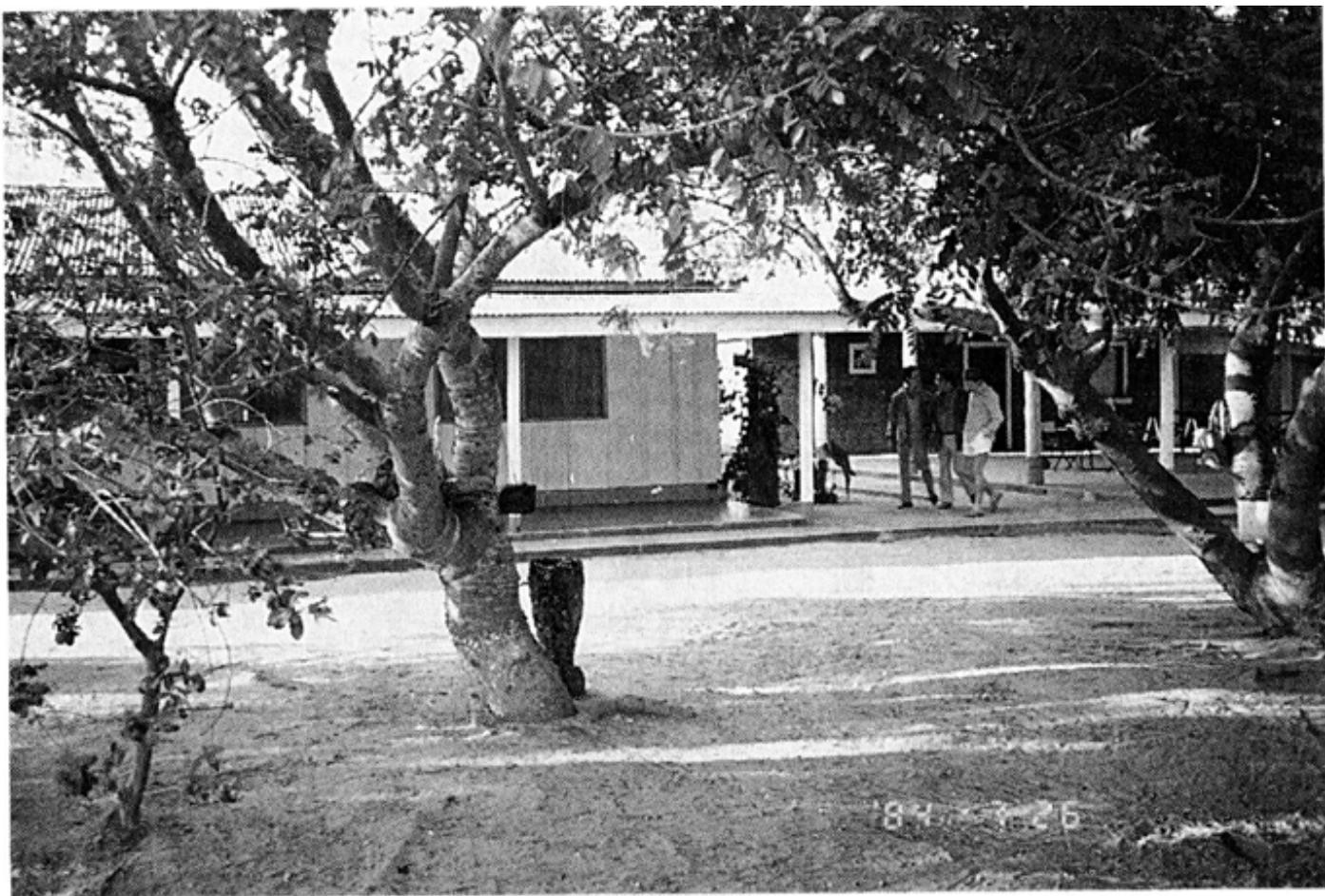
こんな時には迎えの舟を出すことにしているが、時によると迎えの舟まで帰ってこないことがある。こうなると、夫人はまんじりともせず、一夜を明かすことになるのだ。

ホテルには滑走路があるから、クヤバから軽飛行機でくれば五〇分で直接ホテルにこられる。但し、高くつくのは仕方ない。

整備されてきた”山小屋”

このバランキンニョ・ホテル。ホテルと皆が言うから、に従っているだけで、ほんとうはホテル

の名に価するような存在ではない。まず、日本の山小屋と思っていただければ間違いない。



つい先ごろまで、ホテルでは自家発電だった

部屋数一四、ベッド数は四十あるから、四十人は泊れる理屈だが、実際に四十人もの客に一度に泊られたら大変なことになる。

客そのものは四十人でも、添乗員、ガイド、運転手が五、六人加わるし、それにそんなに大勢だと、舟の船頭もカッセルスの町から数人連れてこなくては間に合わない。当然こういう人達の宿泊施設や食事も提供しなくてはならない。

最初、知らずに三度ばかり、四十人の客を受けてひどい目に遭った。以後は最高三十人で抑えることにしている。

「理想は二十人ですね。そうでないと、十分にサービスが行き届きませんもの」と言うのは夫人。

それでもシーズン中の七、八、九月、北林夫妻の睡眠時間が四時間をこすことはない。だからこの時期、私はなるべく行かないように心がけている。

船頭もコックも出来ない役立たずが行ったところで、貴重な部屋を占領するのが関の山。邪魔になりこそすれ、ホテルに益するところはない。

それにしても、ナイナイづくしのこの大秘境で、よくも六年やってこられたものと思っている。今でこそ町から電気も引き、「農村電話」という無線電話システムにも加入して、外界との連絡もとれ、テレビも入った。

小さいながらも滑走路も整備されて、軽飛行機が発着できるようになったし、ボートも自動車も数が増えて、途中で野宿を余儀なくされることもほとんどなくなった。それに北林夫妻や私を含めて、パンタナールの知識や、ことに当たっていかに処すかのノウハウも身についた。

これを進歩と呼ぶか、自然破壊とみるかは、その人の立場によって異なると思う。が、良くも悪くも、最低こういう設備や、知識、ノウハウがなかったら、パンタナールに人を招ぶことは出来ないし、また満足もさせられないのである。

その代わり、自然の保護には充分に気をつかっている。狩猟をさせると、銃器を持込む客もごくたまにはあるものの、北林旦那は、ここでは空気銃さえも使わないことを説明して、お引取りいただくことにしている。

ブラジル政府の自然保護政策は腰くだけで、ずいぶんいい加減なところが多い。しかし、感心するのは、テレビ局の自然保護に対する姿勢の良さで、一貫して自然破壊を告発する立場をとっている。

そこへいくと、日本のテレビの撮影隊は、何をしでかすか分からぬおそろしさがある。水鳥の

大コロニーに鉄砲をぶつ放すなどというのは論外としても、他にも首を傾げたくなるような行動も多いのである。

大蛇のアナコンダやワニ、トカゲ、カピバラ、ペツカリーなど、野生動物を食べる番組を撮りたいなどと言ってくる撮影隊がある。

野生動物を食べるには動物を捕えて殺さなくてはならない。それは法律でも禁じられているし、社会常識にも反することだと、いくら説明してもまさに “蛙の面に小便”。

その反面、自然を真正面からとらえようとする優秀で真面目な日本人ジャーナリストもふえている。両極端に分れるのが日本の特徴なのかも知れぬ。

感電死する鳥

このホテルにはつい先ごろまでジーゼル発電機による自家発電しかなかった。カッセレスの町から直線にして四〇キロも離れているのだからしかたがない。

ところがこの自家発電、実際に動かしてみる

と、なかなかたいへんなのである。

燃油を町から運ばねばならぬ上、再三故障もする。ちゃんとした専門家がないからメインテナンスがうまくいかない。

あまりの効率の悪さに遂に思い切って町から電気をひくことにした。弱小企業の当社としては痛い投資だったが、背に腹はかえられない。

とにかくこれでパンタナールの陸の孤島である小社の山小屋にも電気が引かれ、電気製品も自由に使えるようになる、と喜んだのだが、事はそうかんたんではなかった。

やたらに停電してどうにもならないのである。一番最初などは通電がはじまり、従業員一同ワツと歓声を挙げてから、僅か三〇分でヒューズが吹っ飛び停電してしまった。

おかしいかと、電線の下を辿って調べてみたら、なんと大きな青サギの死んでいるのが見つかった。電線に触れて感電したのである。

電線は高压線で三万ボルト、腕木に三本の線が通っている。三本の間隔はかなり広いから、小鳥や中型の鳥が留まっても他の線に触れず感電はしない。

しかし、コウノトリ、カベツサ・セツカ、青サ

ギのように大型の鳥は拵げた羽根が二本ないし
三本の中にショートして感電死し、ヒューズが
吹っ飛んで停電することになるのだ。



1986年はこの風景を見られなかった

三万ボルトの高圧でやられるのなら苦しみは
ないだろうが、鳥にしてみればまったく迷惑な

ことで「そんなのないよ……」と、クレームをつけたいところ。

このホテルにおいては停電の九五パーセントが大型鳥の感電死によるものである。

これには関係者一同頭を抱えた。むろん、一番ショックを受けたのは北林夫人。

「この動物天国のパンタナールに後から入ってきた人間が勝手なことをして、その結果、動物が殺されるなんて余りにもかわいそうよ。ねえ、なんとかならないの……」と。

こう泣きつかれては北林旦那もなんとか方法を講じざるを得ない。それに、感電死する鳥も気の毒だが、そう度々停電したのではホテルの仕事にさしつかえる。

そこで三本の線のうち、真中の一本を高くし、正三角形の形にして、線と線の間隔を広くしてみた。これは成功だった。これで百パーセント、鳥の感電死が防げたわけではないが、感電死する率は急に減ってきたのである。

それにしても、これだけ動物の保護や環境の保全に留意しているホテルなのに、ホテルの存在そのものが自然破壊の一因となっているのだからおそろしい。

ただ、ここで興味深いのは、動物たちも自衛のため、人間の手による環境の変化に適応すべく、新たな学習をはじめていることである。

鳥の感電死が減ったのは、たしかに高压線の間隔を広くしたことが主たる理由である。しかしよくよく観察していると大型の鳥が電線に留まる回数は激減している。それは明らかに鳥たちが高压線の危険さを学習し、高压線に留まるのを避けるようになった結果である。

夢の王国・釣りと食

絶妙な自然のサイクル

一九八六年はビベイロ（水鳥の集団営巣地）に鳥が集まらなかつた。珍しいことである。地元の人間も三〇年前に一度あつただけと口を揃えてふしぎがっている。

ビベイロはパンタナールには各地にあるが、

カッセレスからパラグアイ河を三時間半程下ったところにあるビベイロの規模はパンタナール最大で、推定二万五千羽のコウノトリ目のカベッサ・セツカ、ベニヘラサギ、シラサギが一堂に会しているさまはまさに圧巻。ここを見た人は思わず驚嘆の声をあげる。

一九八六年、水鳥の営巣しない理由をアメリカから毎年バード・ウォッチングに来ている鳥類学者に聞いてみた。

この学者は「はっきりしたことはわからない……」という前置きで、一九八六年の雨季が例年より雨が少なく、水鳥が充分に餌を採ることができなかつたために栄養が回らず、交尾、営巣、産卵、卵化、育雛という一連のサイクルが狂ったのではないかと説明してくれた。

これをもう少し補足すると以下のようになる。パンタナールは例年二月からはじまる雨季で一二月、一月と徐々に水位が上がり、それまで陸地だった草原や灌木林が浅く浸水する。この浸水によって草原に生えていたイネ科やカヤツリグサ科の草が枯死して有機分解し、大量のバクテリアが発生する。

するとバクテリアを餌とする小さな魚が爆発

的に増え、次には小魚を餌にするもう少し大きな魚、その次にはもっと大きな魚と次々に増えてくる。巻貝やカニもふえ、これらのものを餌とする水鳥やワニが集まり、浅い湖水のフアウナは急に賑やかになる。

魚の多くはこの増水時に浅い湖水に行って産卵するのである。そして水のひく四月、五月ごろまでに食物連鎖の法則で残ったものが河に戻り、湖は陸になり、富栄養水で肥えた土地には再び青々とした草木が生える。

パンタナールの自然はこういうキチンとしたサイクルを持っており、すべての生態系はこのサイクルに従って生活しているのだ。

パンタナールで雨が降らない、あるいは雨が少ないということはあらゆる生態系に重大な影響を及ぼすことになる。鳥類学者はこれを言っているのである。

もつとも、自然の復元力はかなり強力なものだから、今年営巣できなければ次回は例年を上回る繁殖力を示すものなのだ。

過去にだって雨季に充分雨が降らない年がいくらもあったのだから、自然のサイクルの狂いで鳥が営巣しないのならそう心配することはな

い。しかし、人間の人為的行為が原因だとすると話は別になってくる。実はそのおそれもあるから困るのである。

数年前には、この営巣地で鉄砲をぶつ放した日本人もいるし、ヘリコプターを飛ばしてこの営巣地を撮影した日本のTVグループもいるのである。

鉄砲やヘリの轟音に何万羽の鳥が驚き、あわてふためいて逃げまどうのは見方によればたしかに壮観には違いない。こういう写真を放映すれば迫力があって商業価値は絶大かも知れぬ。

だが、これは絶対にやってはならぬこと。ベニヘラサギなどはひどく驚くと育てているヒナを突き殺してしまう。絶滅が心配されるベニヘラサギの激減はまったく人為的な原因なのである。

めまぐるしい水路の変化

「今年の増水でとうとう岸のイペーの樹の根元が崩され、イペーが河に倒れてしまいましたよ……」という、北林旦那の電話を受けて、サンパウロにいた私はがっかりした。

ホテルの裏側の河べりに生えている、ひときわ大きいイペーの大木はブランキンニヨ・ホテルのシンボルだったのである。毎年八月の終りから九月のはじめにかけて、鮮黄色の花を咲かせ、訪問客をたのしませていた。

どんなに無風流な人でも、満開のこのイペーを見て感心しない人間はまずいないだろう。イペーは日本の桜と同じで、葉が出る前に花が咲くから、ひとときわ絢爛豪華なのである。

私は花もさることながら、このイペーの大木に貼りつくように身をひそめているトカゲやイグアナを観察するのが好きだった。イグアナはカムフラージュの名人だから、よほど興味深く観察しないとわからない。

暑い昼下がりにこの木に近寄ってじっと目を凝らすと、あそこにも、ここにもということであちまち二〇匹、三〇匹のイグアナが見つかる。が、はじめての人には無理かも知れない。

北林旦那の連絡を受けて、しばらくしてホテルに出かけた。なるほどイペーの大木が無惨にも河に崩れ落ちていいる。水から突き出た枝にはまだ青々とした葉が残り、枝に寄生した、ランのオンシジウム・セボレタが可憐な黄色い花を咲

かせているのが痛々しかった。

この六年ほどの間に、ホテルの敷地内の土手が水流で削られ、一〇本以上の木が河に崩れ落ちた。一見変らぬ大自然だが、パンタルの地形の変化の激しさは、他に類を見ないかも知れぬ。

パンタナールはもと海だったところだから、言うなればお盆みたいに平らで、最上流と最下流七〇〇キロの標高差がたった二〇メートルしかない。

乾季の間は水はだいたい決まった水路を流れるものの、雨季になって一面冠水すれば、乾季の水路とは関係なく、水は勝手に流れやすいところを流れるようになる。再び乾季になって元の水路に戻ること多いが、雨季につけられた水路がそのまま河になることもあるのだ。

これはパンタナールを軽飛行機で飛ぶとよくわかる。うねうねと蛇行した現在の河のほかに、過去の水路の痕跡が、無数の三日月湖や池の形で残っており、変化の激しさを物語っている。

パンタナールはブラジル側の三方を古い地質の高地に囲まれた盆地である。高地や高地の裾野の土地は固い地盤でできている。

ところが、パンタナールのお盆の中の陸地、と

どうか、非冠水地は、水が上流から運んだ膨大な砂が堆積したものであり、一見、固い土地に見えても地盤は軟弱である。

そのため、重量のある建物などはつくれない。バランキンニョ・ホテルの小さなバンガローでも何年か経つと徐々に戸や窓が閉まらなくなってしまう。

おもしろいのは井戸で、パンタナールでは井戸を掘っても無駄である。むろん、二メートルか三メートル掘って河の水位と同じになれば水は出てくる。

だが、この水は使えない。塩水で、しかも日が経つにつれて濃縮されるからである。だからホテルでは河の水を汲み上げ濾過して使う。この水はふしぎにうまい。

ピラニアに襲われない鵜

増水期のパンタナールは、乾季とはまた違った趣がある。なにより目の覚めるような、鮮やかな緑が良い。それに乾季に入れぬところにもボートで行ける。

増水で開けられた狭い水路を水草を押し分けて入っていくと、豁然(かつぜん)として大きな入江に出る。現地でバイア(湾)と称する広大な水域である。こういう、ふだん行けない未知の場所を探検するのはじつにたのしい。

この前の増水期に、北林夫妻と三人でバイア探検に出かけ、青サギ、鶉、首が白くて長い蛇鶉の三種の鳥が集団営巣しているのをみつけた。青サギや鶉は体色が地味だから、白サギやベニヘラサギのコロニーのような華麗さはないものの、生態観察をすると、けっこうおもしろい。

水鳥が営巣するのは、きまって水中林か、半分に浸っている森林である。枯木がなければ、枯木に近い、ほとんど葉のない木を選ぶ。葉が茂っているのは大きな羽根が広げられないからである。細い枯枝を組合わせてつくった、きわめて雑な頼りない巣に卵を産み、ヒナをかえしている。こんな巣だから、大風が吹くところわされて、卵やヒナが下の水に落ちることがある。

下の水中には餓狼のようなピラニアがうようよしているから、ヒナが落ちれば万が一にも助からない……と思っていた。実際、助からないのが九九パーセントなのだが、例外のあることを

発見して、三人ともびつくりした。

青サギ、鶺鴒、蛇鶺鴒の三種が同じ木にたくさん営巣しているのを、少し離れたところで観察していたら、突然、鶺鴒のヒナが水中に落ちた。かなり大きなヒナである。

「たいへん！ たすけましようよ……」

夫人に言われるまでもなく、旦那はボートをヒナの落ちた地点に近付けた。三人とも、水面に飛沫をあげながらヒナを襲うであろうピラニアの群れを予想して緊張した。

ところが、案に相達して静かなのである。近寄ってみると、ヒナは水草の間からちよこんと首を出している。

「早くいらっしやい」と夫人が手を差出したら、チャボンともぐり、別なところに顔を出した。

それから一〇分ぐらい救出活動を続けたのだが一向につかまらない。よく観察するとこのヒナ、水に落ちてあわてている様子も、こわがっている風もない。むしろのんびり水遊びを楽しんでいる風情なのだ。

「どうもへんだね……」と私。

「そうですねえ、鶺鴒は泳ぎも潜りも上手だから、大丈夫なんですかねえ……」夫人も首を傾げて

いる。すると旦那が言った。

「これは落ちたんじゃなくて、自分から飛込んだんじゃないですか……巢離れですよ。鵜は飛ぶより水にもぐる方がきつと先なんですよ。その方が餌の小魚がとれるのだから……」

なるほど、合理的な説明である。ただ、何故ピラニアが襲わないかは分らない。ピラニアの嫌う匂いがあるのかも知れないし、なにか別の仕組みがあるのかも知れない。

そういえば、成鳥の鵜や蛇鵜はいくらピラニアの多いところでも平気でもぐり、魚を獲っている。アマゾンのツメバケイ（爪羽鶏）のヒナもピラニアに襲われないことで知られているが、鵜や蛇鵜もピラニアの攻撃対象から除かれていると考えるとよさそうだ。

水鳥のコロニーのあるバイア（湾）は概して水が透明で、魚の泳いでいるのがよく見える。なんといっても数が多いのはピラニア。パンタナールに多いピラニアは、学名をセラサルムス・ギプスという奴で、平均重量は一キログラムに達する。釣っても手応えは充分。

この時のバイア探検では、別に釣りをする気

はなかつたのだが、あまりにも魚影が濃かつたのとホテルの名物、ピラニアの「ふりかけ」が切れていたという事情もあつて、衆議一致、ピラニアを釣ることにした。



ピラニアのふりかけは新鮮なピラニアを三枚におろし、皮を除き、小骨のついた身をマキ炊きのオーブンでからからに焼き、ミキサーで粉末にする。これに小麦の胚芽粉、シソ、ゴマ、青ノ

りその他を混ぜてつくる。

これはうまい。このホテルに何度も来られた「お猿の博士」こと、宮城教育大学の伊沢紘生先生ご推奨の「逸品」だ。

パンタナールで釣りをしようと思ったら、まず餌を釣る。小麦粉を練った団子をほんの少し、小さな鉤につけると小魚がいくらでも釣れる。その小魚を二つか三つかに切って餌にするのだ。

ピラニア釣りには技術も道具もいらぬ。短めの丈夫な竹竿に太い糸をつけ、ワイヤーのハリスと頑丈なハリがあればよい。

ぐっと引込んだらぱっと合わせて、力まかせに上げる。どんな下手でもピラニアは釣れるし、けっこうおもしろい。

ただ、一キロクラスが連続して一〇匹もかかると体力的にかなり疲れる。ピラニアは釣るより鉤をはずすのが面倒なのだ。

ピラニア釣りに熱中していたら、北林夫人に「ワニが来ていますよ」と注意された。見るとワニがボートから五〇センチばかりのところ、寄って来てじっとしている。一・五メートルぐらいの中型である。



ピラニアと一緒に泳ぐ子供たち

ふつう、ワニは人間が近付くと逃げるものなのに、このワニは逆に寄ってくる。大增水のおかげで入れた人跡未踏の地にいるワニは人間を恐れないらしい。

「ワニさん、お腹すいているの……」と夫人がピラニアを一匹ワニの鼻先に放ったら、全身を激しくくねらせてガツとピラニアをくわえた。ワニのあげた水しぶきでこっちはビシヨ濡れた。

このワニ、人間の前で食事するのは具合悪い

とみえ、ピラニアをくわえて近くの藪の中に入ってしまった。(ほんとうは不安定で力の入らぬ水中で獲物を処理するのを嫌って、岸边に運ぶのである)。それきりワニのことは忘れてピラニア釣りをしていたら、さっきのワニがまた近付いてきた。そして驚いたことに、今度はボートのふちに前足をかけてボートに上る気配なのである。

「あらあらワニさんだめよ」と夫人が、ピラニアをもう一匹すぐ近くに落としてやったら、すごい水しぶきをあげて魚を捕まえ、また悠々と藪の中に入っていった。

なんのことはない、犬が食べものをねだりにくるようなもので、おかしかった。

爬虫類のワニは犬のように表情が豊かではないから、お義理にもかわいいたは言いかねるが、野生の、それも人間とは初対面と思われるワニがこんな行動をとろうとは意外中の意外だった。

ピラニア除けフンドシ

「サルがカヌード(ストロー)で水をのむ」

「ワニが背なかを下にして泳ぐ」

「水鳥、水に入らず」

これすべて、ご存知猛魚ピラニアの恐怖を言
いあらわした言葉である。

チグレ・ダ・アグア（水の虎）の異称もあるし
英語でもタイガー・フィッシュというのだが、そ
んな言葉よりピラニアの名前の方がはるかに売
れており、世界中の誰もが知っている。

ピラ（魚）ニヤ（歯）で、歯のある魚という意
味だが、ほかにシユピツタ、ピランベなどという
地方もある。

恐怖の猛魚には違いないが、私はパンタナ
ールで泳ぐし、現地の子供も平気で河に飛込む。血
の出るような傷のない限り滅多なことで襲われ
るものではないのかも知れない。但し、保証の限
りでないので責任は負えぬ。

パンタナールのインジオは決して深いところ
へ泳いでいくようなことはしなかった。インジ
オは素っ裸だから男の場合だと真っ先に狙われ
るのが股間の男性自身である。

ピラニアに関してもっとも古い記録と思われ
るガブリエル・S・ソウザが一五八七年に書いた
「ブラジル情報」に「インジオはピラニアのい
る河には入らない。何故なら腰の深さまで入る

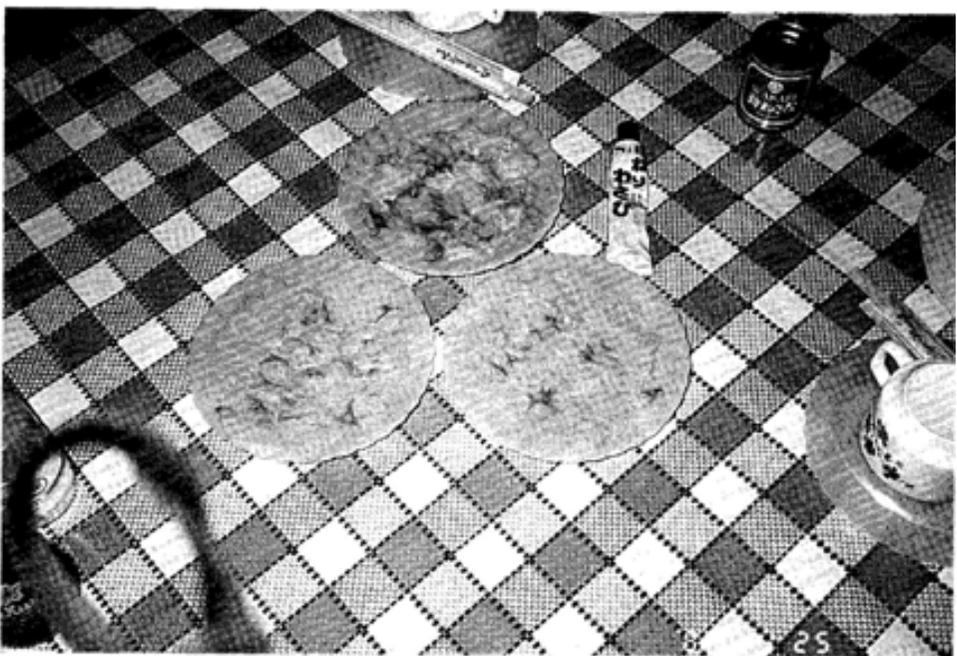
と、残忍なピラニアが性器に飛びかかり、根元から切りおとしてしまうからだ」とある。

こういう被害はむかしから絶えなかつたようだ。雌牛の場合だと乳房を真先にやられるが、深いところにはいかないインジオの女性ではほとんど被害を受けていない。

魚を獲るのに、どうしてもある程度の深さまで水に人らねばならぬパンタナールのインジオは、男性自身を保護するため、野生動物の生皮でプロテクターをつくった。

インジオのペニスケースは各地にあるが、ピラニア除けに用いたのはペニスケースというよりむしろ皮製のフンドシで、ポルトガル人はこれを特に“ポールド”と称していた。ピラニア除けとしてはかなりの効果があり後にはインジオ以外でも使つて重宝した。

この皮製のフンドシと、アマゾン河口のインジオ女性がカンジルー（何種類もあるのだが、ナマズ目トリコミテリア科の小魚。女性の敵で、ヌルヌルした粘液を出し、性器に入り喰い荒らす。致命傷になることもある）除けに用いた土器製の三角フンドシのタンガは生活の知恵が生んだいずれ劣らぬ傑作といえる。



ホテルで出されるピラニアの刺し身

ところでパンタナールのピラニアが最近たいへんな勢いで増殖したのは事実である。現在ではピラニアはパンタナールの魚の中で明らかにドミナント（優勢）な種となっている。

どうしてピラニアが増えたのかについての説明には、皮革用に大量のワニを乱獲したため、ピラニアを主な餌とするワニが減り、敵がいなくなった。ピラニアが増えたとする説がある。

もうひとつは、そうではなくて年間何万頭と

密殺されるワニは皮の一部だけを取って、残りは再び河に投げこまれる。これがピラニアの餌となつて増えるのだとする説もある。

これはどちらも正しく、そして相関関係をもっている。おそらくこのほかにも人間の殺す野生動物の肉や、牛を屠殺した残骸などもピラニアの餌となっているのは間違いない。

人間が生態系に参与するとロクなことにならないという見本でもある。

独特なピラニアのうま味

ピラニアのうまさについては何度かふれたことがある。

但し、うまいピラニアはパンタナールにいる黄色い、学名をセラサルムス・ギプスという種類に限られるような気がする。

一五種もあるピラニアを全部味わったわけではないが、パンタナールの大きなピラニアは体形がパクー型で肉付きがよく、頭部が丸味を帯びている。アマゾンのは一般的に体形が小さく、頭部が尖って鋸歯のある受口の下アゴがいちじるしく突出している。

パンタナールの大きなピラニアが何故うまいかについていろいろ文献を当たってみたが、そんな記録はなかった。

それもそのはずで、魚のうま味成分の研究は日本が世界随一、ブラジルではこの部門の研究はほとんどなされていらないといつてよい。

第一ブラジル人はこの魚を食べないし、うまいとも思っていない。よほどピラニアに好意的な解説書でも”ピラニアの肉はそうまずいものではない……”という程度で、食用魚としての価値を認めていない。

そこでピラニアのうまさについて自己流に解釈してみた。

うま味成分は魚のことだから核酸系のイノシン酸が主であり、これにグルタミン酸をはじめとする各種のアミノ酸のからんでいることはまづ間違いない。

しかし、これは多かれ少なかれ、すべての魚について言えることで、ピラニアに限ったものではない。何かピラニア独特なものはないかと考えていたら、筋肉が他の魚より発達していることに気がついた。

鋭い鋸歯で動かす下アゴの筋肉はすばらしい

ものだし、獲物を襲うためのスピードも瞬発力もすぐれている。ピラニアは全身これ筋肉の塊（かたまり）といつてよい。

筋肉を動かすエネルギー源は筋肉中に含まれる通常ATPといわれるアデノシン3リン酸という物質で、これが分解する時のエネルギーで筋肉が運動するのである。

ところで、これが大事なところなのだが、ATPは分解するとうま味成分のイノシン酸に変化する。

ふつうの魚の筋肉中には100グラム中10〜20ミリグラムのATPが含まれているが全身筋肉のピラニアはATP含有量が平均よりはるかに高いと考えられる。

「そんなむずかしい理屈をつけなくても、新鮮なピラニアならどうやって食べてもおいしいんですよ・・・」

と、北林夫人にからかわれた。夫人がピラニアの刺し身をつくる場合、午前にとれたピラニアを夕食に出すようなことはしない。夕食に出す刺し身は夕方釣って来たピラニアに限られる。

「だって、肉の弾力と色艶がちがいますもの。今釣ってきたのは切口が光り輝いているんです」

こういう刺し身はうまいにきまっているが、ピラニアは小骨が多いから、骨切りして細かい糸づくりにしなくてはならない。辻留流のハモの骨切りのように一寸を二四に刻めば最高だが、まあ、そこまでは必要ない。

夫人考案のピラニアの焼きものも、なかなかいける。これはピラニアにたっぷり塩をまぶして焼き上げる、ちよつと鯛の浜焼き風の焼魚である。

ウロコのまま強火で焼き、食べる時は塩で固まったウロコ付きの皮をガバツとはがして身の方を食べるのだ。しかし、これはサイカンガという、別種のピラニアでやると一段とうまい。

強精効果

ピラニアのうま味成分についてはいずれどこかの研究機関に依頼するつもりだが、私の推定した仮説はそう狂わないはずと思っている。

そこでもう一方の強精作用についてもいろいろと実地に試してみた。

即殺したピラニアのエラと内臓をとってきれいに洗い、そのまま鍋に入れ水から煮る。一〇匹

も入れると大きな鍋でも一杯になる。

浮き上がるアクと脂を丹念にすくいながら一時間も煮ると魚が崩れてくる。これをハシで突っついて徹底的に煮溶かしたのち、目の詰まったザルで漉し、更に煮て浮き上がる脂肪をすくい取る。

もう一度メッシュの細かいふるいにかけて、液をそのまま冷ます。かなりドロリとした液で、室温に下がったところで冷蔵庫に入れると液はゼラチンとなって固まる。

このゼラチンは魚のエキスの塊で、いわばブイヨンだ。スープストックとして使えるし、イノシン酸が多いからじつに深味のある味となる。ゼラチンになるのは筋基質タンパク質のコラーゲンが固まるためで、これが強精に効果があるとされている。

しかし、筋基質タンパク質はどの魚でも、全タンパク質中に二〜一〇パーセントぐらい含まれている。

ピラニアの魚肉中にコラーゲンが多いのはたしかとしても、それだけでは強精効果と直接には結びつかない。コラーゲンの多い魚なら、カレイとかエイとかほかにもたくさんあるからだ。

ところが何度も現地でピラニアのスープを飲み、またサンパウロに持ち帰ったゼラチンでスープをつくって味わっているうちに妙なことに気がついた。

うまさの点ではどちらかというところ、ゼラチンを溶かしてつくるスープの方がうまい。この方がアクや脂をていねいに除いているので、洗練された味になっている。

そこへいくと、現地でつくるピラニア・スープはアクも脂も大きっぱにしかとっていない。このスープは熱いうちだとわからないが、一旦冷えたのを温め直すと不快臭がひどくて飲めるものではない。

各種の含硫化合物が汁全体に溶け出すのである。しかしつくりたてのスープには臭みはなく、これを飲むと身体が燃えあがるような、毛穴がふつふつと開くような燃焼感を感じる。ふしぎなこと、ゼラチンからつくるスープではこの野生的な燃焼感が出ないのだ。

アクに強精成分のあるわけではないから、あるとしたら脂質である。そこでピラニアの脂肪を調べたら、これがやはりあった。

ピラニアは脂質の多い魚で、季節にもよるが

産卵期には脂質含有量が一五パーセントぐらいに達する。この脂の中に強精物質があるのである。

ビタミン、ホルモンにつぐ第三の生体調整物質として注目されているのがプロスタグラディンで、その前駆体であるエイコサペンタエン酸（EPA）が、かなりの比率。ピラニアピラニアの脂に含まれている。

これは特異な構造をもつ不飽和脂肪酸の一種で、抗血栓作用や動脈を弛緩させて血圧を下げる働きもあるし、悪玉コレステロールを減らし、善玉コレステロールを増やす働きもある。また、ホルモンや酵素を強化したり抑制する作用もある。要するに精力減退防止効果や回春効果があるということだ。

ピントードの味噌焼き

このごろは刺し身を好むブラジル人客が多くて困っている。困るといふのは刺し身を出す予定のない時でも、戦場のように忙しい調理場にピラニアを五、六匹持ったブラジル人が駆け込み、「オバサン、サシミ、サシミ！」とやるから

である。

人の好い北林夫人は結局つくってやるのだが、それが驚くほど大量に食べるのだ。材料代がタダだから良いようなもので、これがサンパウロの日系レストランだったら、目の玉が飛び出るほどとられてしまう。

このごろサンパウロでも、川魚料理を専門に食べさせるブラジル人の店が何軒かできた。スープ、フライ、炭火焼き、ムニエル、煮込みといろいろ工夫はしてある。だが、味の方は正直言って感心したものではない。

またまた自慢になってしまおうが、わがバランキンニヨのホテルとは鮮度が違う。それに水質からくる味、臭みの差があり、焼きものでは火力の差もある。

レストランの炭はユーカリ炭を使うのがふつうだが、ホテルでは薪のオキで焼く。アンジッコというタンニンの多い、比重1・2のマメ科の硬木のオキである。このアンジッコは非常に火力が強く、炭に焼けばウバメガシの備長炭を上回る炭となる。

手前ミソで言うのではないが、北林夫人の「うまいものを食べさせたい」情熱はハンパではない

のだ。

夫人の開発した料理で、何度食べても感嘆を深くする食べものを紹介しよう。

題して「ピンタード砂ずりの味噌漬」である。

ピンタードはナマズの種類で、食べてうまいことではブラジルでも定評がある。二〇キロになるような大物もたまには釣れるが、通常は五、六キロで、まずは手ごろな大きさ。

ナマズは体高に比して幅が広いから、ピンタードも腹の正中線を開いて内臓をとり出すと、砂ずりの部分が大きく広がる。ちょうどマントを広げた感じなので、現地ではマンタ・デ・ピンタード（ピンタードのマント）と言う。

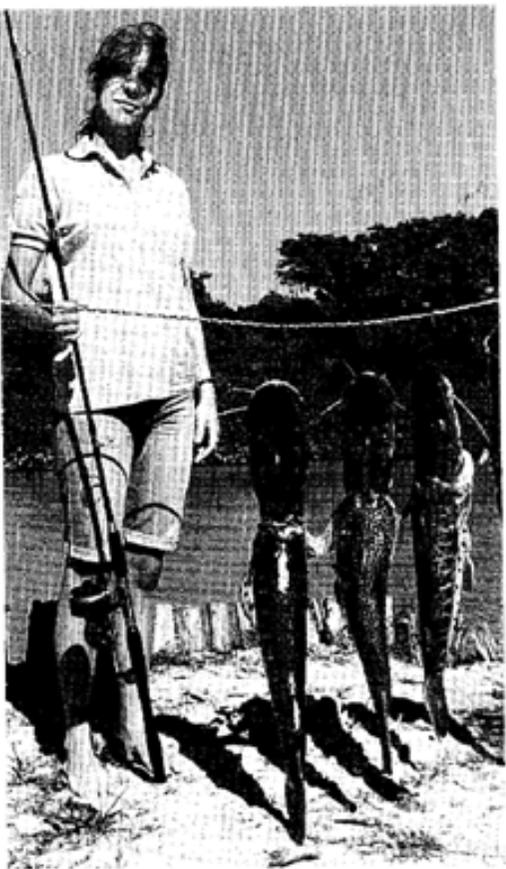
この部分を切りとると、直角三角形の形をした厚い切り身が左右二枚とれる。骨は皆無。これに味みそ（塩でも良い）をたっぷり塗りつけ、冷蔵庫に二時間ほど置く。

それからしみ出た水分を味噌と共に拭きとり、薄くスライスして炭火で焼いたり、フライパンで油焼きにして食べる。ただそれだけのことなのだ。これが絶品なのだ。

ピンタードの砂ずりの部分はほかのところよ

り繊維質が多く、シコシコしている。白身で淡泊なのに、パンタナールの大自然の精が凝縮したような、ふしぎな味わいがあるのである。

ロブスター(伊勢エビ)をボイルしたのに似てもいるが、あれほど自己主張は強くなく、ずっとひかえ目、そのくせ小味が利いている。



味に定評があるビンタード

この切り身の焼きものを黙って出されたら、よほど魚通の人でも正体を言い当てることはむずかしい。事実、これまで当てた人は一人もいないし、だいたい魚だと思っ人が稀なのである。

この味噌漬、保存が利く。二時間漬けて脱水したところで水気を拭い、ラップに包み、冷蔵庫で凍らせるのだ。これだと解凍してもベチャベチャせず、ほぼナマの状態に戻る。ピチット・

シートと同じ理屈だ。

場所で違う魚の味

川魚の味について日本人はある種の先入観をもっている。

臭い、小骨が多い、脂が強いなどで海の魚と比較して敬遠する傾向にあるようだ。

たしかに川魚はそういう性質をもっているから海の魚に馴れた人には好まれないのは無理もないのだが、魚の特質をよく見定め、それに適した料理をすれば、ブラジルの川魚は充分いける味なのである。

ただブラジルの場合、同じ種類の魚でも、場所によるというか棲息する河による味の違いがかなりある。

例えばドラードでも、パラナ河で釣れたのと、パンタナールのジャウルー河で釣れたのでは味が格段に違う。むしろジャウルー河で釣った方がはるかにうまい。

ジャウルー河の水は透明で清澄なのである。

河の水は、当然のことながら下流より上流の方が水質はよい。ほかにもどこを流れてくるか

が水質や濁度に大きく影響する。

パラナ河の流域はテーラ・ロツシヤ地帯が多いため、赤土が溶けこんで河の水は赤濁している。したがって、この濁水に棲んでいるドラードはどうしても泥臭さが抜けない。

これに対して、パンタナールの湿原を流れるパラグアイ河の本支流はずっと水がきれいなのだ。そのパラグアイ水系の中でも、ジャウルー河は一番上流にあるため、水は一段と清澄になる。

清澄な水でもここの水は貧栄養水ではない。むしろその逆で、雨季に冠水する大湿原は世界でも珍しい富栄養水となっていて、多くの魚がひしめきあっている。

さて、魚を釣ることはさっぱり興味のない私だが、食べることには飽くなき執念を燃やしている。

なにをどうやって食べたらいいか、まだ結論は出そうにない。しかし一般的にいえることは、川魚は下ごしらえをきちんとしてから料理にかかるのが要諦。

つまり、ウロコのあるなしにかかわらずレモンをふりかけて丹念にぬめりを取り、きれいに洗ってもう一度レモンとうす塩をまぶしておく。

こうすると少なくとも臭みはとれる。

有鱗魚に小骨の多いのはやむを得ないが、それがいやならピントード、バルバードやのようなナマズを選べばよい。



釣った魚を河辺で料理する著者（左）

ナマズの食べ方を紹介しよう。

二センチぐらいに筒切りにしたのを小麦粉をつけてフライにし、味を封じこめておく。次に深鍋に少量の油をしき、ニンニク、玉ネギ、トマト

のみじん切りをいたため、別にナマズの頭からとっておいたダシ汁を注ぎ、これで筒切りのフライを煮込む。

ワインをかなり大量に入れ、塩、胡椒で味つけする。多めの汁をつくって汁の大半をとり出し、マンジョカ（キャツサパ）粉を溶いてとろ味のある汁をつくり、熱いうちに食べる。

一種のムケツカ（揚げ魚の煮込み）だが、海の魚のバデージョ（ハタの仲間）でつくるムケツカと比較してもけっして遜色はない。

あっさりした魚料理なら、ペルー料理の“セビッチ”をピラニアを材料にしてやればよい。

小骨ごとごく細かく切って、塩をふってからレモンのしぼり汁に漬けこむ。これに刻み玉ネギを加え、トウガラシを振って食べるのだ。

釣り人の夢

はじめてパンタナールに行つて、はじめてドリードを釣った人はひどく感動する。

とくに日本から来た人には強烈な印象らしく、たいていの人は身体がガクガク震えるほど興奮するようだ。それはそうだろう。日本でこんな経

験を味わえるわけがない。

ブラジルだってドラードを釣ることはSonho de Pescador(釣り人の夢)なのである。

ドラードという魚はなにより姿がよい。鉤にヒットすると黄金の魚体をきらめかせて二度、三度と水上に跳ね上がり華麗にフアイトする。もちろんヒキも強い。それにこの魚は食べてもうまい。

見た目がよく釣っておもしろく食べてうまい三拍子揃っているのだからReidos Riós(河の王者)と呼ばれるのも無理はない。

ドラードより大きい魚や食べてうまい魚はほかにもあるが、こうすべての条件が揃った魚はドラードだけ。まずは他を断然引き離れた花形スターである。

こんなことを言うと私がさも釣り上手に聞こえるかも知れぬ。だが、実際の私はほとんど釣りをしない。だいいちリールの扱い方も知らない。別に殺生を好まぬという殊勝な心がけからではない。単なるものぐさなのである。かかるか、かからないか分からないのに、糸を垂れてじつと待つ辛抱強さがないのだ。

その私が、数年前はじめてドラードを釣った。薬草を採取にボートで行った帰りに、船頭がどうせ帰るならルアーを流しながら帰ろうという。それもよからうと、生まれてはじめて、船頭の手で釣ったという次第。

ドラードは生き餌で釣ることもあるが、パンタールでは（スプーン）を流しながら釣るのがふつう。海のカマスと同じで、キラキラ光るものに喰いつく習性をもっている。

エンジンの回転を落とし、ゆっくり下流から上流に上るのである。

どうせ釣れはしまいから吠え猿でも探そうと、岸辺のカマラの大木を追って注意深く観察し、運良く猿のフアミリーを見つけた途端、ガクンと糸が引張られて身体が横に倒されそうになった。

「かかったかな、沈木に」 と思って態勢を立て直してぐっと糸を引いたら、四、五メートル下流でいきなり黄金色の魚体が跳ね上がった。

「おっ、でかいぞ」 と船頭。

「どうする……?」 ときいたら 「引っ張ればいいじゃないか……」 という。

それもそうだと遮二無二引き寄せて船頭と二人がかりでボートの中にとり込んだ。あとで量つたら九キロ八〇〇あった。かなりの大物である。

ところでドラードをはじめて釣ったというのにさっぱり興奮しないし、感動も湧かないのは我ながらおかしかった。どうやらパンタナールの大魚を見慣れすぎて不感症になっただけらしい。これまでバランキンニョのホテルでのドラードの記録は一七・五キロが最高で、二〇キロの大台が破れない。

ものの本にはドラードは体長一・四メートル、体重三〇キロになると書いてあるが、少々疑問。一メートルを超えるドラードなど見たことがない。

その代わり体重がふえるといちじるしく厚みを増し、一五キロを超えるとひと抱えもあるマダロ的体型になってくる。

ピラニアの仲間

パクーという魚は、パンタナールではドラード、ピンタードと共に、人気釣り魚のひとつであ

る。ピラニア型の体型で、体高が高く、体長とあまりかわらない。

ドランドは、パンタナールにはたった一種しかいないが、パクーは小さなパクー・ミリンから大きなパクー・カラニャまで三属三一種もいる。

カラシン亜目、セラサルミ科ミレイ亜科の魚で、系統的にはピラニアに近い。セラサルミ科は一名ピラニア科ともいわれ、パクーはピラニアの仲間なのである。

パクーの仲間にもメチニス属の数種は特にピラニアに似ており、よく間違われる。解説書にもピラニアには、四〇種もあると書いているのであるが、これは明らかにパクーの仲間をピラニアと混同している。

パクーは、下アゴの歯が二列に並んでおり、見た目は相当ものすごい。ただし、ピラニアのような鋭い鋸歯ではなく、丸みを帯びた臼歯である。

パクーは、小魚も食べるが、基本的には肉食魚ではなく、ツクン椰子や、ブリチ椰子の実、ジニパツポの実を主食としており、あのゴツイ歯は硬い実をかみ砕くためにある。



「無冠の帝王」パクー

種類の多いパクーの仲間でも釣り魚の対象となるのは、大きくなるコロソマ属のパクー・カラシニヤで、これは一五キロに達するのがいる。しかし、普通は三〜六キロというところである。

ラプラタ水系の魚で、パラナ河、パラグアイ河、ウルグアイ河や、その支流にはどこにでもいる。昔は、サンパウロのチエテ河にも沢山いた。アマゾン水系には、パクーそのものはいないが、同属近縁種のタンバキがいる。

タンバキは、アマゾン有数の食用魚のひとつ

で、体型も食性もパクーと同じ。河辺の木から実の落ちる音を聞いて集まるのは、このタンバキである。

ただ、タンバキはパクーと違ってウロコが大きく、体色もパクーのように黒くなく明るい銀色をしている。

パクーは、体色が黒く全体が地味で、ドラードのようなはなやかさはないが、「無冠の帝王」の名称がある。

ドラードはハリにかかると水上に跳ね、躍り上がり、華麗な姿を見せるが、パクーは水上に跳び上がらない。しかし、ヒキはものすごく強く、ドラードの倍といわれている。

それに食べてもうまい。かつてサンパウロ州、パラナ州、マツト・グロツソ州に入った日本移民は、このパクーでつくるカマボコを最高のご馳走にしたほどである。

ただしこの魚は脂が強いから、丸焼きにする場合、天火に入れて焼くと脂が抜けずしつこい味になる。

やはりこれは炭火で脂をじゃんじゃん落しながら焼くのがよい。一日ほど味噌に漬けてから焼くと最高。味噌の焼ける芳香が食欲をそそる。

つまり、派手ではないが釣っておもしろく、食用としても優れているところから、「無冠の帝王」の名がパクーについたのであろう。

クヤバには「パクーの頭とピラカンジューバの尻尾と、クヤバ牛の肉を食べたら、もうマト・グロツソを出ていかない」との諺がある。

しかし、これはどんなものだろうか。私にはパクーの頭が、ピラニアの頭よりうまいとは思えないのだが……。

アカエイの毒

ホテルの前を流れている河をジャウルー河という。ラプラタ水系の河としてはもつとも上流にある河で、パレシス山脈の支脈であるアグアペイ山脈によってアマゾン水系のグアポレ河と分けられている。

ジャウルーというのは、ジャウー（ナマズ目ピメロジ科の大魚）の棲息場所というツピー語だから、昔からこの河にジャウーはたくさんいたらしい。

ジャウーはラプラタ水系としてはまずが一番の大魚。アマゾン水系の大ナマズ、プライーバや

有鱗魚のピラルクには及ばないにしても、大きなジャウーは一〇〇キロを超す。

もつとも今では一〇〇キロを超すジャウーはもういないのではないかと言われており、この間新聞の写真に出ていたのは八四キロで、これでも一・七メートル、太さはふつうの大人の倍であった。



40キロのジャウー

ジャウルー河で釣れるジャウーは三〇〜四〇キロ級が平均で、五〇キロを越す超すようなのは滅多に釣れない。

ジャウーを最初から狙って釣る人はまずない。ピントードやスルビンを釣っている時に稀にかかってくるいわば外道だ。

それにこの魚は大きくなると脂が多くて、どうにも食べられたものではない。ジャウーがうまいのは精々五キロまでの幼魚だが、こういう小さいのは漁獲が禁じられている。

ジャウーがラプラタ水系で一番大きな魚とあったが、よく考えたらもつと大きなのがいた。エイである。ガンギエイ目アカエイ科でラプラタ水系には四種いる。

大きなのはヒレからヒレの横幅が一・五メートル、体重一五〇キロにもなる。この前、ホテルでブラジル人が釣ったのは幅一・三メートル、重さは一〇〇キロあった。このぐらい大きいと横にしても縦にしてもボートの幅に収まらず、両舷からヒレをダラリと垂らしていた。

エイはボートに引上げる時に必ず尾を叩き切る。鞭のような尾を振って毒針を打込もうとするから危険極まりない。

アカエイはどのエイでも尾に毒のある刺棘をもっている。棘の基部には猛毒を有する毒線があつて毒針とつながっており、危険が迫ると尾

を振って毒針を敵に打ち込むのである。

淡水のアカエイに刺される被害はブラジルでは数が多い。

アマゾン水系にもラプラタ水系にもいる上、水温の高い浅い場所を好むから、日中に河辺のごく浅いところにもやってくる。いきおい、河辺で仕事をしたり、水浴する人間に被害が多くなる。

毒針は動きのぶい底生魚であるエイの防御器官だが、これにやられるとひどいことになる。猛烈な痛さで七転八倒し、同時に血圧が急激に下がるのが特徴。

痛みは持続的でいつ迄も続き、刺された場所の周辺は組織が壊死し、終生ケロイド状のはん痕となって残ってしまう。通常死ぬことはほとんどない代わりに三カ月はまともに動けない。

ところでエイの毒の化学的、薬理学的研究は世界的に遅れており、毒の正体は芳香族アミノ酸を多く含むタンパク質であることぐらいしかわかっていない。

研究が遅れているのは検体が自由に入手しにくいからだが、パンタナールにきて研究すれば検体はいくらでも手に入るし、研究論文でも書

けば博士誕生は間違いないところ。

食性の幅広い淡水魚

海水魚と淡水魚ではもちろん餌が違いますが、大ざっぱに言えば淡水魚は海水魚に比較して食性の幅が広いように思われる。

パンタナールの釣りで使用している餌の種類だけでもずいぶんの数となる。スプーンとか擬似餌とかの人工餌はさておいてもかなりバラエティに富んでいる。

まず動植物ではミミズ、ムスンを筆頭にランバリ、サウアをはじめとする小魚、トライイラ、ツビラ、ピアウなど中形魚の切り身などが代表的。

そのほかに肉の切り身でもよいし、牛や豚の心臓とか肝臓でもよく釣れる。小魚を釣るならハムやチーズの角切りでけっこう釣果は上がる。パンタナールの魚にも動物食と植物食があるが比率からいえば圧倒的に動物性の餌をとる魚が多い。

植物性の餌を食べる魚にはピアウスー、ピアウなどがあり、これは茹でトウモロコシや練り

餌でよく釣れる。動物食と植物食を混食するものにはパクーやピラカンジュエーバがある。

パクーという魚はおそろしく食性の幅の広い魚で、動物性の魚、カニ、貝から植物性のジニパツポの実、ツクン、ブリチー、アクリ椰子の実、それにブグレイロという水辺の樹の花の落ちたのまで食べてしまう。

パクーは淡水魚としては珍しく臼歯をもっていて、硬いヤシの実だろうがカニだろうがバリバリ噛み砕いてしまう。海のタイも臼歯だが、大きさとゴツさにおいてパクーの方がはるかに上である。

この魚は同属異種のアマゾンのタンパキと共に木の実の落ちる音で寄ってくる奇妙な魚でもある。だからこの魚を釣る時は木の実をはりにつけ、ポチャン、ポチャンと何回も水面を叩いて魚を寄せるのである。静かに、あくまでも静かにという日本の川釣りとは大違いだ。

ここのホテルには世界各国からいろいろな釣り人がやって来てそれぞれの流儀で釣っている。餌は現地で調達するのがふつうだが、中にはわざわざ自分の国から持参した餌を用いる人もいる。

サンパウロに駐在しているK氏は仕事で日本に行った際、ヘラブナ用の練り餌を手に入れた。日本のことゆえ、ヘラブナの習性や食性を充分考慮した餌である。

K氏はこの餌をブラジルに持ち帰り、パンタナールでためしてみた。日本のヘラブナ釣りの餌がブラジルの河魚にどこまで通用するか大いに疑問だったのだが、結果は大成功だった。

ヘラブナの練り餌で二〇センチほどのピアウ（カラシン科レポリヌス属）がおもしろいように釣れるのである。K氏によると、なにか練り餌の匂いというか、香りに秘密がありそうだとのこと。

大物釣りばかりが釣りではなくて、河岸から小さい竿で小さい鉤を使うこの釣り方もけっこうたのしめるものらしい。それに植物性の練り餌だとピラニアにやられることがないので安心。

しかし、正直いって植物性の餌を専門に食べている淡水魚は食用としてはあまりうまいものではない。チラピアのような例外もないではないが、パンタナールではちよつと見つからぬ。

ピアウは紡垂形の、コイのように姿の美しい魚で、いかにも魚らしい魚である。だが小骨がやたらと多い上、肉質そのものも肉食魚に較べる

と明らかに劣っている。



カヌーで晩のオカズを獲る原住民

性転換する魚

一般にブラジル人は、きまりきった魚をきまりきった調理法で食べ、かわった魚やかわった食べ方を好まない。

グロテスクな魚もまずダメ。パンタナールに多くいる蛇によく似たムスンなどはさしづめ好まれない方では代表格だ。

ところが、これはあくまで一般論であって、ブラジルにだってムスンがうまいという人もいるのである。例えば一九一三年に出版されたライムンド・モラエスの『私のアマゾン事典』には、「ムスンの肉はすばらしく八つ目ウナギによく似ている。これはアマゾン平原の非常にすぐれた食べもののひとつであることは間違いない」と絶賛している。この人は外見にとらわれず美味を追求する珍しいブラジル人だ。

じじつムスはタウナギ目、タウナギ科の一目一科の古代魚に近い魚で、中国で美味な魚として定評のある黄鰻(ホワンシヤン)の近縁種。清代の大食通、袁枚は『随園食单』の中でこの魚の三種の食べ方について述べている。

精のつく魚としても知られ、中国には「小暑裏の黄鰻(ホワンシヤン)は人参に勝る」という俗諺がある。人参はもちろん薬用の高麗人参のことである。

このムスン、ブラジルではまず食べない。その代わり釣の餌になる。二〇〜三〇センチぐらい

のを一匹がけにして鉤につけると、ピントードやスルビン、バルバードのようなナマズの好餌となる。

この魚はエラ呼吸のほか、口の側面と咽喉部の粘膜をふくらませて空気呼吸をする。

魚の中ではもつとも酸素欠乏に強く、パンタナールなどでの環境では乾季になると穴を掘って泥の中で休眠し雨季になるまで待つことができる。空気呼吸のおかげである。

ウナギのように全身ヌルヌルした体液で覆われているが、この体液のために身体が干上がらず、泥の中で永いこと生きていられるのだ。

釣りの餌としてすぐれているところから需要は向上しており、値段はけっこう高い。ただ、餌にするのは大きなのはだめ。せいぜい三〇センチぐらいまでである。

値段が良いとムスを養殖して売ったら儲かるだろうと考える人も出てくる。ところがこれがそうはいかないのだから自然はおもしろい。

つまりこのムスは卵から貯化して五、六年はすべて雄なのである。ムスは五〇センチ以上で成熟してから雌に性転換する妙な魚なのである。

したがって孵化したムスンにいくら餌をやっても五、六年経たないと殖えないから採算がとれないのだ。

この間パンタナールで七〇センチぐらいのムスンを五匹手に入れた。この大きさなら雌のはずである。なにはともあれ、料理して食べようと、北林夫人と料理にかかった。ところがヌルヌルしてつかめるものではない。

どうしようかと考えたが、あまりつかみにくいからひとおもいに熱湯をかけて殺してやろうと思い、流しに栓をしてむすんを入れ、上から熱湯をかけてみた。

残念ながらこれは大失敗だった。死ぬどころか白い粘液を出して暴れ、ついには流しの外に飛び出してしまった。なんとも熱に強い魚である。そういえばこの魚は湯のように熱い泥地でも平気なのである。

鋭い牙も毒もないムスン。唯一の防衛手段は大量の粘液を出すことなのだ。

独り者には毒

どうしようかと考えていたら「氷につけたら

どうなんでしょうね……」と北林夫人がアイデアを出した。

そう言われてムスは暑さには強いが、寒さには弱いことに気がついた。パンタナールでも戸外の水槽に入れておくと七、八月の寒波で全滅することがあるのだ。

それならばとムスをアイスボックスに入れ、氷をたくさん放りこんで、さらにごていねいに塩をひとつまみ入れてみた。

これは絶大な効果があった。暴れていたムスの動きが次第に弱まり、一〇分足らずで仮死状態になってしまった。こうなれば料理するのはかんたんである。

ウナギと同様に目打ちで頭をマナ板に止め、腹を裂く。と、いくらでもない内臓と共に小指の半分ぐらいの黄色い卵巣が出てきた。

なるほどムスはこのくらいに成熟するとメスになるのだ。五匹とも全部卵を持っていた。ムスの卵は粒が大きい（イクラほどではないかちよつとそんな感じ）。その代わり数は少なく一袋に三〇〇ぐらいしかない。

このムスを最初はカバ焼きにして食べるつもりだった。だが、ムスの骨はウナギのような

平骨ではなく、四角で、しかも尾の方に行くにしたがってねじれており、庖丁の入れ方がむずかしい。

そこで筒切りにして、水と酒と味噌でとろけるほどに煮込んでみた。じつはこれ、『随園食単』に出ているレシピなのである。結構な味だった。適度に脂がのって、しつとりと柔かく、ウナギによく似た味である。

この時、卵巣も一緒に煮た。「卵はどうなんだろうね……」と北林夫妻と私が、めいめいに卵を二、三粒、箸でつまんで口に入れて味わったのだが、次の瞬間、三人が思わず顔を見合せてしまった。

うまいとかまずいとかでなくて、何とも強烈というか、一匹のムスン全体の精分を一粒の卵に凝縮したような、おそろしく質量感の高い卵なのである。

「こんな卵はじめてだわ」と夫人が呟いたが、私も同感。ユメ、独り者に食わしてはなるまい。

ムスンは鉤では釣れないから、ムスンをとるには独特な仕掛けが必要となる。ウナギ同様、穴にもぐり込む習性を利用して土管や、今だったら塩化ビニールのパイプなどを使って獲る。

コツは長さ一メートル、口径六インチ（約一五センチ）ぐらいのパイプの一端を二〇センチぐらい水に沈め、他の一端は口径の半分ぐらいしか水に沈めず、空気が入るようにセットする。

管の中に肉や魚の切り身などの餌を入れ、水没している方のパイプの入口に竹で編んだ先細りのヤナをとりつける。先端がササラになっていて、入ったら最後、出られないようになってくる。

夜にこういう仕掛けをいくつもつくって朝に引き上げると、多い時には一本の管に四、五匹入っているという寸法。

何故うなぎの仕掛けのようにパイプを全部沈めてしまわないかという点、全部沈めるとムスンが呼吸できず、死んでしまうのである。この魚は、魚のくせにエラが発達しておらず、長時間水中にすることができない。

エラ呼吸もできないわけではないが、四時間ぐらいが限度で、それ以上は空気呼吸をしないとたないのだ。そのためパイプの一端を持ち上げて水中に浮かし、呼吸ができるようにしてやるのである。

ところがあまり大きなヤツが何匹もパイプに

入ってしまうと、ムスンの重みでパイプが沈み、ムスンはあえなく溺死するケースもよくある。

水で溺れて死ぬ魚も珍しいが、ブラジルには空気呼吸する魚はいくらもいるのである。

果敢に抵抗する “ 剣魚 ”

パンタナールでたまに釣れる魚に、ペイシ・カシヨール口がいる。犬魚の意味だが、別に犬に似ているわけではない。

六〇センチぐらいになる細長い魚で、下アゴの先端に長さ三・五センチほどのおそろしく長い牙があり、一見してピラニアよりはるかに獰猛な顔つきをしている。

この魚は牙が長いから、口を閉じると牙が上アゴに突き抜けてしまう。だから、この魚は牙が突き抜けてもよいように、はじめから上アゴに穴が開いている。口を閉じるとこの穴から一センチぐらいの牙が飛び出す。

ペイシ・カシヨール口は、インジオ語でイアウラナ（ジャガー、ピューマのように牙の鋭い猛獣）というが、イアウラナを文明人が犬と誤解したため、この魚にカシヨール口の名前がついた。

従って本来は、犬魚ではなく剣魚のことなのである。インジオは別にピラ・アンジラともいう。アンジラは針、棘、牙のことだから、表現としてはこの方がわかりやすい。もつともピラニアにもイアウアナ、ピラ・アンジラの異称があるから混同を避けるため、ここではカシヨロロにしておく。

しかし、大きさはパンタナールのが一番大きく、他はだいたい三〇センチ前後である。

アマゾンやサンフランシスコ河には、このカシヨロロの親戚になるビクードという四〇センチぐらいの魚がいて、やはり鋭い歯を持っているが、この方は牙はない。

ブラジルではビクード、あるいはビクードは、海の魚であるカマスのことを指すのが一般的だが、カマスは、スズキ目カマス科で、両者の間のつながりはない。

カシヨロロやビクードの仲間には、ブラジルの淡水魚中動きのあることは随一で、常にかかなりのスピードで回遊している。

釣針にかかると猛烈に暴れ水上にジャンプする。カシヨロロは銀色、ビクードはうすい黄金色だから、陽光に魚体がキラキラ映えてみごとで

ある。

水中では抵抗をやめない反抗心旺盛な闘士だが、水から引上げられると直ちに死ぬ。

こういう動きの早い回遊魚は、常に大量の溶存酸素を必要としているから、水から離れ酸素の供給が途絶えるとパツタリいつてしまうのである。

数年前、ロライマ直轄領のボア・ビスタに行つて、リオ・ブランコに架かる橋から少年達が釣りをしているのを見ていたら、釣れる魚は全部カショーロだった。

食べるのかと聞いたらそうだと言う。そして釣り上げてバタバタ暴れるカショーロの頭をゴム草履で踏んづけ、尻尾をもって力一杯引つ張っている。

おかしいことをすると理由をきいたら「骨を外しているんだ」と答えた。この時は、意味が分からなかったが、近ごろ改めてパンタナールでカショーロに包丁を入れて「ははあ……」と納得した。

この魚は太刀魚みたいにうすくて幅のある魚で、中骨のほかにかなり大きな小骨が皮のすぐ下に斜めにびっしりついている。この小骨が死

後硬直した魚肉に喰い込んで離れなくなるのだ。

包丁の入れ方のたいへんむずかしい魚で、下手をすると身がグシャグシャになってしまふ。

上手に包丁を入れて三枚におろしたカシヨロは刺し身でいける。ピラニアよりうまいといえる。ただ、パンタナールではそうやたらに釣れる魚ではない。

淡水カレイは劣等生

パンタナールには約六〇〇種の魚がひしめいている。もともと海だったところだから淡水に馴化した魚もいくつかいる。

エイ、ニベ、イワシ、カレイ、ダツなどといったところだ。

ニベはスズキ目ニベ科の魚でブラジル語ではコルビーナ。これは現在でも海のものど河のものとの二種がある。

淡水のコルビーナが、陸封型のものかそれとも後から河を遡って棲みついたものかについては論議が分かれるが、両者はほとんど同じ形態をしており、祖先が同一種だったことはハッキリしている。

この魚はアマゾン河にもおり、アマゾンではふつうペスカーダといっている。日本のニベやグチの仲間で、同じように頭に二つの硬い石をもっている。

ペスカーダと称する魚はブラジルには数が多く、食用としても人気のある魚だが、ペスカーダの名前のつく魚はほとんどニベ科の魚と考えても間違いない。

パンタナールのコルビーナはもちろんそんなに大きくはなく、四〇〜五〇センチというところ。肉は白身で淡白、フライにするとなかなかいける。

イワシもいる。しかし、これはイワシというより、ニシン科の魚がいると言う方が正確である。

アマゾンのイワシを含めて、ブラジルの淡水イワシは、すべてニシン目ニシン科の魚で、ブラジルではアパパと称することが多い。

ニシン科の魚といっても、日本で七ツ星といわれるマイワシやブラジルでも沢山とれるブラジルイワシもニシン科だから、アパパをイワシといってもおかしくはない。

淡水のアパパは少なくともカタクチイワシ科やウルメイワシ科の魚よりはニシンに近く、体

長も40センチ近くになり、体高もニシン型で高い。

アパパもニシンやイワシのように群れをなして回遊するが、個体数はずっと少なくて資源としてには問題にならない。だからこれは人間が食べるより、他の大型魚の餌になる方がずっと多い。

ついでに言うと、ブラジルのカタクチイワシ科で有名なのは、リベイラ河を遡るマンジューバで、サンパウロの日系人にはなじみの魚である。これは漁獲量も多く、重要な水産資源となっている。

同じくもと海の魚でも淡水カレイや淡水ダツになると、一段と影がうすくなり、大勢力を誇るナマズ目やカラシン亜目、シクリッド亜目の魚類の蔭にかくれてひっそりパンタナールの片隅に棲んでいる。

第一、淡水カレイなどは個体が小さい。大きくなってもせいぜい一二センチ止まり、通常は10センチ以下でとても食用になどならない。

個体を小さくすることで環境との適応をはかり、種の存続をねらったのだらうが、うまくいかなかった。出来の悪い劣等生というところ。

淡水ダツも体長こそ六〇センチになるのがいるものの、これも劣等生の口で、パンタナールの魚類の中ではさっぱりうだつが上がりらない。

ただし、淡水のカレイとかダツとかは世界的にみれば非常に珍しい存在だから、熱帯魚マニアには珍重され、けっこうな値段で取引されている。

種の悪化ということでは出来の悪い劣等生なのだから、せめて稀少価値ということで見ないとかわいそうだともいえる。

怪異な容貌 ナマズ目

ナマズ目で食べてうまいピンタード、スルビン、ジャウーやアマゾンのピラムターバなどはたいていナマズ目のピメロジ科に属している。

ピメロジ科は、ナマズ目では大きな科で、この科の魚は一部の例外はあるが、だいたいうまい魚である。

ここでちよつと断っておくと、ここでは「ナマズ目」としてゐるが、日本の魚類分類法ではナマズ目という目はない。

日本ではカラシン亜目、コイ亜目、ナマズ亜目

をまとめてコイ目にしており、ナマズ目を独立の目とは分類していない。

しかし、ブラジルはナマズ王国で、ナマズの種類も非常に多く、たいへんな大世帯だから、ナマズ亜目では整理がつかないため、昇格させてナマズ目をつくった。

この分け方は、世界的にも認められており、外国の分類でもナマズ目を独立の目として取り扱っているところが多い。

なにしろ南米のナマズは一二〇〇種以上もいて、世界のナマズの六〇パーセントをしめている。

南米の次に多いのがアフリカで、この二つの地域だけで世界のナマズの九〇パーセントを超えてしまう。ブラジルの淡水魚はナマズ目なしには語れないのである。

ところが、ナマズの少ない世界の各地では、有鱗魚と比較して一格下の魚としか扱わないところが多い。

日本にはふつうのナマズのほか、ビワコオオナマズ、イワトコナマズの三種しかおらず数も多くはない。昔から「ひょうたんナマズ」とか「ナマズひげ」とか、なにかと滑稽みを伴って連想さ

れる魚である。

これはアメリカも同様で、世界中に二千種もいるナマズ目の魚をすべて“キャット・フィッシュ”の一言で片付けている。

六本から一〇本あるナマズのひげ面を猫の顔に見立てて「猫魚」としたのだろうが、どれもこれもただの「猫魚」で、学名以外の固有名詞がないのだからお粗末な命名である。ボキヤブラリーの貧困さがうかがえる。

そこへいくと、ブラジルのインジオはさすがナマズ王国の住人だけに、ひとつひとつの魚にそれぞれの形状や特質を言いあらわした名前をつけている。

ところでナマズ目の魚は進化的には概して古いタイプのもが多いから、奇妙な形態をした魚がたくさんいる。

ピンタード、ジャウー、バルバード、ピライーバなどの属するピメロジ科のナマズは別名“はだかなマズ”で、ごくまともなナマズの種類。

カスクードと呼ばれるロリカリア科のプレコの仲間になると、ザラザラした骨板に覆われた体、下向きについた吸盤状の口、大きな頭があつ

てかなり怪物的になる。

また、ドラス科のアボトアードやその親戚のククユになると、これは観賞価値のある立派な怪魚。体側に鋭いトゲ状突起の硬鱗がずらりと並び、背ビレ、胸ビレ、尾ビレはギザギザの鋸をつけている。

体側に並んだトゲ状の突起をポルトガル人は大礼服の飾りボタンに見立てたわけだが、誰がみても怪魚に見えるらしく剥製にしてよく土産物屋に飾られている。

それにしても、鱗のない魚は食べてはならぬというようなイスラム教やユダヤ教のタブーがブラジルに適用されなくてよかった。

もつともあれは砂漠の宗教で、あそこにはブラジルのようないまぬまズがないのだから仕方ない。

視覚にたよらぬ魚

パンタナールの水はパラナ河やアマゾン本流の水にくらべるときれいだが、それでも海のよくな透明さとはほど遠く濁っている。

魚は元来近眼で、よほど透明な水でも三〇

メートル前後しか見えないから、濁った水に棲むブラジルの淡水魚は目で餌を探すのが苦手である。

ところで、パンタナールのピラニアに関して以下のようなインジオ伝説がある。

ウソかホントかまず読みたい。

むかしむかし、すべての生物が創造された時、神様はあらゆる生物を順番に並ばせ、それぞれの食べ物をきめてやった。

やがてピラニアの番がきて、神様の前に立ったが、その口を見て神様はびっくりした。なんとものすごい歯ではないか。

こんなのに肉を食べるといったら、他の魚が全部やられてしまう」と心配した神様は、

「お前らの食べものは水中から生える植物の根や葉、皮、種子、果実、藻などとする。肉をはじめ、あらゆる赤いものに触れることは厳禁する」

と言い渡した。

ピラニアは、神様の言う通り木の根や草を食べていたがどうも物足りない。するとそれを見ていた悪魔が嘲笑って言った。

「バカだよ、お前らは。そんな色も味もない食べものがお前らに向くと思っっているのかね。お前

らは肉を喰わにやあ……肉こそうまくて栄養があり、お前らの鋸のような歯で味わうべき食べ物さ……」

びっくりしたピラニアは悪魔に聞いた。

「そのオ……肉とやらはどんなものかね……」

「肉か、肉は赤くてうまいものさ……一度喰ったらほかの食べ物なんぞ見向きもしたくなくなるね……どうだい、一度喰って見ろよ……」

悪魔にそそのかされたピラニアは、神様の戒律を破り肉を食べてみた。

悪魔の言葉に間違いはなく、肉は赤くてうまいものだった。それからピラニアは悪魔の申し子となり、赤い、血のしたたる肉以外は決して食べなくなった。

インジオには申し訳ないが、ピラニアが血の赤い色を見て寄ってくるというのは正しくない。

ほんとうは水を媒介にして血の匂いを敏感に感じとって襲ってくるのである。

ピラニアに限らず魚には、目のすぐ前の鼻の中に陸上動物と同じような複雑なアイワのある嗅覚細胞がある。海のサメや河のピラニアはこの嗅覚器官がとりわけ発達していて、ごく僅か

の血の匂いでも敏感にキャッチするのである。

このほかにサメやピラニアには相手の恐怖の感覚を察知する能力があり、この刺激を受けるとたちまち凶暴になって、狂ったように攻撃するともいわれている。

どうもサメやピラニアは物騒だが、これがデソキウナギやナイフフィッシュのようなギムノタス科の魚になるとかなり平和的で、放電によつて障害物、餌、外敵を見分ける。

また、ナマズの仲間は餌の発する微弱な磁気を感じするほかに、ヒゲによる触覚で餌をたしかめている。

パクーなどは聴覚も使い、木の実が水に落ちる音にも敏感に反応する。

キラキラ光るルアーに喰いつくドラードも水が濁っていると喰わないところを見ると、視覚に頼って餌を探すことは二次的と言ってよさそうだ。

陸上移動する魚

「魚心あれば水心」というように、魚と水とは切っても切れない縁がある。

たしかに水があつての魚なのだが、中には変わった魚もいて、キノボリウオなどという名前からして奇妙な淡水魚が東南アジアにいる。

スズキ目キノボリウオ科の魚で、学名から由来するアナバスの呼称を用いることが多い。

エラは後部に迷器と呼ばれる副呼吸器官があり、肺の役目を果たすからエラ呼吸のほかにも空気が呼吸ができる。身体が湿ってさえいけば三時間以上水から離れても平気。

エラぶたにびっしりついている三角状の細かい棘を地面に喰い込ませて陸上を這うことができる。

永らく木に登るか登らないかで論議のあった魚だが、どうやら木に登るとするのはホントではなく、ヤシの木の上にいたというのは鳥が魚を捕まえて樹上に置き忘れたものらしい。

また別の観察によると陸上を這うというのも、這うというより跳ねる動作をするので、ゴソゴソ這いまわる感じではないとのこと。ただし、永いこと水から離れても生きていられるのはたしかである。

アナバスがこの程度の動きしかできないとしたら、ブラジルのアマゾンやパンタナールにい

るタモタの方がはるかに長距離の陸上移動をする。

ナマズ目カリクチス科で一五センチほどの魚で、英名はアーマード・キャット、つまりヨロイナマズである。

西洋鎧（よろい）を着たように体の側線から細長く、上下に分かれるウロコがある。ウロコといても有鱗魚のまるい骨鱗ではなく表皮の變化したものだ、説明ではウロコとしか言いようがない。

この蛇腹みみたいなウロコが歩行器で、蛇腹を開き、立てるようにして前進する。

これはほんとうにゴソゴソと這う。どのくらいの距離を移動するかについて、科学的に観察した記録が見当たらないのでよく分からぬが、五〇〇メートルぐらいは動くらしい。

アマゾンの魚について詳しくかったジョゼー・ベリツシモは「タモタのようなある種の魚は半両生類的で、ひとつのシチオ（農場）から他のシチオと陸上を移動する」と書いている。

とはいうものの、タモタの移動も体表が濡れていることが条件だから、カチカチに乾燥した硬い地面を這っていくわけではない。

アマゾンやパンタナールには乾季になると水の干上がる小川はたくさんある。タモタはこのまだ完全に水の干上がっていない泥の中を進むのである。もちろんタモタも空気呼吸する。呼吸方法は胃に空気を溜めるやり方。タモタをとるには干上がったイガラペー（小川）に行って、泥の上をゴソゴソ動いているのを綱や手でとればよいのだからかんたん。だが、人間の方も泥だらけになるからタモタとりは汚い。

わりあいいうまい魚だと言われているし書かれてもいるが、何度食べてもうまいと思ったことがない。

タモタに限らないが、カラシン亜目ポプリアス科のジジュヤトライーラを含めて、泥の中を移動する魚をペイシ・ド・マツト（森の魚）という。

ジジュヤトライーラもエラ呼吸のほか、ウキブクロによる空気呼吸ができるのである。

多い古代魚

ブラジルの淡水魚には日本人になじみのある魚がない。コイとかニジマスとかの移入種を

除けば、日本とブラジルで共通している淡水魚などただの一種もない。

これにはかつての日本移民も面くらった。日本の故郷の川で追い回したアユ、イワナ、ヤマメ、ハヤ、フナ、ウナギ、ドジョウなどのなつかしい魚がまったくいないのである。

それにブラジルの河魚は形も大きく、グロテスクなのが多い。日本からきてはじめてカスクードやアカリ、ククユなどをみたら、誰でもこんなバケモノみたいな魚が喰えるかと思う。

しかし、これもやむを得ない。日本とブラジルでは、生物の進化の系統もそのもとなる地表の生成のしかたも違っているのである。

魚でいえば日本の淡水魚はごく新しい時代の魚であるのに対して、ブラジルの魚はいずれも非常に歴史が古い。

パンタナールのピランボイア（レピドシーレンⅡ南アメリカ肺魚）などは古世代のデボン紀後期（三億五千万年前）から大した変化もなく今日まで生き続けた「生きている化石」である。

また、アマゾンの有名なピラルクやアロワナの属するオステオグロッサム目の大型の魚も、一億五千万年前の中世代ジュラ期にはだいたい

今と同じ姿で存在していた。

古世代の後期や中世代の初期は日本列島などはまだ海の中で、「日本誕生」以前の時代だが、既にこのころには現存の魚の祖先はほとんどすべて出揃っていた。

もつともそのころの南米は今の南米ではなく、ゴンドワナ大陸という、アフリカ、南米、南極、オーストラリア、インドの一部を含めた大大陸塊の中にあつた。このゴンドワナ大陸は、中世代を通じて南北方向に進入した海によってしだいに分けられてゆく。

ウエゲナーの大陸移動説が承認されたのはごく新しく、一九五〇年代になって地殻変動のプレート・テクトニクス論が出るようになってからだが、この大陸移動の傍証として類似古生物の分布があげられた。

とくに魚は、大陸移動のはじまる中世代中期にはたいていの祖先型が存在したから、古代魚の分布を調べると各地の共通性が分かる。その代表的な例がパンタナールの肺魚ピランボイアである。

ふつう肺魚というとシーラカンスを思いうかべる。事実両者は近縁関係で、どちらも空気呼吸

のできる内鼻孔魚類だが、専門的にはシーラカ
ンスは肺魚とは言わない。

肺魚には三科ある。ひとつはブラジルのピラ
ンボイアの属するレピドシーレン科だが、他は
アフリカプロトプラルス科オーストラリアのエ
ピセラトダス科である。

この三科の肺魚は形態も習性もお互いがそつ
くりで、食べて美味なところまで同じであり、も
ともと同一祖先から出発した「生きている化石」
であることが証明されている。

肺魚に限らず、南米とアフリカにはよく似た
魚が多い。カラシン科やキクラ科の有鱗魚はど
ちらにもいるし、ナマズ目にもおどろくほどよ
く似ているのがある。

南米とアジアだけに共通する魚は一科もない
が、アフリカとアジアには共通の科が一三もあ
り、かつて陸続きだったことがよく分かる。

森の生活

変わった習性・アニニューマ

バランキンニヨのホテルでアニニューマという鳥を飼ったことがある。ガンカモ目サケビドリ科の大きな鳥で、南米特産の珍鳥。

アニニューマには二種類あって、主としてアマゾンの原始林にいる額に一〇センチほどの一角獣のような細い角質の角のあるのと、角はないが頭のうしろに冠毛の生えているのがいる。

後者はマツト・グロツソ州以南にいるもので、かつてサンパウロ州に原始林があった時代にはたくさんいた鳥である。

ほんとうはアニニューマといえば角のある方を指し、冠毛のある方はアニニューマ・ポツカあるいはタツシヤンというのが正しい。

ポツカというのは静寂を引裂くという意味のツピー語。これは夜中に高い声で叫ぶ習性のあるところからつけられたもの。タシヤンは擬音で、その声がタシヤンと聞こえるからである。バ

ランキンニヨのホテルで飼っているのもこの方だ。

大きさはシチメンチョウの小型かホロホロチョウぐらいの大きさだが、肢がずっと長く太く、趾（あし）を広げると二五センチもある。水草を食べるために河辺の泥沼や浅瀬に入っても身体が沈まないようになっていた。



古代鳥に近いアニューマ・ボッカ

このアニューマの番（つがい）をホテルの北林支配人夫妻が飼っているわけだが、こういう

野生の珍鳥の生態を観察できるチャンスに恵まれたのはありがたかった。

この鳥は一九八六年の七月にホテルの客が舟で釣りに出かけた折、たまたま孵化したばかりのアニューマのヒナ四羽が水浴びしているのを見つけ、そのうちの二羽を持ち帰った。

この時のヒナはかえってから二、三日だったらしい。以後、飛べるようになるまでの半年、北林夫人が水草を食べさせ、夜は夫妻の部屋に寝かせ、文字通り手塩にかけて育てた。

北林夫妻は前年、コウノトリの一種であるカベツサ・セツカを飼って夫妻にだけなついたという実績をもっているから、夫妻にはまずまずの自信はあつたらしい。

アニューマは草食鳥のせいかわ事おっとりしていて、少しも俊敏なところがない。歩くときもゆっくりで、ミズカキがないからアヒルのようなスピードは出ないにしても軽々と水に浮く。

皮膚の下に細かく仕切られた空気囊(のう)を持っており、水に入るときや飛ぶときに空気を入れて身を軽くするのである。身体に触ってみると柔毛の下の皮膚に空気が入ってプチプチしているのがよくわかる。

またこの鳥は奇妙なことに大小便をし分ける。もちろん排泄孔はひとつだけなのだが液体だけの尿と、真黒い塊の糞を別々にするのだ。

これは鳥としては大いに変わっている。もともと鳥には膀胱がなく、尿は流動的な尿酸として糞と共に排出されるのがふつうである。

どういう仕掛けで尿と糞を別々に排出するのか解剖してみないとわからないが、たしかにこの鳥は変わっている。

更におもしろいのは羽根の掌指骨の先端と後端に人間の歯差し指ほどの牙状の爪を持っており、外敵にはこれで立ち向かう。自分から積極的に他の動物を襲うことはないが、それでも危険が迫ったり、不意に脅かされると強大な羽根を一杯に広げ、強くはばたいて相手に打ちかかる。

時計がわり

「アニニューマというのはすごい空中戦をするんです。ナワ張り争いの時なんか、オスとオスが高い声をあげながら、羽根を広げてぶつかり合います。また、地上にいるアニニューマめがけて急降下し、あの羽根の爪で相手を刺すんです。うちのア

ニューマがまだ大きくない時は、隣りのオスによく怪我させられましたよ。成鳥になればそうかんたんにはやられません」

北林夫人の解説である。地上にいる時襲われると、襲われる方は地面にひれ伏して攻撃をかわす。地面に密着していると、大地に激突するおそれがあつて、急降下攻撃をしにくいのである。

それにしてもアニューマ同士のケンカは、疲れたヘビー級ボクサーの対戦のような、ドサツ、バサツと巨大な羽根をぶっつけ合うだけ。小鳥の敏捷さは全くない。

balanキンニョのアニューマを観察していると、たまに草むらの中で両羽根を広げ、何かを威嚇していることがある。

こういう時は草むらに蛇かトカゲをみつけた時で、頭を低くし、広げた羽根を地摺りに構え、今にも爪のある羽根で打ちかからんばかりの形態をとっている。

実際に飛びかかるのを見たことはないが、両羽根を広げるとものすごく見えるから、威嚇としては効果があつて大きな蛇でもたいてい逃げ出す。

南米は動物地理の分類ではネオ・トロピカル（新熱帯）区に属する。新の字がつくため、新しい動物が多いと思う人もいるようだが、実はこの動物には古いタイプのものが多い。

鳥の仲間ではツル目、キジ目、ガンカモ目などに古いのが多い。ツル目のニガンモドキ、ジャノメドリ、キジ目のホウカンチョウ、ツメバケイ、それにアニューマことサケビドリなどであ



蛇をみつけ身構えるアニューマ

る。

アニニューマはメスで三キログラム、オスは四キログラムと鳥としてはかなりの重さになるが、飛び上がるときは助走もなく大きな羽根を拡げてフワート、飛び立つ。

例の皮膚の下の空気囊（のう）に空気を入れて身を軽くする。この時近くにいると「ブチツブチツ」 という、 空気の充満する音がはっきり聞こえる。

飛翔力は強く、かなり上空に舞い上がって滑空するのが常。

屋根にいるアニニューマを北林夫人が呼ぶと夫がめがけて飛び降りる。ところがこの鳥は図体がでかいから小鳥のように小回りがきかず、北林夫人にモロに体当たりしてしまう。

まことに不器用な鳥で、このアニニューマの“カミカゼ” 攻撃を避けるために北林夫人はサツと身を引く訓練が必要となる。もつともこの訓練は北林夫人しか必要ない。他の人間が呼んでも決して飛んではこないからである。

アニニューマの一日のスケジュールはじつに規則的で、時計を持っているのではないかと思うほど狂いが無い。事実、インジオやカボクロはア

ニユーマの動きで時をはかるといわれるほどだ。
例えば朝起きて草原をひとめぐりしたあと、
河べりに行って水浴びし、暑い日盛りは家の陰
で休み、夕方はホテルの裏に回って草をついば
み、太陽が地平線に没するとフワリと屋根に舞
い上がり、ついで水のタンクに飛び移ってここ
で最終的に夜を過ごす。

そして夜の一二時ごろにカン高い声で「ター
シャン」と鳴くのだ。だからアニューマがどこ
で何をしているのかを見れば時間がわかるとい
うわけ。

動物と対話する女性

鳥のヒナが孵化直後、最初にあいさつを“開
発”した相手を母親とみなして後を追う“イン
プリンテイング”（刷り込み）現象は、オースト
ラリアの動物行動学者のコンラード・ローレン
ツの研究により広く知られている。

しかし、北林夫人の手がけたカベツサ・セツカ
にしてもオウムにしてもアニューマにしても、
孵化直後は親と一緒におり、何日か経ってから
夫人のところに持ち込まれたもので“インプリ

ンディング”ではない。

にもかかわらず、北林夫人を母親とみなして後を追い回す現象はなんと説明したらいいのだろうか。

どうもこれは動物の側ではなくて、人間である北林夫人の特殊能力によるものと考えerより解答のしようがない。とにかくふしぎな女性で、私などは動物よりもむしろ北林夫人の方に興味と関心があるほどだ。

つまり北林夫人は動物と対話のできる、というか動物に警戒心を起こさせずに慕い寄せさせる何かを持った稀有のエスパー（超能力者）と言った方がよい。

ホテルでつがいのオウムを飼っていた時のことである。オウムはふだん、日中は庭の果樹などで遊んでおり、とりたてていうことはない。

ところが、北林支配人が外出し、従業員たちもお客を案内して舟で出かけ、ホテルに男手がなくなるかとオウムの出番がやってくる。

二羽のオウムは交替で夫人の頭や肩に止まり、ご主人の北林支配人や顔見知りの従業員が帰ってくるまで離れようとしないのである。

人がいなくなつてオウムが淋しがるわけはな

い。このオウムは番犬ならぬ “番鳥” で、一人になった北林夫人を案じて身を守ってやっているのだ。

ウソのようなホントの話で、こんな時に見知らぬ外来者がうっかり夫人に近づこうものならあの鋭いクチバシで皮膚に穴の開くほど喰いつかれてしまう。

私もオウムに信用されていない。だから一人の時の北林夫人には近付かないことにしている。



オウムと会話する北林夫人

このホテルには日本からよくテレビの撮影班がやってきて動物の写真を撮る。はっきり言えばあらかじめ捕まえておいた動物を撮るいわば“やらせ”だ。

対象の動物は吠え猿、大アリクイ、アルマジロといった南米特有の動物が多い。

撮影が終われば放してやるのだが、捕まえて縛ったり、檻に入れたりするものだから動物は興奮しきって死物狂いで暴れ、とても手が出せる状態ではない。それをなだめて食べ物や水をやり、「暑かったでしょう、かわいそうに……」とかなんとか、やさしく話しかけて落ちつかせるのが夫人の役目。

長崎出身の日本人である北林夫人が日本語で話しかけると、ふしぎなことにすべての動物がおとなしくなってしまう。むろん、この場合の言葉は何語でもよいので、要するに夫人のやさしい気持が動物に通じるということなのだ。

ホテルの前の河にあるホテイアオイの群落に居ついているワニも馴れている。

野生動物がこのくらい馴れるのだから、家畜は無論寄ってくる。おかしいのは夫人が柵の外に出ると放牧の牛が十頭も二十頭もぐるりと彼

女をとり囲むことである。

頭を撫でてくれという意思表示なのだが、角のある頭をふり立てて寄ってこられては四〇キロ足らずの小柄な夫人の方はたまったものではない。悲鳴をあげて助けを求めらる仕儀になる。

本家奪った "マラゲッタ"

パンタナールのホテルの裏畑にマラゲッタ・トウガラシがたくさん生えている。これがひどく辛い。

少々幸いではなくて強烈きわまりない辛さで、口の中に爆弾を放り込まれたような感じになる。

だから食卓にはうんと薄めたものしか出さないことにしているのだが、それでも辛い。

「私はトウガラシならどんな辛くても大丈夫です」などという人間が時々あらわれて挑戦することがある。結果は飛び上がり、涙を流して大あわてで水を飲むのがオチ。

ブラジルではトマトケチャップと混ぜたチリソースで使うこともあるし、中国の辣油（ラーユ）のようにトウガラシを油で煮て油に辛みを

出して用いることが多い。

こういう強烈なのはサジですくつたら大変なことになるから、ハシの先につけてほんの二三滴おとすのだ。マラゲッタはタバスコソースにはならないし、しても辛くて食べられない。

このトウガラシは多年草で灌木状になる。日本では越冬できないから、栽培はない。したがって一般の日本人はマラゲッタの強烈無比の辛みは知らないのがふつう。

さて、マラゲッタの由来。かつて私はマラゲッタはアフリカ語で、もともとはシヨウガ科のカルダモンに似た植物の赤い種子のことだと「サンパウロ新聞」の連載に書いたことがある。

そしたら読者から、マラゲッタは昔から小さくて赤くて、とび切り辛いブラジルのトウガラシのことをいうと指摘された。

たしかにマラゲッタの名前が使われはじめたのは古いし、それが学名を *Capsicum frutescens* というトウガラシを指すことも事実である。しかし、マラゲッタはやはりアフリカ語なのである。以下もう一度説明してみる。

アフリカの西海岸にはかつてヨーロッパの植

民地時代につけられた奴隷海岸、象牙海岸、黄金海岸、穀物海岸などというおかしな地名があった。

もちろん現在では使用されていないが、このうちギニア湾沿いのリベリアからシエラレオネにかけての約二〇〇キロの海岸をGrain coast（穀物海岸）またはPepper coast（胡椒海岸）と称した。ここが“マラゲッタ”の産地だったからだ。

この地名の命名は最初から間違っていた。なぜなら“マラゲッタ”はグレインでもペッパーでもない。Afrosum Malaguetaというショウガ科の植物の種子だからである。

英語の命名も間違っているし、英語を訳した日本語も間違っている。ただし、妙なことにポルトガル語だけはこの海岸をコスタ・デ・マラゲッタと正確に表現している。

“マラゲッタ”はトウガラシを知るまでアフリカ黒人が常用していた香辛料で、一時はイギリスに輸出もされていた。

新大陸に連れてこられた黒人は、赤くて小さ

くて辛いトウガラシを”マラゲッタ” の代用
にしていたが、そのうち代用の方がマラゲッタ
になったのである。

これはシヨウガ科の ”マラゲッタ” よりト
ウガラシのマラゲッタの方が香辛料としてすぐ
れていることを意味する。その証拠に現在では
アフリカでもトウガラシの栽培の方がはるかに
多い。

マラゲッタは世界的にはチリペッパー、カイ
エンヌペッパーと呼ばれるが仏領ギアナのカイ
エンヌに限らず、南米ならどこでも自生してい
る。

トウガラシが好きな鳥たち

このとてつもなく辛いマラゲッタ・トウガラ
シを、ホテルで飼っているニワトリやオウムが
ボリボリ食べる。これを見た時は正直言っ
てびっくりした。

ニワトリやシチメンチョウなどの家禽の具合
が悪い時、トウガラシ液を溶いて飲ますのはよ
く知られている。しかしニワトリやオウムの場
合、明らかに食べものとして強い嗜好を示して

いるのである。

北林夫人の観察によるとトウガラシの熟度にしたがって嗜好が強くなるとのこと。

つまり赤く完熟した実をもっとも好み、赤い実のある限り黄色い実は絶対食べず、赤い実がなくなってから黄色い実、青い実の順になるものの、青い実などにはほとんど食欲を示さない。

トウガラシはビタミンCが多く、体温を高める作用があり、唾液や胃液を分泌させて消化を助け食欲を増進させる。有効辛味成分はカプサイシンである。

この性質を利用してトウガラシ粉末を少量飼料に加え、家畜に授与し、消化器官を刺激して消化機能を旺盛にすることも行われている。

だが、このホテルのマラゲッタは特別辛く、ふつうの例えば「鷹の爪」などと較べるとカブサイシンの含有量はケタ違いに多い。僅か一・五センチほどの小さい実でも人間はその一〇パーセントも食べられない。

それをオウムは平気で一〇本も二〇本も食べるのである。人間なら致死量に達するカブサイシンの摂取量だ。

最初はマラゲッタの自生が少なかったため、

ニワトリとオウム以外での観察がむずかしかったが、一、二年も経ってマラゲツタ・トウガラシがそこここに自生をはじめた。直射日光が一日中当たるところはだめだ。果樹や大きな樹の下、建物の裏側など、あまり日の当らぬ場所を選んで生育する。

さて、マラゲツタが増えてわかったことは、トウガラシを好むのは、なにもオウムやニワトリに限らないということだった。

「もう、小鳥から大きな鳥まで、たくさん野生の鳥が食べに來ますよ。ほとんどの鳥が好むんじゃないですか。もつとも魚を食べる水鳥や肉食の黒コンドルやタカなんか食べるのは見たことないですけど……」

北林夫人の説明である。これで、すべての鳥ではないにしても、ほとんどの鳥が激烈な辛みを好み、しかもカブサイシンに対して非常に強い耐性をもっていることがわかった。

このホテルはパンタナールの中にあるのだから、野生の鳥が寄ってくるのは珍しくはない。それにしても最近バカに集まるなど思ったら、やはりトウガラシが一因だった。

マラゲツタ・トウガラシは鳥の糞によって種

子が拡散されるから、鳥が来てトウガラシを食べればトウガラシがどんどん増えるし、そうなれば更に鳥が集まるといふ因果関係をくり返すことになるのだ。

それにトウガラシだけではなく、北林夫人がせつせと植える果樹も成長が早く、これも小鳥を集める原因になっている。シリグエイラやグワバの実のなる季節には、人間と鳥と虫が競争で果物を食べている。こうなると、おかしなことに、野生の鳥も全然人間をこわがらなくなる。

忍者もどき、ダニの襲撃

薬草採取をしてやろうと思って、ふだん人間も家畜も人らぬ草原と灌木林に入ったら、もの見事にカラパット（ダニ）にとりつかれた。

ダニに喰われた痕が無慮数百、まさに満身創痍である。

私は奥地生活のシロウトではない。したがってこの時期に枯れた草原に足を踏み入れれば、どういうことになるか百も承知している。

それが、その時にはなんとなく面倒になって防虫措置を省略して山に入ったのだ。結果はひ

どいもので、いまだに身体中をポリポリ搔いている次第である。

吸血昆虫に人間と友好的なものはいない。ブラジルには蚊をはじめとして、ブヨ、アブ、ダニ、アリ、ハチとそれらは多彩に亘っているが、いずれも仲良くしたいとは思わぬ連中ばかりだ。

だが、その中でもダニという奴は、しつっこさにかけても、かゆさにかけても、常にワースト・テンの一、二位を争っている気がしてならない。

このダニの特徴は、まず第一が、忍者ばりに行動が隠密で、正体をあらわさないことである。

蚊やブヨと違って、ダニは身体の露出部を襲うことが少なく、多くの場合衣服で覆われている部分を狙って噛みちらすのである。しかも噛んでいる時は、人間の側にはなんらの痛痔も感じないという特徴をもっている。

だんだんかゆくなって、なんだか変だぞとシャツを開いてみると、腹から胸にかけてポチツと赤い唆み痕だらけ。あっと驚いて慌ててももう手遅れ。慣れない人なら、これから一カ月、かゆさと腫れに悩まされることになる。

このダニ、最初は小さなノミほどの大きさだが、ノミのように背が高くなく、平べったいから

身体のシミかと思つてうつかり見逃してしまふ。

ダニは素早く動いて、さんざんあちこちを噛んだ挙句、やがて一カ所にがつぷり喰らいつき血を吸つて膨張する。

こうなるとかゆいから誰でも気がつく。ダニはマツチの頭かアズキ大になっている。たいていの人はここであわててダニを引きちぎるのだが、これをやると鋭い吻（くちさき）が皮膚の中に残つてしまふ。

残るとかならず根のある腫れものになり、これがなかなかおらない。ブラジル語ではこの種の腫れものを“クラボ”という。

このダニの場合更に悪いことは、噛まれる人間側に免疫の抗体が出来ず、何回噛まれても初めてやられた時と同じ程度の被害を受けることである。

乾季のパンタナールでダニの洗礼を受けないためには、人間や放牧の牛が滅多に行かないような草原や灌木林には足を踏み入れないこと。

動植物の観察で、どうしても乾季の草原に人らねばならぬ場合は、ユーカリ油を肌にまんべんなく塗りつけ、別に着衣の上からシャツ、ズボン、靴に市販の防虫スプレーを塗布するとよい。

これで九〇パーセントぐらいは防げる。そして帰って来たら裸になり、目を皿のようにして身体と衣服を点検することである。

強烈なムクインのかゆさ

ダニは戸籍的に言えば節足動物門、クモ型綱ダニ目、アカリナに属しており、世界でももつとも種類の多い虫で、一〇万種ぐらいに分類できるといわれている。

そのため、ダニを専門に研究する「ダニ学」という学問分野があって、分類や形態学のほかに、ヒトや家畜の直接害虫、伝染病の仲介者、農業害虫、土質の指標種として研究されている。

パンタナールで人間がやられるダニはハダニ属のダニだが、このハダニ類は草原の草の先端に寄生しており、辛抱強く哺乳動物の通るのを待っている。

哺乳動物の体温に敏感で、動物が近付くといち早く察知して草から落下し、動物にとりつく。

そうそううまく動物にとりつけるとは限るまいと考えるのは人間の方。ダニの方は種の保存がかかっているから必死で、まず間違いなく動

物にとりつくことができる。一説によると、哺乳類の放つわずかの酪酸に敏感に反応するともいわれる。

パンタナールのダニもいやらしさでは相当なものだが、それでもアマゾンのムクインに比べるとまだましである。

この間、日本からブラジルにきた一〇人程のグループがアマゾンを回ってパンタナールにやってきた。

このお客のうちの何人かが、一晩泊まった習日、身体がかゆいと言い出した。よく聞いてみると、身体といってもはつきり言えば陰部である。

「毛布に何かいるんじゃないですか……」

といわれたが、そんな事はあるしそれも無い首をひねって考えているうちに、このグループがアマゾンから来たことに気がついた。そこで「アマゾンでどこか草原を歩きましたか」と聞いたら「牧場を見ってきました」との返事。

「ははあ、ムクインにやられたな」と即座に納得した。

ムクインまたはミクインというのは、特定ダニの名称ではなく、人間を襲うハダニのうちごく微細なグループを指す呼称で、体色の赤いと

ころかビツシヨ・コロラド（色のある虫）ともいわれる。

このムクインのうち、世界的に“高名”なのはアマゾンにいる学名をテトランチェス・モレスチシムスという種。モレスチシムスは、最高にかゆいという意味。実際にこれにたかられると、かゆさで気が狂いそうになる。

しかも微細な微細なダニだから、よほど敏感人でも、足や脚を噛みながら徐々に這上がってくるムクインには気がつかない。

そして陰毛に辿りつくと、毛根にしっかりもぐり込んで吸血をはじめ。このかゆさはいろいろな人が、さまざまに描写しているが、どんな表現を用いても誇張しすぎるといえることはない。

おまけに場所が場所だから、ひと前でポリポリかくわけにはいかず困ってしまう。毛を剃ろうと薬をつけようと、毛根深くもぐり込んだムクインには効き目はない。唯一すくいはこのムクイン、吸血を終えると寄生主から離れ草に戻って産卵しないと繁殖ができない。寄生主にとりついているのはだいたい一週間程度で、この期間を終えるとムクインは自動的に寄生主から離れてしまう。しかし、この一週間でまさに“地獄

の責苦リなのである。

防虫効果もある着色染料

河べりのジニパツポの樹に実がつきはじめた。染料植物として知られた樹である。中南米のインジオが身体の彩色に用いた染材はウルクーの仮種皮、黒はジニパツポの実と相場が決まっていた。

ウルクーはベニノキ科の灌木、ジニパツポはアカネ科の喬木で、どちらも熱帯アメリカにはたくさんあるから、インジオはかんたんに手に入れ大量に使うことができた。

ウルクーは栗のイガのような実の中に数多くの種子をもっている。この種子を包んでいる赤い泥状の仮種皮を水に溶かして乾燥させ、赤褐色の粉末をとる。

食品着色料としてすぐれており、英名をアナットと言つて現在でもチーズ、チョコレート、ソーセージの着色料として使用されている。ブラジルのスーパーや露天市で売られている“コロラール”がそれである。

一方、ジニパツポは果実の液汁を使う。サン

キースト・レモン型の果実の未熟菓をつぶし、とれた液を数日放置しておく、空気に触れて酸化し、透明だった樹液が緑色からスミレ色、青色、紺色と変化し、最後にはほとんど黒に近い色になる。これをインジオはウルクーの赤と共に身体に紋様をつけたり、土器や布を染めたりした。染色力はジニパツポの方が強く、また永續するが、ウルクーも油で溶いて身体に塗ると永續きする。

ジニパツポは果実だから食べられるが酸っぱすぎるので生食は無理。ジュースにしたりシロップにして飲むのがふつう。そう特別うまいものではない。

このジニパツポの実、どういうものか魚のパターやタンパキが好む。魚にも味覚があり、舌以外にもひげ、唇、口の内側などを使って甘、辛、酸、苦の四つの味覚を感知できることが研究によつてわかっている。

とすると、バクーやタンパキがジニパツポを好むということは、酸味に対して特別の嗜好をもっていることにもなる。

機会があったらレモンやマラクジャ（クダモノトケイ）のような酸っぱい果物で実験し、証明

したいと思っっている。

ところでインジオの用いた染料だが、ウルクーやジニパツポで身体を彩色するのはむしろ彼らの風習であり、そこにはいろいろな約束ごとや、ややこしいきまりがあるには違いない。

しかし、同時に、身体に染料を塗ることは防虫効果にもなっているのである。

ブラジルのインジオは低地の熱帯雨林に住むのが多い。ここは暑い地方にきまつているから、ほとんど衣類を必要とせず裸で生活ができる。

裸の生活は気がラクだが、蚊やブヨ、ダニをはじめとするありとあらゆる吸血昆虫の襲撃にさらされることは避けられない。そこで防虫効果のある染料を身体に塗ったのである。

ジニパツポは皮膚病に効くし、ウルクーは昆虫の忌避剤となる成分のあることがわかってい

る。これを知らないカトリックの宣教師たちは、インジオの彩色を蛮風とみなし、彩色したインジオの教会への出入りを禁止した。

たしかに、スクリー（アナコンダ）の脂で溶いたウルクーは強烈な匂いを放つから、宣教師が嫌ったのも無理はないのだが……。

へびとトカゲの話

蛇喰い蛇ムスラーナ

パンタナール特産というわけではないが、ムスラーナという蛇がいる。

ラーナというのはインジオ語で「……のようなもの」「似たもの」「もどき」で、ムスラーナは「ムスンに似たもの」の意になる。

ムスンは蛇に似た魚だが、ムスラーナの方は正真正銘の蛇で、ナミへび科に属している。

体長二・五メートルにもなる大きな黒い蛇で、メキシコからアルゼンチンまで分布するが、水浴を好み、アマゾンやパンタナールに多い。

このムスラーナはまことに変わった食性をもっており、餌として他の蛇を食べる「蛇喰い蛇」なのである。

しかも毒蛇を好んで食べるのだから、生物を創造した造化の神もおもしろいことをするものではある。

ムスラーナの奇妙な習性については昔から知られているが、ピタル・ブラジル博士の研究では、一年間に一七匹のジャララカと、一匹のポイペーバを食べたという記録が残っている。

またブタントン研究所での実験では、体長二メートルのムスラーナが、ジャララカはもちろんだが一・二メートルのカスカベルと一・三メートルのウルツーを襲い、呑み込んだことが観察されている。



そこのけそこのけ、蛇さまのお通りだ

カスカベルというのはガラガラ蛇のことで、スルククー、ウルツと並ぶブラジル毒蛇三羽鳥のひとつである。

ムスラーナは大きな蛇で、相手の毒蛇を強力な力でまき込んで押えつけ頭から呑みこんでゆくのだが、相手の毒蛇もそうそうおとなしく呑まれるわけではない。

あらんかぎりの力をふりしぼって暴れ回り、ところかまわずムスラーナに噛みつくのだが、なにぶんムスラーナは力が強いから、遂には力つきて呑みこまれてしまう。

格闘の際にムスラーナも毒蛇に噛まれるのだが、いっこうにこたえた様子もなく、涼しい顔で毒蛇を料理してしまう。

実はこのムスラーナは毒蛇の毒に対して非常に強い免疫を有しており、スルククーのような猛毒の毒蛇に噛まれてもさっぱり効き目がないからふしぎである。

ところがその後の研究で、ムスラーナにも泣きどころのあることがわかってきた。

だいたいブラジルの毒蛇は一六種類とされているが、そのほとんどがクサリヘビ科、マムシ亜

科の蛇で、スルククー、カスカベル、ウルツー、カイサラ、コチアラー、ジャララカ、ジャララクスーなど、みなこのマムシ亜科に属している。

沖縄のハブや日本本土のマムシももちろんこの仲間だが、ムスラーナはマムシ亜科の毒蛇に對しては非常に強い免疫をもっている。

しかしながら、ブラジルにいるコブラ科のサンゴ蛇（コブラ・コラール）の毒には免疫を持たず、噛まれるとムスラーナは死んでしまう。だから自然界ではムスラーナがサンゴ蛇を襲うことは決してない。

とにかく、人畜無害で毒蛇を専門に食べるムスラーナは、珍しく人間に評判のよい蛇である。ムスラーナを繁殖させて、毒蛇退治に使うという計画もかつてはあったが、これはムリ。なぜならムスラーナは毒蛇と共存しているので、餌の毒蛇が減れば自分も絶滅してしまう。

生態系は微妙であり、人間にだけ都合よくはいかない。

ニコチン毒に弱い蛇

毎年雨季になって冠水域が拡がると、まず魚

が浅いところに行って産卵する。当然水鳥やワニも魚を追って冠水域に散ってゆく。

この現象と反対に、水棲動物以外の場合には水に追われ、冠水しない地帯に集まってくるから水に浸らない土地のフアウナも賑やかになる。

この中で歓迎されざる動物の筆頭は蛇かも知れない。一九八七年の雨季はやたらに蛇が集まり、ホテルでも従業員の一人が毒蛇に噛まれてあわてて飛行機でカッセレスの町に運んだというハプニングもあつた。蛇にしてみればなにも好んで家の周辺に集まるわけではないのだが、浸水しない地帯を選ぶとなると自然にホテルの近くにやって来ざるを得ないのである。

パンタナールにはいろいろな毒蛇がいる。このうち数の多いのはボツカ・デ・サツポ(蛙の口)と呼ばれるマムシ科ボスロブス属の蛇だ。ジャララカの一種である。これはいくら大きくても五〇センチ以上にはならず見た目にもあまりおそろしくない。そのためつつい油断をしがちだが、小さい割には毒性が強く、噛まれると血液循環障害や出血、それに壊死、浮腫を起こし、かなりいちじるしく血圧降下をきたす。放っておけばもちろん生命にかかわる。

このホテルではこれまで、ボスロブス属の小さな毒蛇しか見なかったので、クロタルス属の大きなカスカベル（ガラガラ蛇、ラットル・スネーク）はいないのかと思っていたら、一九八七年は三匹の大きなカスカベルを捕まえたのでいささか驚いた。

やはりパンタナールは観光地ではない。足元には充分気をつけて、草むらや森林を歩く時は長靴をはくのが無難。

蛇の食べものはいろいろあるが一番の好物は間違はなくカエルで、八割方はカエルを餌にしている。小さな蛇は小さなカエル、大きな蛇は大きなカエルを食べるのである。

真黒い二メートルぐらいになる“蛇喰い蛇”のムスラーナは毒蛇しか食べないのかと思ったら、どうしてどうして、大きなガマガエルの胴中をくわえてグイグイ呑みこむのにはびっくりした。

ガマガエルは体表にイボ状の毒線をもっており、強心性ステロイドを主成分とするガマ毒を分泌する。

したがってふつうの蛇はガマガエルを捕食することはしないものだが、マムシ科の毒蛇の毒

に強い免疫をもつムスラーナには、どうやらガマ毒も通用しないらしい。

ところで蛇という動物は毒蛇にしる無毒にしる、小さな蛇にしるアナコンダのような大蛇にしる、タバコのニコチンを大の苦手とするといわれている。

ホテルで小さなジャララカをつかまえたので、北林旦那と試してみることにした。夫人には内緒である。ジャララカをガラスびんに入れ、旦那がタバコの煙をしこたま吹き入れて、びんを密封した。

さて、成り行きいかんと様子をみていたら、なんとたった五分でジャララカはあっけなく死んでしまった。

蛇が小さ過ぎたかな、と大きな蛇が出てくるのを狙っていたら、数日して三メートルのムスラーナが庭の木にあらわれた。これにタバコを溶かした水をぶっかけたら、木から落ち、狂ったように逃げてしまった。たしかに蛇はニコチン毒には極端に弱いのである。

原始的な大蛇スクリー

この間、ホテルの近くの河でスクリー（アナコ
ンダ）を捕まえた。

ホテイアオイの茂みにかくれていたのを、船
頭が二人がかりで生け捕りにしたのである。正
確に測ったら四・五五メートルあった。

ボア科のエウネクテス・ムリメス種では平均
的な大きさか、やや大きめといえる。

私はたとえ蛇でも無毒の蛇なら殺したくない。
しかし、このくらい大きいスクリーをホテルの
近くで放すとアヒルや仔豚が狙われるし、ヨチ
ヨチ歩きの赤ん坊にも危険である、ということ
で、従業員が殺して河に流し、ピラニアの魚腹に
葬ってしまった。

いくらスクリーでもふつうの状態で人間など
襲ってくるものではないのだが、子供が襲われ
るといわれてはやむを得ない。

この大蛇はスクリー、またはスクリジュと呼
ぶのが一般的。むろんツピー語である。だからブ
ラジルのインジオは昔からこの蛇をスクリーと
いうものと思っていたらこれが違っていた。

ツピー系インジオはスクリーなどとはいわず、

「ボイスー」「ボイグアスー」「ボイウーナ」などと言った。

ボイと片仮名で書いたが、ほんとうはMBO
I 「んボイ」で、これが蛇のこと。ボイアスー
は大蛇、ボイウーナなら黒蛇のことになる。



780センチ、107キロのスクリー

スクリーの方はツピー語で海のサメのことを言うので、これは一五八七年のガブリエル・ソーザの『ブラジル情報』にも一五九四年のF・ソアレスの『ブラジルの特徴』にも「現地のインジオはサメのことをスクリーまたはソクリーという」と書いてある。

それが時代が下るにつれてアナコンダ大蛇と

混同されるようになり、ついには、“スクリー”は水棲の大蛇のことを指すようになってしまったのである。

思うに獲物を襲う凶暴さと素早さでサメもアナコンダも共通しているので、後の文明人がとり違えたものらしい。こういう例はわりあい多い。

ボア（オオヘビ）科の蛇は進化の形態からすると原始的な蛇で、左右の肺臓と後肢の痕跡が残されている。

蛇はトカゲと同じ先祖から分化し、現在の体形のように特殊化したものだから、右左の肺臓と後肢がなくなっているのがふつうなのである。

ボア科の蛇はブラジルには数が多く、四属、五種、九亜種に分類されている。人間にもよく馴れ、ネズミ取り用に屋内で飼ったり、見せものなどに使うジボイアことボア・コンストリクターもこの仲間である。

ところで、スクリーことアナコンダは実際どの程度危険なのだろうか。これについてパンタナールの老カボクロ（原住民）は、たいへん興味ある話をしてくれた。

「スクリーという奴は地上でも水中でもトグロを巻いていたり、長く伸びていたりする。こういう状態の時は休んでいるか、移動しようとしているかだから、まず間違ひなく襲ってはこない。スクリーが本当に危険なのは、河べりの木に尻尾をしつかり巻きつけ、鎌首をもたげ、口からシユウシユウ音を出している時なんだよ。

こんな時には絶対に近寄ってはならぬ。それこそ絶対にだ。大きな鹿を捕えるのを見たが、木に巻きつけた尾をテコにして襲うから、その速いこと。それにテコを利用して締める力は信じられないバカ力だね、あつという間に鹿の背骨もアバラもバラバラさ」

やはりこいつは危険なシロモノである。

昔からある大蛇論争

世界でもっとも大きい蛇は、つい先ごろまではインド産のアミメニシキヘビといわれていたが、現在では南アメリカ産のスクリー（アナコンダ）とするのが動物学者の常識である。

長さは両者とも同じくらいだが、体重がずつと重い。だからこのスクリーは重い体をひきず

らねばならぬ陸上よりも水中の生活を好み、体を水中に沈め鼻先だけ水上に出して休むスタイルがお気に入りである。

ボア科の蛇で、ブラジル内陸の河のあるところならたいてい棲息しているが、やはり多いのはアマゾン、パンタナールそれにボリビア、パラグアイのチャコ地方である。

この大蛇スクリーが最大何メートルで、体重何キロになるのか昔から論争のタネになっている。

ブラジルの奥地で現地の住民に大蛇の話聞くのはおもしろいが、大蛇の大きさがだんだんエスカレートしてゆくには閉口する。四、五年前、これはパンタナールではないのだが、金山で有名なアマゾンのセーラ・ペラーダに行った時のことである。近くの町のバール（居酒屋兼食堂）で食事をしていたら、七、八人の子供がワアワア騒ぎながら大きなスクリーをかついできて、バールの前においた。

もう死んではいたが、バールのおやじがはかったら六メートルに少しばかり足りなかった。

そのバールには、トラックの運転手が五、六人食事をしていたのだが、これをきっかけに賑や

かな大蛇談義がはじまった。

「この前、マラバの近くで見たヤツは八メートルはあったぜ」

一人がいうと、

「いや、オレがマット・グロツソのパンタナールでみたのは一〇メートルはたしかに超えていた」
ともう一人がいう。

「オレがみたのは皮だけだけど、一二メートルはあったなあ」

すると、おもしろくもなさそうに聞いていたバールのおやじが口を出した。

「あのな、お前さんがた、八メートルだ一二メートルだというけどね、オレがここで見た最大のスクリーは二五メートルあったんだぜ。いいかい二五メートルだよ」

運転手連中は一瞬黙り込んだ。二五メートルとは話がでかすぎるのである。やがて一人が反論した。

「ウソだよ。そんな大きなスクリーがいるわけないじゃないか」

「それがいたんだね。オレも最初は太い丸太が河に浮んでいるのかと思ったよ」

「思ったのじゃなくて丸太そのものだったんだろ

う……………」

「バカ言うな、丸太が河上に溯るかい」

おやじは自信たっぷりである。

「ふうん……………で、太さはどのくらいあった?」

「そうさな、このくらいは充分あったな」

と、おやじが指したのは、水がめ代りに使っているドラム缶だった。

二五メートルのスクリーはもちろんウソである。實在しないだけでなくて、理論的にも解剖学的にもそんな蛇はあり得ない。

「動物の骨が体を支える能力は身長の一乗に比例するのに対し、体重の増加は身長の一乗に比例する」という定理がある。

二五メートルのスクリーだと蛇形の体型の骨格では体重を支えきれず、動くことが出来なくなる。

動けない蛇などいるわけがない。蛇形の体型を保って動ける蛇の最大は一メートルが限度で、これ以上のヘビはマユツバである。

蛇が好物のカエル

パンタナールは環境が環境だからカエルが多

い。ブラジルにいるカエルのほとんどがここに
いるといってもよいぐらいだ。

日本ではヒキガエルもトノサマガエルもアマ
ガエルもおしなべてカエルというが、おかしな
ことにブラジルにはこのカエルに相当する言葉
がない。

ブラジルではヒキガエルはサツポまたはクル
ルー、トノサマガエルや食用ガエルはラン、アマ
ガエルはペレレカと、それぞれ呼称が違ってい
る。

このごろはブラジルでも都会地ではサツポ、
ラン、ペレレカの区別が出来ない子供が多く
なったが、田舎の子供でこの区別のつかない子
供はまずいない。

もちろん、カエルを意味するバトラキオ（無
尾両生類）というラテン語からきた専門用語も
あるし、学名で両生綱無尾目を意味するアヌラ
もあるが、一般的にこんなむずかしい言葉は使
わない。

インジオは動植物の詳細な観察者で、形態や
特徴、習慣をよく把握し、それぞれ分類して名前
をつけている。

専門の分類学者ではないから間違うことも多

いが、それでも現代の文明人よりははるかに詳しいし、またどんな種類でも一律にカエルとかサツポとかの名称で片づけてしまうような粗雑な神経は持ち合わせていない。



夜になるとあらわれるヒキガエル

さて、パンタナールにはクルルーとかサツポ・クルルーと呼ばれるヒキガエルが多い。世界最大で、体長一八センチに達する大ヒキガエルもたくさんいる。

ヒキガエルほどの種類でも耳下腺や皮膚の分泌腺から毒を出す。いわゆるガマの膏と称され

る乳液だが、これが肌に触れると痛みを覚え、発赤する。また目に入ろうものなら痛くて目が開けられなくなる。

経験のない犬がこれに噛みつき、泡を吹いてころげ回ることがよくあるが、ブラジルのヒキガエルは体も大きく毒性も強いから注意すること。

実に貪欲な食性をもっており、あらゆる昆虫を餌にするが、小さなネズミや小蛇までパツクリ呑みこんでしまう。

カエルが蛇を呑むとはちよつと考えられないことだが、このブホ・マルチヌスという学名のヒキガエルは小蛇が大好物なのである。

ホテルの渡り廊下には夜になるとヒキガエルが何匹も現れる。電灯に寄る虫を食べに来るのである。一晩中、虫を食べて朝になるとどこかへ行ってしまう。

ヒキガエルの顔など、どれでも同じように見えるのだが、個体識別のできる北林夫人に言わせると、毎晩出てくるのはきまつて同じカエルなのだそうだ。

そのうち、廊下ではなくて、台所に入入りするヒキガエルがあらわれた。ひとまわり大きな奴

で、身体が重いから、ドス、ドスとしか動けない。ただし獲物に飛びかかる時はけっこう素早い。カエルは動く餌でないと食べないというのが定説だが、このガマ、馴れたら生肉の刻んだのをバクバク食べるようになった。しかし、ガマという奴はいくら馴れても一向にかわいくない。



ホテルで北林夫妻とくつろぐ著者（中央）

逃げ足の速いイグアナ

ブラジルでふつうカメレオン、またはカメレオンと呼ばれるトカゲは、イグアナ科イグアナ属のトカゲのことで、アフリカやマダガスカル島にいる体色を変えるカメレオン科のトカゲではない。

しかし、どちらもイグアナ主科で似てはいる。カメレオンという言葉はもともとギリシャ語だから、ヨーロッパから来た人間がつけたのだから。

ブラジルのツピー系インジオはこのイグアナをシンンブーといった。キラキラ輝く奴という意味で、陽光に当たると緑の体色が輝いて見える。

それにこのトカゲ、やたらに日光浴がすきで、焼けつくような直射日光の下で平気でじっとしている。

シンンブーにも何種類があるが、一番大きなイグアナ・ツベルクラッタは体長一、五メートルに達する。

もつとも、一・五メートルといっても頭胴長はせいぜい五〇センチ止まりで、あとは長い鞭の

ような尻尾だから、実際に見るとそう大きな感じはしない。

頭が大きく、頭から尾にかけての背中の中線に恐竜を思わせる飾りウロコがタテガミのように並んでおり、おまけに咽喉の下にも大きな飾り袋が垂れ下がっていかにもおそろしげに見える。

事実、イグアナの仲間はトカゲ亜目の中ではもつとも原始的で、恐竜のおもかげを一番多く残しているのだ。

だが、見かけの怪異ぶりとは逆に、性質は温和で、むしろ臆病といえる。逃げ足は実に速い。

パンタナールには数が多く、水辺の河につき出た樹の枝にじつとしていたのをよく見かける。近寄ると水中にダイビングするか、陸地に飛び降りて逃げる。

猫よりも身軽で、一〇メートルぐらいの樹の枝から軽々と飛び降りるし、水の中でも素早く泳ぐ。

このトカゲの餌は草木の新芽、果実、花、昆虫、ミミズ、カタツムリなどで、まずは人畜無害の平和主義者。むしろ人間の方によく食べられた。肉も卵もたいへんうまいのである。

むかしはどこにでも数が多かつたらしく、今でもサンパウロ市にはシニンブーという街路の名前があるほど。

素早いトカゲで一人で追っても捕えられないので、シニンブーを捕える時には何人かで取り囲み、棒で叩いてとり押えるのだそうだ。

小さい時から飼うとよく人に馴れる。北林夫人にも三〇センチぐらいの赤ん坊イグアナがなついて腕や首にまつわりついていた。「でもこれ、吸盤みたいな手足の感触が気持ちわるいんです」とのこと。

食用にするトカゲではほかにテグトカゲがいる。これにも大きなツピナンビス・ニグロプンクタツスとツピナンビス・テグシンがいるが、どちらも食べられる。

奥地の住人は今でもトカゲを食べているが、食味としてはテクトカゲよりシニンブーの方がすぐれているとのこと。

テグトカゲはツピー語でチウーとかジャクラウと呼ばれる。シニンブーと違ってニワトリの卵を盗みにくるので人間には目の仇にされる。

人間に向かってくるとはまずないが、犬に追いつめられると独特の反撃をする。

身をかがめいきなり犬に噛みつくと同時に、長い尾を鞭のようにしならせて犬の顔面を叩くのだ。

この攻撃は犬に致命的ダメージを与えるほど強力ではないものの、犬を驚かせるには充分。思わず離れた隙にトカゲは逃げてしまうのである。

怪力の珍獣ワニトカゲ

ブラジルにはトカゲの種類が多い。有鱗目トカゲ亜目に属するものでは約一五〇種ぐらいになると推定されている。推定といったのは、この分野での調査が不完全で、まだ正確な分類表ができていないからである。

ブラジルにはアジア、アフリカ、オーストラリアの熱帯にいるオオトカゲ科のトカゲの棲息はなく、二メートルを超すような大物はいない。ブラジルでの大物はいずれもテグトカゲ科に属しており、体長は一メートル前後がふつう。しかし、パンタナールにいるジャクルシー（カイマントカゲ）は体長一・五メートルに達する。おそらくこれがブラジル最大のトカゲかと思われる。

一名ワニトカゲとも言い、水中を好み、貝やカニを捕食する変わった食性をもっている。また木登りも得意で樹上のカタツムリも食べる。

ジャクルシーには二種類あって、アマゾン下流からギアナにかけて棲んでいるドラカエナ・ギアネンシスと、パンタナールにいるドラカエナ・パラグアイエンシスがある。習性はどちらも同じだが、アマゾンのは小さく体長八〇センチぐらいにしかない。パンタナールでは一般にはジャクルシーの名前は使わず、ビボラとっている。



ワニトカゲは木登りが得意

爬虫類の中では最も品質のよい皮革がとれるところから、昔はワニ以上に珍重され狩られた。ウロコが緻密で紋様が美しく、財布やハンドバックに仕上げると非常に上品な製品となる。もちろん現在は捕獲が厳重に禁止されている。さきごろホテルの前の河で泳いでいるジャクルシーを生け捕りにしたので、早速陸に引き上げ詳細に観察した。観察後はもちろん放したのだが、なるほどワニトカゲとはよく言ったもので、このトカゲは上半身がトカゲで下半身がワニなのである。ふつうのトカゲの尻尾はすつと丸く、細くなっているのに対し、ジャクルシーはワニ型で縦に高く横幅が狭い板状の強大な尾をもっている。泳ぐ時にはこの尾を左右に振って進むのだ。

ところでパンタナールの住民は、このトカゲは毒トカゲでしかも毒蛇よりも強い毒を持っていると信じており、ジャクルシーを大変こわがる。この“伝説”はほぼパンタナール全域の牧童や住民に信じられている。だが、実際にはジャクルシーには毒がない。だいたいトカゲで毒のあるのはアメリカとメキシコにいる二種の毒トカゲで、他のトカゲにはない。

毒がないのになぜ毒トカゲと思われるのか。それはこのトカゲの性質が荒く、緊急時には人間にさえも向かってくるからだ。ジャクルシーの歯は臼歯というよりベアリングの玉のようになっていて、貝でもカニでも穀ごと噛み砕くことができる。その上、おもしろいことに貝を砕いても柔らかい身だけを呑みこんで、硬い穀の方は舌を使って吐き出してしまふ。ベアリング状の歯は噛み砕く役目と共に食べ物の選別にも適しているのである。こういう歯をもったジャクルシーの下アゴの力は強大で、しかもワニと同じく身体を振って獲物を喰いちぎるから、裸足の人間が足に喰いつかれると指がちぎれて大怪我をする。

但しジャクルシーの方から人間を積極的に襲うことはまずない。

奇怪でゆかいな動物たち

楽観できぬ、聖地”の前途

パンタナールで一番よく見かける哺乳類は齧歯目のカピバラだろう。図体がわりに大きい上に一〇〜二〇頭のコロニーを形成し、集団で行動するから見つけやすいのである。

齧歯目の動物はウサギ、ネズミ、リスなどの仲間だから、一般的にはいずれも体が小さい。こうした仲間と比べると、カピバラは図抜けて大きく、成獣になると三〇〜四〇キロにもなりオスは最大七〇キロに達する。もちろん齧歯目中の最大種である。二番目はパツカの一〇〜一五キロ。

カピバラ、パツカ、クチア、モコ、ヌートリア、キノボリヤマアラシなど南米の齧歯目は、ヤマアラシ亜目という分類に属していて、旧世界にいるヤマアラシを除けばほとんど南米独特の特产科なのである。

カピバラはカツピン（草）ウバアラ（食べる）というツピー語だが、齧歯目の動物には他にも



こういう風景もやがては消えてゆくかも……

パツカ、クチア（アグーチ）、モコ、ブレアなど、ツピー語の名称がそのまま世界に通用しているものが多い。

ほかに適当な名前がつけられないからである。もつとも、カピバラはアルゼンチンやウルグアイではアルピンチョの語を用いることが多い。

さきごろホテルの食堂に小さなネズミがあらわれ、従業員が大騒ぎで追い回し、殺した。珍しいことである。おそらくカツセレスの町から買った食料品の箱の隅にでももぐり込んでいたのに違いない。

「そういえば、ここではネズミは見かけませんねえ」と北林夫人が改めて気がついて感心した。

現在ネズミはブラジルの各地にはびこり、とくに不衛生なスラム街などには群居して食料を食い荒らし病原菌をまき散らし、人間に大きな被害を与えている。

ところが、意外に思うかも知れないが、クマネズミとかドブネズミとかのありふれたネズミ科のネズミはほかから持ち込まれた移入種で、新大陸固有の齧歯目ではない。

したがって、ネズミを意味するインジオ語はまったくない。ツピー語にないだけでなく、ジエー語系やグアラニー語系にも、ネズミを指す言葉はないのである。

新大陸にネズミが入ってきたのはコロンブス以降であり、ヨーロッパからきた船に巣喰っていたネズミが勝手に下船し、密入国した結果な

のである。

ネズミは環境適応力にすぐれ、食性の幅も広いから、ブラジルのどこにでも棲めそうなものだが、実際は“町の住民”で、人間のつくった建物とか下水道とかの人工施設に棲息している。いくら適応力に富むといっても、新参者のネズミが直ちにアマゾンの大森林やパンタナールの草原を我がもの顔でのさばれるほど、大自然の生態系は甘くはない。

ネズミが人間の庇護を離れて町から大自然に進出しようとしたら、たちまち外敵に襲われる。ワシ、タカ、フクロウのような猛禽やエマがまず狙うし、蛇にもやられる。山ネコやオポッサムのような小型食肉獣もおいしいネズミは大好きだ。河を泳げばピラニアをはじめとする肉食魚が待ち構えている。

という具合で、いかにネズミが繁殖力を誇つても、そうかんたんには永年かかって構築した自然の生態系の防御システムを突破することが出来ないようになっていく。

繁殖率悪い大アリクイ

パンタナールのホテルにはよく日本のテレビの取材班が動物の撮影にやってくる。

鳥とかワニとか魚とかもあるが、お目当ての人気者はなんとといっても南米の奇獣タマンヅア・バンデイラ（大アリクイ）である。

これはとにかくユニークな存在である。体長は尾を別にして一・二メートル、尾は大きな房状で六〇〜九〇センチ、アリの巣に首を突っ込みやすいように細く長い口を持ち、しかも粘りのある三〇センチほどの舌がある。

前肢に三本の大きなカギ爪と一本の小さなカギ爪をもっていて、これで硬いアリ塚を苦もなく打ちこわす。

カギ爪があまり大きく、しかも内側に曲がっているため、アシのウラを着地させることが出来ず、アシの甲側を地面につける奇妙な歩き方をする。

アリクイは文字通りアリを食べて生きている。だいたい哺乳類の中で、肉食でも草食でも雑食でもなく昆虫食というのは珍しい。

昆虫は餌としては小さいし、そう一度に沢山

捕食はできない。したがって昆虫食獣は決して大型になれない宿命を背負っている。

大アリクイは昆虫食獣としては世界最大だが、これは餌としてもっとも数の多いアリを選んだことと、アリ塚をこわす頑丈なカギ爪と大量にアリを捕食できる長くて粘る舌を武器として開発したからである。

草原を得意とする獣だから、アマゾンの森林などより、パンタナールのような環境が適しており、昔は個体数も多かった。

ところが、食用にするわけでもないのに、珍しいという理由だけで文明人に捕獲され、個体数は激減した。

なにしろ大アリクイの繁殖率はたいへん効率が悪い。赤ん坊を背中に背負って歩く習性があるため、一産一仔が原則。しかも妊娠期間が一九〇日とこのくらいの大サイズの動物としては異常に長いのである。

日本のテレビ取材班がパンタナールに来てても、自然の状態でそう都合よく大アリクイが見つかるものでも、撮影できるものでもない。

そこで、あらかじめ大アリクイを捕えておく方法をとる。事前に現地に依頼し、懸賞金をつけ

て大アリクイを捕獲させるのである。



北林夫人の手から器用に肉を食べる大アリクイ

こうして捕えた大アリクイは撮影した後に放してやる。放すのだから問題はなさそうなものだが、実際は撮影のある度に何匹かの大アリクイを殺す結果になっている。

アリクイはむろん猛獣ではない。が、危険が迫ればあの内側に曲がったカギ爪を相手に打込んで、抱きついて離れない。独特の防御兼攻撃方法

だ。

大アリクイに抱きつかれるのをおそれる人間は通常、直接手を出すようなことはせず、犬をけしかけるのである。

犬は手心など加えずストレートに襲いかかるから、人間が駆けつけて引き離す間に大アリクイを殺すか、瀕死の重傷を負わせてしまうのである。まず一匹のアリクイを生捕るのに二匹を殺すことになるのだ。

ところで、大アリクイは人間にもよく馴れる。撮影のため捕えた大アリクイに、北林夫人が生肉を刻んで手のひらにのせてやったらあの長い粘る舌で器用に食べた。

北林夫人だからできるのかも知れないが、肉を食べるとは意外だった。

“残酷物語”オンサ狩り

この前、隣りのファゼンダ（農場）でオンサ（ジャガー）を殺した。もちろん違法である。野生動物はどれでも捕獲したり殺したりしてはいけないが、オンサとかタテガミオオカミは絶滅に

瀕しているのでとくにうるさい。

しかし、そうは言っても現実に仔牛が次々と襲われると放っておくわけにもいかない。結局射殺して知らぬ顔の半兵衛をきめこんだ。

この農場主、代々パンタナールで牧場を経営している。ある日、ホテルに遊びに来た農場主から「自分のじいさんの代の話だが……」と興味あるパンタナールのオンサ狩りの話を聞いた。以下紹介してみる。

パンタナールには一八世紀の後半から放牧の牛が入るようになったが、牛や馬が入ってくるのとオンサはそれまでの献立を一変し、牛や馬、とくに仔牛や仔馬を狙うようになった。

オンサにしてみれば当然で、家畜は全く自衛力をもたず無抵抗だからこんなラクなことはないのである。

これが野生動物の場合だとそうはいかない。無力のカピバラだって危険が迫れば水の中に逃げるし、アンタは居直ってバカ力で体当りしてくる。

逃げ足がノロいからといって大アライクイなどうっかり襲おうものなら、抱きつかれ、手カギを

背中に打ち込まれ、万力のような腕で締めつけられて無理心中を余儀なくさせられる。

王者といえども、自然界では努力しなければそうカンタンに食べ物には手に入らないのである。

仔牛や仔馬を狙うのはオンサの立場からすると無理もないのだが、飼っているファゼンデイロ（農場主）にしてみれば憤激のタネで大がかりなオンサ狩りがいつも行われた。

ファゼンデイロがオンサを殺すのは最初は牛を守るための自衛手段であったが、そのうちスポーツとしての狩猟と高価に売れるオンサの毛皮を目当てにする狩りになってくる。

趣味と実益が一致したわけで、ここにザカイエイロと称するパンタナール独特の猟師が登場することになる。

ザガイアというのは槍のことだが、ポルトガル語でもインジオ語でもなくアフリカの言葉で、ザガという硬いヤシの木からつくる槍であり、奴隷として連れてこられたアフリカの黒人が彼らの故郷で使っていたものである。

ザガイエイロは「槍持ち」「戦士」の意味だが、むろんこれはポルトガル語との合成語である。

パンタナールには狩猟のうまいグワットース

族というインジオがいて、オンサもよく獲っていた。他の部族のように弓矢を使わず、槍でオンサを仕止める特別な技術をもっている。

パンタナールに入った初期のファゼンデイロ達は、グワットース族の狩猟のしかたをみて感心し、さっそく彼らのノウハウをとり入れた。

それまでオンサ狩りはもっぱら鉄砲だけだったが、鉄砲で射つと穴が開いて折角の毛皮が台なしになるのである。

オンサ狩りは犬を使って樹上に追い上げ、鉄砲で眉間を狙う。うまく当たって、しかも弾が頭蓋骨に止まれば射入口しか傷がつかないのだが、なかなかそうはいかない。

そこでインジオや黒人のザガイエイロに槍による一騎打ちをさせたが、これは一種の残酷物語といえる。

勇敢なザガイエイロ

ザガイエイロの使う槍は穂先が約二二センチ、幅五センチで、長さ二メートルの堅木の柄に差し込まれており、穂先の基部に十字型のツバのようなものがついている。

これは鋭い穂先がオンサの体を突き抜けて背中の毛皮を傷つけるのを予防するための止め具で、穂先の長さしか入らないように出来ている。

グワットース族の槍の穂先は骨製だったが、ザガイエイロの槍の穂先は鋼鉄製である。

オンサ狩りはファゼンデイロのパトロンが鉄砲をもちザガイエイロが槍をもって、オンサ狩りに経験のある五、六匹の犬をつれて出かける。

ザガイエイロが複数の場合もあるが、オンサに立ち向かうのはかならず一人で、奴隷制時代はザガイエイロはインジオか黒人の奴隷と相場がきまっていた。奴隷解放以後もザガイエイロはパトロンの使用人である。

ザガイエイロは僅か二メートルの短槍で直接オンサに立ち向かうのだから、たいへんな勇気と熟練を必要とする。

パトロンであるファゼンデイロは、一発で仕止める自信のある時以外はザガイエイロにまかせ、少し離れたところで鉄砲をかまえ、援護する。

追いつめられたオンサは、最後には後肢で立ち上がり、前肢を大きく上げ、爪をむき出してザガイエイロの頭を狙って跳躍する。この一瞬ザ

ガイエイロは猛然とダッシュし、すれ違いざまオンサの心臓かノドを突く。髪の毛一筋ほどの誤差も許されない緊張の瞬間だが、ザガイエイロは勇猛であると共に冷静、沈着さも必要である。熟練したザガイエイロならたいい仕損じはないが、老巧なオンサや以前に追われた経験をもつオンサは人間の計算外の動きをする。

仕損じた場合はそのまま走り抜け、オンサの爪の届かぬところで再び態勢を立て直す。

しかし槍を叩きおとされたような場合には、パトロンの援護射撃にもかかわらずオンサの爪にかかって命をおとすこともある。

ザガイエイロが心臓やノドを狙うのはそこが急所であるからだ、もうひとつ仕止めて皮をはぐときにノドから腹の正中線にナイフを入れるので、槍傷がほとんどわからなくなるからでもある。

オンサの毛皮で一番価値のあるのは首筋から背中にかけてのあたりで、桜の斑紋がくつきり浮き出ている上、毛皮の質もよい。

腹は毛皮がやわらかく斑紋もボケでいるので、取り引きする際でも腹側の傷はあまり問題にならないのである。

オンサは利口な動物だから、一度仕損じて逃げられるとなかなか捕まるものではない。それほどばかりか人間や犬に敵意をもって逆につけ狙う。

オンサを追いつめる犬は勇敢な犬だが、五、六匹のチーム・プレイでならオンサをたおすことが出来ても、一対一ではとうていオンサの敵ではなく餌食になってしまう。

ザガイエイロによるオンサ狩りも今は昔のものごとがたりである。一九六九年の野生動物捕獲禁止令で法律的にも狩猟が出来なくなったが、それよりもかんじんのオンサが姿を消してしまったのである。

過去二百年で数百万頭のオンサが殺され、現在パンタナールのオンサは推定一万頭にすぎない。

激減した大カワウソ

北林夫人が手許において馴らしたい哺乳動物に大カワウソがある。

「だって、あれ人間によくなつくんですよ。動作も可愛いですしね。それに勝手に河に行つて魚を捕ってくるから餌の心配がないでしょう」

ただし、生け捕るのがむずかしい。大カワウソは雌雄の番（つがい）で生活している。だから、つがいを生け捕れば仔を産ませることが出来る。この仔をかわいがってホテル付きの大カワウソに育てようというのが夫人の遠大な計画。

チャンスを狙って何度もボートで追いかけるのだが、陸上ならともかく水の中で大カワウソを捕えるのは至難の業である。夫人の望みもなかなか叶えられない。

現地でアリランニヤと呼ばれるこの大カワウソや、ロントラというふつうのカワウソもこのところ数が激減している。毛皮用として無制限に乱獲した結果である。

ブラジルの動物で毛皮のまますます使えるのは、カワウソ、大カワウソおよび水オポッサムと日本語でいわれるムクラ・ダ・アグアで、いずれも水棲動物である。

いくら熱帯が暑いといっても、年中水の中にもぐる生活をしていればそれ相当の防寒体制も整えねばならず、自然、毛皮の質もよくなってくるのだ。

大カワウソというのは南米特産のカワウソだが、イタチ科の獣としてはいちばん大きく、頭か

ら尾のつけ根まで一・四メートル、尾は更に一メートル近くある。

棲息地は今ではアマゾンとパンタナールだけ。利口な動物で人間にも馴れる。ただギヤアギヤアとネコが発情した時のような声で騒ぐのでうるさくてかなわない。

アリランニヤの毛皮はカワウソの毛皮とくらべるとやや粗雑で品質が少しおちるのだが、昔はアリランニヤの方がよく狙われた。

これはカワウソが夜行性なのに対しアリランニヤは昼行性で、しかも大声で騒ぐから見つけやすいのである。

水オポッサムは有袋目フクロネズミ科の仲間で、フクロネズミはオーストラリア（およびその近辺）以外に棲む唯一の有袋目である。

唯一ではあるが、この仲間はブラジルでは種類が多く六一種を数え、そのうちパンタナールには三四種が棲んでいる。

有袋類は胎盤がないから胎児は子宮内で育つことが出来ず、妊娠二三日ぐらいで出産される。小指の先ぐらいの赤ん坊は母親の育児嚢（のう）に入って長いこと育てられる。

オポッサムもむろん同様だが、どの種類も多

産で、一八〜二一子も産まれる。母親の育児嚢には一二の乳頭しかついていないから、あぶれた仔は死んでしまう。どうして乳頭数をはるかに上回る仔を産むのかはまだわかっていない。

水オポッサムはオポッサムの仲間では一番小さく、体長一五センチぐらいでネズミぐらいの大きさしかないが、水棲に適応して後肢に水力キがついている。

毛皮はネズミ色に黒のシマの入るきわめて上品な色で、毛足は長く繊細優美、色つやもすばらしく、女性にとっては垂涎（すいえん）ものである。

しかし、なにぶん小さく一枚や二枚ではどうにもならないが、そのおかげで水オポッサムは細々と生き絶滅を免れている。

不当な蔑称 “ナマケモノ”

南米大陸に昔から住んでいるインジオには失礼な話だが、この大陸はヨーロッパの文明人にとってには新しく「発見」された土地なので、新大陸とか新世界とか呼ばれる。

動物地理の地域分けでも南米は新界の新熱帯

区である。あまり新の字がつくために、この動物は最近になって出現したような錯覚にとらわれることがある。

むろんそんなことはないので、むしろどちらかと言えば古いタイプが多いのだ。

それに特産科の動物が多い。これはゴンドワナ大陸が分割して現在の南米大陸ができてから、他の地域との接触がなかったためである。

哺乳類で珍しいのは貧歯目の動物、つまりタツ（アルマジロ）、タマンヅア（アリクイ）、プレギツサ（ナマケモノ）のご三家である。

これはタツのある種のものが北米南部にいたるだけで、ほとんど中南米の特産。貧歯目の動物などは進化の形態からいえば哺乳類の中でも出来の悪い方だが、珍しいことだけは間違いない。

パンタナールにはナマケモノが少ない。森林型だから、アマゾンや海岸山脈にはいてもセラード植生のパンタナールには適していないのである。

この小動物は動作のにぶいところから不当にいやしめられ、ポルトガル語のプレギツサ、英語のスロースをはじめ、世界の何語でも「ナマケモノ」といわれる。

なにもすき好んで怠けているわけではなく、長い時間をかけてこういう特殊な生活体系をつくってきたのだ。栄養価の高いインバウバという、クワ科セクロピア属の木の若葉や新芽を食料に選んだ知恵などは大したものである。

だからブラジルのツピー系インジオは、「ナマケモノ」などという不当かつ非礼きわまりない蔑称など用いず「アイ」と称した。イの方にアクセントのくる発音である。

ツピー語のアイはもともと「お母ちゃん」とか「お兄ちゃん」とか、子供が親近者に呼びかける愛称なのである。

動作ののろい愛橋のある顔をした小動物に、愛と親しみをこめて「あんちゃん」と言ったもので、まずはツピー語の傑作のひとつ。「ナマケモノ」とは雲泥の違いではないか。

ところが、「アイ」の語は普遍化せず、結局蔑称の「ナマケモノ」が一般化してしまった。

なぜか……。それは「アイ」なる語が、ポルトガル語の副詞AI（そこに）と偶然発音が同じだったからである。

「あの動物は何ていうのかね……」

「アイ……」

「えっ、なに、どこにいるって……」

「アイ……」

なるほど、これではまざらわしい。というわけで、プレギツサ（ナマケモノ）は南米特産の動物でありながら、ツピー語で呼ばれぬ動物になってしまったのである。

もうひとつ、奇蹄目の珍獣バクも、本来のツピー語であるタピールがブラジルでは使われず、逆に英国をはじめ世界で用いられている。

ブラジルではアンタが通称。日本人には覚えやすい名前だが、よく調べたらトカンチンス河流域のツピー語だった。

大多数のツピー系インジオはやはりタピールと言ったので、タピライ（バクの河）、タピラペ（バクの道）などという地名が各地に残っている。

勝手に生きる牛の群れ

マット・グロツソ州は一九七九年から南マツト・グロツソ州が出来て二つに分れたため、パンタナールも行政的には北と南に分れてしまった。

しかし、パンタナールの地理や自然を論ずる場合、行政区分はまったく意味がない。パンタ

ナールはあくまで独自の性格をもったひとつの地域である。

パンタナールの自然のサイクルは年によってややずれることはあるが、水位が上がり面積の八割近くが水につかるのが二月で、三月、四月と冠水をつづけ五月になると水がひけ出す。

一番の乾季は七月から一〇月にかけてであり、一一月になると再び雨季が始まり、二一月、一月、二月と水位が上がってゆく。

水位が一番上がる時には一面の水の拡がりで、コルジレイリヤと呼ばれる低い丘や、島状に散在している台地以外は水没する。

もつとも、乾季に草原となるところは完全に水没して湖になるが、灌木林のところは完全に水没することはなく水中林の感じとなる。

乾季には河筋や低地に水が残るほか、バイアとかラゴアとか呼ばれる池が無数に残る。これは特にコルンバより下流のパンタナールに多い。水のひきははじめは、バイアとバイアをつなぐ水路であるが、水位が下がるにつれて水路は干上がり、バイアは池として孤立してしまう。

出入口のなくなった池は、乾季の日射で蒸発量が多くなりどんどん小さくなってゆくが、池

の水に含まれている僅かの塩分は逆に濃縮され、遂には塩湖になる。

また、干上がった池の周りの泥も当然かなりの塩分を含んでいる。

この強アルカリの泥や砂をサリーナスと称するが、これが放牧の牛や野生動物の唯一の塩分補給源となる。

現在パンタナール地方には八百万頭の牛がおり、ブラジルでも有数な放牧地となっている。

冠水することで地味が肥沃になり、乾季にイネ科のカツピン・ミモザやカツピン・ゴルゾーラがよく生え牛の飼料になるからだ。

こういうと、いかにもパンタナールが放牧の適地のように思えるが、実はパンタナールの牧畜は粗放といわれるブラジルの牧畜の中でもとりわけ原始的で、極言すれば牛がいて勝手に生きていくだけなのである。

牧舎も牧柵もなく、自然の牧草を喰い自然の塩をなめ、野生状態で生きている。

近代的な管理牧畜とはまったく対照の極にある飼いがだが、飼うという言葉さえ実際にはあてはまらない。

こういう状態だから生産効率をはなはだ悪く、

雨季明けのふつうならもつとも肥っている時期でも、牛達はガリガリにやせていて、とても屠殺業者に売れるシロモノではない。

だから、パンタナールの牛は一年ぐらい他の場所に移して肥育し直さないと使いものにはならない。



広い草原で草をはんではいるものの……

パンタナールは、決して牧畜の適地ではない。ただ、自然のサイクルで死なぬ程度の牧草は生えるし、金のかかる牧柵などつくらなくても河

や水路があるから、そうとんでもないところまで行かない。

効率はおそろしく悪いが、その代わり金も手間もかからぬというのがパンタナール牧畜の特徴なのだ。

危険な動物の伝染病

黄熱病の予防はD-17号の予防注射で一〇年は有効だし、天然痘にいたっては地球上からの絶滅宣言が出されたほどだが、ブラジルの奥地にはまだまだ気をつけねばならぬ病気がある。

レプラ、フィラリア、フェリダ・ブラバ（熱帯性潰瘍）、シャーガス病、マラリア、熱帯フランベジア（森林梅毒）などいわゆる“熱帯病”である。

数が多いのはフィラリア（象皮病）で、アフリカ、アジア、南米に二億人をこす患者がいる。

ブラジルではアマゾン地域に圧倒的に多いが、男子がこれにかかると睾丸がフットボールの球ほどにふくれ上がり、歩くことも出来なくなる。足も象の肢のようになる。

フィラリアは罹患しても直接これで生命をお

とすことは少ないのだが、有効な治療方法がなく、これにかかった男子などは死ぬまでフットボールの球を股間にぶらさげていなくてはならないのだから、なんとも憂うつな病気である。

病気にも地域性があって、パンタナールにはフィラリアはあまりないがシャーガス病は多い。アメリカ・トリパノゾーム病ともいわれるが、トリパノゾーマというごく小さな原虫が、宿主のバルベイロ（亀虫の一種）を通じて人間に感染するのである。

甲状腺機能が低下し低能、白痴化などの脳障害が起り、重症になると生きているだけの植物人間になってしまう。

この病気も適切な治療方法がない。いつそのことコロツといけばよいのだが、植物人間になってもなかなか死ねないからやっかいである。

人間がかかるシャーガス病は、トリパノゾーマ・クルジという原虫が媒体となるが、トリパノゾーマには他にいくつかの種類があり、家畜や野生動物に病気をうつすのものもある。

ブラジル、特にパンタナールで危険なのはトリパノゾーマ・エキメンでこれはもともとカピバラやパツカなど、モコネズミ系統の動物に固

有の病気なのである。

カピバラから他の動物にも病気がうつるが、ことにやられるのが馬で、これにやられた馬は腰がぬけて動けなくなってしまう。一旦この病気に加かった馬は治療法がなく、他の馬への感染予防のため殺すしかないので、持ち主は大損害となる。

ホテルで飼っていた馬もこの病気で死んだ。どうしても立てないのだ。死ぬことはわかっていても、まだ死なないうちからウルブー（黒コンドル）が上空を舞いはじめた。

凶々しいのが馬の側に降りるのを見るのは気持ちの良いものではない。

二十数年前、この病気で多数の馬を死なせたパンタナールのファゼンデイロ達は、トリパノゾーマ・エキメンの第一次保菌者であるカピバラを片っ端から射ち殺した。

毒餌を用意しストリキニーネ入りの餌をばらまいて大量に殺し、一時は絶滅近くにまで追いこんだ。

ずいぶん荒っぽいやり方で今だったらとても認められないが、それでも種を維持し数を回復したカピバラの繁殖力は大したものである。

最近、この旺盛な繁殖力を利用して、食肉用にカピバラを飼育する試みがなされているが、トリパノゾーム病の問題があり、よほど調べて安全性を確認しないと市場には出せない。

“悪魔の化身” バンピーロ

近所の農場に吸血コウモリのバンピーロ（英語読みならバンパイア）があらわれて大騒ぎになった。

もつとも、低地のパンタナールには洞窟がなく、バンパイアは樹のウロに棲むのがふつうだから、何千匹というコロニーをつくるわけではない。「吸血鬼ドラキュラ」のふるさとはルーマニアのトランシルバニア地方だが、ほんとうの吸血コウモリは南米だけで他にはいない。

コウモリはヨーロッパでも悪魔や魔女の化身として嫌われた。しかし、実際に人や家畜が襲われ被害を受けたインジオは、それ以上にコウモリを嫌悪する。一〇〇種からいるブラジルのコウモリのうち、吸血コウモリはたったの二種にすぎないが、インジオはすべてのコウモリを徹底的に嫌う。

コウモリはツピー語でアンジラという。これは鋭い歯、牙を意味する言葉である。つまりインジオは、すべてのコウモリが人畜を襲って傷つけ、毒を注入して殺すと考えたのである。

南米の吸血コウモリの存在が一般に知られるようになったのは、一九世紀後半から二〇世紀はじめにかけて、ヨーロッパの博物学者が中南米を調査してからあとのことである。

翼手目、小翼手亜目、チスイコウモリ科に属するこのバンピーロは、中南米固有の種でメキシコ、グアテマラ、エクアドル、ボリビア、パラグアイ、ブラジルなどに分布している。

体長七〜八センチの比較的小柄なコウモリで、日が暮れると出動を開始し地上一メートルぐらいの低いところを飛び、牛馬をはじめあらゆる温血動物を襲う。

このコウモリの門歯と犬歯は鋭いカミソリのようになっており、眠っている動物の皮膚を傷つけ溢れ出る血を長い舌でなめる。

吸血コウモリというと、動物に噛みつきそのままチエウチュウ血を吸うように思いがちだが、正確には血を吸うのではなく、なめるのである。

家畜の場合、馬はわりあい敏感で皮膚を傷つ

けられるとびっくりしてとび起きるが、牛は氣付かずに寝ている場合が多い。

吸血コウモリが一晩で吸う血の量は三〇〜五〇グラムで、コウモリの体重に匹敵する。

牛や馬は五匹や一〇匹のバンピーロに襲われても出血多量で死ぬようなことはまずないが、ニワトリのような小動物が多くバンピーロに襲われると貧血で死ぬ。

自分の体重と同じくらいの血を吸ったら、重すぎて飛べないだろうと思うのは人間のよけいな心配で、吸血コウモリの泌尿器管は実にうまく出来ており、血を吸うと同時にどんどん排尿して常に体重を一走に保ち、いつでも飛べるようになっている。

吸血コウモリのいやらしさは、動物を襲って血を吸うこともさることながら、傷つけた傷口から病気を伝染させることである。

その病気も恐水病と、前に述べたカピバラがもっているトリパノゾーマ・エキヌンによるトリパノゾーム病（ねむり病）なのだから、まったくもって始末が悪い。悪魔の化身というのはある程度あたっている。

パンタナールにはこのほか小魚を専門に食べ

るウオクイコウモリという変わったものもいるがこの方は人畜無害である。

短足だが素早いタツ

南米を代表する哺乳類には、ゾウ、キリン、トラ、ライオン、カバ、サイのような動物園の人気者になる花形スターがいない。

大昔からいた南米固有の哺乳類は貧歯目のアライクイ、アルマジロ、ナマケモノなどで、世界の檜舞台に出してもとうていスターにはなれず、せいぜい端役で舞台の隅でウロチヨロするだけである。

もつともほかにはいないユニークな存在だから、端役ではあっても一応舞台には出してもらえる。

三科の貧歯目はいずれもパンタナールにはいるが、もつとも少ないのがナマケモノである。カラカラ島を中心とする森にいるが数はいたって少ないこのナマケモノは、アマゾンの森林や海岸山脈に多い動物で、セラードを苦手とするのである。

その代わりパンタナールにはタツ（アルマ

ジロ)が多い。タツーはブラジルには種類が多く二〇種を数えるが、そのうち一二種がパンタナールにいる。



愛敬もののアルマジロ

尾の柔らかいタツー・ラーボモーレという種類がいちばん多いが、完全に球体となるタツー・ポーラ (ミツユビアルマジロ) もいるし、最大のタツーで体長一メートル、体重六〇キロ、カギ爪の長さが一五センチにもなるタツー・カナストラ (オオアルマジロ) も数は少ないが棲

息している。

タツ―は夜行性で、アリ、昆虫、草、果実、卵、蛇や動物の死肉まで食べる。穴掘りの名人で、丈夫なカギ爪で穴を掘りミミズやその他の昆虫を食べるし、危険が迫れば穴を掘ってかくれてしまう。

リクガメのジャブチぐらいの大きさで、甲があつて短い手足をもっているところはよく似ているのだが、ジャブチと違って走るのはおそろしく速く、短い肢を猛烈に動かして地上を這うような感じで走る。

このためタツ―には“ビツシヨ・ド・シヨン”

(地表の動物) という異名がある。

タツ―も小さい時から飼うとよく馴れる。先ごろ近所の住人がタツ―の仔を四匹、北林夫人のところへ持ち込んだ。親の方は食べてしまったのだ。

ところがあんまり小さかったので適当な餌がとれず、次々に死んでしまい、結局一匹だけが残った。これは無事に成長し、もう身体は一人前になっている。水浴びが大好きで、台所に来て夫人の足にじゃれつき水浴びをせがむ。抱かれるのも大好きだ。

タツ―はどの種類も食用になる。特にタツ―・ガリンニヤ（九本オビアルマジロ）は文字通りニワトリの味がするのでよく食べられる。

数の多い動物だからふつうの種類なら絶滅のおそれはないが、最大のタツ―・カナストラはパシフィックでも激減してしまった。容姿が堂々としているところから剥製用に狩られたからである。

タツ―は種類にもよるが四子から一二子ぐらいを出産する。ところが産まれた仔はすべて同じ性をしており、顔や姿かたちからヨロイの甲板の数、まばらに生えた毛の本数まで何から何までお互いがそっくりである。

タツ―の子は一卵性四つ子、八つ子で一個の卵子が分裂してまったく同じ仔が出来るのだ。

産まれる仔のすべてがかならず一卵性で例外がないというのは、他の動物にはみられない受精方式である。

卑怯なタテガミ狼

バランキンニヨのホテルに行くと、私は毎日、付近の灌木林や河べりの回廊林、草原などを歩

き回る。何十回行っても動物や植物を気をつけて観察すると、そのたびに何か新しい発見がかならずあるものなのだ。

こうして歩いている時に、いきなりタテガミオオカミに出合ったことがある。灌木林のヤブから飛び出したタテガミオオカミが、私の一〇メートルぐらい前を横切り、すばらしいスピードで草原を駆け抜けて行ったのである。赤みがかったオレンジ色の体色が妙に印象的だった。

びっくりもしたが幸運だった。この、近い将来間違いなく絶滅するといわれる夜行性の獣に、日中お目にかかれるチャンスなどそうあるものではない。

イヌ科タテガミオオカミ属で、タテガミオオカミともブラジルオオカミともいわれる。ブラジル語ではローボ・グワラーだ。しかし、分類的にはオオカミ、ジャツカル、コヨーテのようなイヌ属とは緑が遠く、どちらかといえばキツネ属に近い。

南米のイヌ科の動物としては一番大きく、体長一・一メートル、尾長四五センチ、体重二三キロでやや大型の犬ぐらいである。

ヤセ形で大きな三角形の耳をもちキツネに似

た顔をしており、毛は赤がかつた明るい茶褐色で四肢は黒っぽい。首から背中にかけて異つぽいたてがみがあり、怒ったり興奮したりするとこの毛を逆立てる。

このタテガミオオカミの外見的特徴でいちばん目立つのは肢がべらぼうに長いことで、体高が七五〜八五センチに達する。

ふつうのコリーやセバードで体高は五五〜六五センチというところであるから、セバードよりひと回り小さいタテガミオオカミが二〇センチも長い肢をもっているのは、異様な感じである。

長い肢をもつだけにスピードも速く一説によるとチーターの速さに匹敵するそうだがたしかに速い。

分布はブラジルのセラードからアルゼンチンの北部草原にかけてである。獲物は水鳥が主で、夜寝ているところにしのびよって襲うが、他にパツカやコチアなどの齧歯目も餌にする。

腺病なくせに残忍で、家畜小屋にしのび込み生まれたての仔羊、仔牛やニワトリを襲って殺す。

食用のために殺すのではなく、仔牛など自分

でくわえて出る力はないくせに相手が弱いと殺してしまふ。殺しのための殺しなのである。

だから人間にははなはだ評判の悪い野獣で、おまけに逃げ足が早いときているから始末が悪い。現地ではローボ・グワラーという言葉はコバルデ（卑怯）の代名詞でもある。

タテガミオオカミの餌は水鳥や小動物だが、雑食性でもあつて昆虫や果物も食べる。とくに強い嗜好を示すのはセラードに多いナス科植物の果実で、これをフルツタ・デ・ローボ（オオカミの果物）と称する。

リンゴぐらいになる大きな漿果（しょうか）でゴヤバ（グワバ）の味がするし、完熟すれば人間でも食べられる。

水分の多い漿果を好むのはキツネ属の特性で、これを見ても、タテガミオオカミがイヌ属よりキツネ属に近いことが証明されるのである。

怒りっぽいペツカリー

ホテルのうしろの灌木林に二〇頭ほどのクビワペツカリーがあらわれた。ちょうど日本からの客がこれを見て、大よろこびし、「イノシシが

出たぞ！」とたいへんな騒ぎ。

たしかにイノシシに似ているし近い仲間には違いないのだが、新大陸にいるケイシャーダやカイトウはペツカリーのことであり、旧大陸でおなじみのイノシシとはちよつと違う。

どこが違うかといえばまず科が違う。イノシシはイノシシ科でありペツカリーはペツカリー科である。科が違うということは解剖学的に身体構造が違うということである。

詳しい説明は省くが、イノシシと豚は交配出来てイノブタがくれるのに対しペツカリーと豚では交配できない。豚はイノシシ科で、もともとイノシシを家畜化したものだからだ。

また大きさも違う。ペツカリーの中ではケイシャーダの方がカイトウより大きく、体長九〇〜一一〇センチ、体高四五〜五五センチ、体重二五〜三〇キロになるが、イノシシはネパール、アッサム地方のコビトイノシシ以外ははるかに大きく、体重六〇〜二八〇キロもあり、最大は三五〇キロに達する。

日本のイノシシはそう大きくないが、それでも体重七五〜一九〇キロになる。ついでにいうと、日本のイノシシは絶滅の恐れのない唯一の

野生獣である。

ペツカリーも数は多い。アマゾン、パンタナールおよびチャコ地方に多いが、野性の哺乳類ではカピバラより多いのではないかといわれている。

ケイシャード (クチジロペツカリー) とカイテトウ (クビワペツカリー) に分れるが、通常ブラジル人はポルコ・ド・マツト (山豚) などというあいまいな言葉で呼び區別はしない。

ケイシャードは湿った熱帯雨林を好み一〇〇頭ぐらいで群棲するが、カイテトウは乾いたサバンナや濯木林を好み、群棲する数も一〇〇二〇頭と少ない。

イノシシの牙は上アゴから生えても下に向かわず反転して上に伸びるが、ペツカリーの牙は反転せず、下に向かう。

おそろしく怒りっぽい動物ですぐに興奮し、牙をカチカチ鳴らして攻撃してくる。

ペツカリーの牙はイノシシほど長くはないが非常に鋭く、カミソリのように切れるので危険である。

ペツカリーは以前はヘソイノシシと呼ばれた。背骨に沿った腰部に直径七センチほどの強い勾

いを出す油性分泌物の腺があり、ヘソのような形をしているからである。

イノシシもそうだが、ペツカリーも目がよくみえない。その代わり耳はよいが一番鋭敏なのは喚覚である。

ペツカリーののように群れで生活する動物は、群れを離れて単独では生きていけない。そこでお互いが離ればなれにならないように匂いで連絡し合っているのである。

ペツカリーは一頭だけならそれほど怖い野獣ではないが、一〇〇頭以上がドロドロと地響きをたてて突進してくるとオンサでも逃げ出す。

この場合、先頭に立つのがリーダーだが、リーダーが殺されると群れは混乱してしまう。

ペツカリーの肉はうまいが、食用としてよりも皮革用に殺される方がはるかに多く、一九六〇年代にはアマゾン、パンタナールで、年間六〇万頭が殺された。

支配人もつらいよ

“森林の精”カイポーラ

かつてアマゾンに住んでいたころ、奥地で鉄砲をもった猟師に行き合ったことがある。

「どうかい、なにが獲れたかね」と聞いたら「カイポーラ……さ」と答えた。

手にはまったく獲物をもっていなかったから、「ははあ……カイポーラというのはなんにも獲れないことなんだな」と解釈した。

あとで調べたらこの解釈は間違っているわけではなかったが、じつはもつと奥の深い言葉で、大げさに言えばブラジルのインジオの自然観というか哲学を言いあらわした言葉だった。

カイポーラのほかにカアポーラ、クルピーラともいうが、動物を保護する “森林の精” のことである。姿は人間の小人で、裸かフンドシひとつでカシンポ（コーンパイプ）をくわえている。

どうやら男性のようなのだが、ふしぎなこと

にフンドシをしていない時でもオチンチンがない。森の精には男性も女性もないということかも知れない。

ブラジルのインジオ神話に共通して登場する森の精だが、インジオの部落や地方によって多少かつこうや姿がちがっており、クルピーラは足がうしろ向きについている。

しかし、細かく解説するとややこしくなるし、いずれにしても同じ性格だからここではカイポーラ一本で話を進めることにする。

カイポーラはすべての動物を支配しており、人間（インジオ）に対してどの動物をいくらぐらい獲ってよいかの許可を与える。

許可の範囲内で動物を獲るぶんにはまったく問題はないのだが、許可の範囲を越えて人間が乱獲するとカイポーラは怒りだす。契約違反というわけである。

怒ったカイポーラはケイシャーダにとび乗って森の中を走り回り、棒をふりまわしてすべての動物を逃がしてしまう。

またカイポーラは超能力をもっており、雨や風や雷を自由に呼ぶことが出来るから、暴風や雷に猟師を襲わせ動けなくしてしまう。

カイポーラがもつとも嫌うのは獵師が妊娠しているメスや小さな仔を殺すことで、こんなことがあるとカイポーラは怒りをあらわにし、道に迷わせて獵師を帰れなくしたり、森をまっくらやみにしてしまふ。

幻術もつかい、獲物だと思つて獵師が矢を射ると、矢が当つて死んだのは自分の最愛の息子であつたり妻であつたりすることもある。

とにかくカイポーラとの約束を破つたら、人間は徹底的に痛めつけられるし、またそれが当然なのである。

このカイポーラ伝説は地方によって多少違うものの、広くブラジル全体に行き亘つており、動物の乱獲をいましめる教えになっている。

それにしても食料に必要な分しか獲らない、妊娠したメスや小さな仔は殺さないという、インジオのモラルは立派で、ほのぼのとした人間的な温かさが感じられる。

そこへいくと、アマゾンやパンタナールで無差別に大量のワニやペツカリーを殺す文明人は救いがたい野蛮人であり、インジオにはるかに及ばない人非人である。

この人の道にはずれた文明人の前にこそカイ
ポーラがあらわれ、乱獲の責任を追及して天誅
を下してくれるとありがたいのだが……。

樹から降るアリ

パンタナールは釣りの名所だから、ここに来
る人間はたいいてい釣りをする。別段、釣りが好き
でなくとも、ここまできたのだから話のタネに
釣りをしてみようという人もたくさんいる。

しかし、水際に近付くのはよほど注意した方
がよい。特に水辺に草が茂っているようなところ
には不用意に踏み込まぬことである。

水辺の草むらにはアリやブヨ、サソリ、クモ、
ムカデなどの毒虫や毒蛇がいるからである。

このことの事情を心得た釣り人はちゃんとゴ
ム長をはく、これなら蚊やブヨにはダメだが地
上性の毒虫や毒蛇にまず安全だし、万一水中か
ら襲ってくるかも知れないピラニアの攻撃にも
安全である。

パンタナールの水辺でまず要注意なのはフォ
ルミーガ・デ・フォーゴ（火の蟻）といわれる
小さな赤いアリで、うっかり景色にみとれてい

ると何十、何百のアリが足に登って噛みつく。

火のアリとはよく言ったもので、こいつに噛まれると火をつけられたような感じで思わず悲鳴をあげて飛び上がる。ほかにラバ・ペー（足洗い）とも、フォルミーガ・デ・マラゲッタとも言う。

ラバ・ペーというのは海辺で波が足首を洗うような速さで襲うからで、マラゲッタは小粒で赤く猛烈に辛いトウガラシのことだが、いずれもこのアリの特性をよく言いあらわしている。

季節によつて毒性のある時とない時があるが、毒性があつてもいたつて弱毒だから心配することはない。一五分か二〇分で痛みはなくなる。

裸足やゴム草履、サンダルなどの時に被害がひどいのでから、やはり足ごしらえはちゃんとした方が安全である。

火のアリは襲つてきても足首から上にはあまりこないが、タシーというアリは樹の上から降ってくるからまことに始末がわるい。

このアリは同じ名のタシーというタデ科の樹に寄生しており、温血動物が下にくると体温を敏感に察知して、バラバラと雨のように樹の葉から落ちて襲ってくる。

火のアリと違って上から降ってくるのだから頭といわず首といわず背中にもまで入りこんで噛むのである。まったくたまつたものではない。

このアリも毒はないか、あつても大したことはないから大事にはいたらないが、なんともいやらしいアリである。

実はタデ科のタシーという樹はアリ植物で、アリと共生しているのだ。水辺を好む樹で河べりによく生えているから、釣りをする人間がよくやられる。

パンタナールには割合多い樹だから気をつけることである。

アマゾンにも多く、アマゾンではアリも樹もタシーというのが一般的。パンタナールではこのア리를ノバットと呼び、樹をパウ・デ・ノバットと言うのがふつうだから、タシーの言葉を使わずノバットと言った方が現地では分かりやすいかも知れない。

インジオやカボクロはオンサや鹿を仕留めるとはいだ皮を板に張り、タシーの樹の近くに立てかけておくのを常とした。皮に付着している肉片をこのアリがきれいにとってくれるのである。

る。

ナマケモノが好んで登るインバウーバの樹も
アリ植物で、樹芯の空洞にかならずアリがすん
でいるが肉食ではなく動物を襲うことはない。



ジャウール河（パンタナール）で釣りをたのしむ人々

気化熱で体を冷やす

この間、パンタナールで三九度という暑さを体験した。ホテルにある温度計は百葉箱にこそ入っていないものの、風通しのよいサロンの柱にかかっている。

この温度計が三九度になったのだから、客室の小さな部屋は天井や壁から伝わる輻射熱で間違いなく四〇度にはなっているし、戸外の直射日光の下では四二、三度になっている。

昼食後のひと休みと思ってパンツ一枚でベッドに横になったが、シーツも枕も焼けるように熱いのだからとても昼寝どころの騒ぎではない。

それでも扇風機を回して我慢していたら、三〇分ぐらいでむき出しの肌のあちこちがヒリヒリしてきた。なんと熱風を吹きつけられて肌が炎症を起こしかけているのである。

つまり髪を乾かすドライヤーを長時間肌に吹きつけているのと同じことで、火傷になるのだ。これにはびっくりしたが砂漠の遊牧民ベドウィンの生活の知恵を利用してやろうと思いついた。

ベドウィンは熱い砂漠で冷たい水を飲みたい時には素焼きの壺に水を入れ、これに濡れた布

をかぶせるのだ。そうすると布の水分が蒸発する時に、壺の中の水も気化熱を奪われてぐんと冷たくなるのである。

こういう理屈はわかっていても、冷蔵庫の普及している今日、文明人がこんな厄介な水の冷やし方をすることはまずない。いくらバランキンニヨのホテルでも冷蔵庫はあるから、冷たい水ぐらいは飲める。

だから私はこの理屈を応用して、水ではなくて自分自身の身体を冷やしてみようと思ったのだ。

長袖のシャツを着て長ズボンをはき、水をかぶって濡らし、戸外に出て風通しのよい樹陰に腰をおろした。この実験は成功だった。肌がよく冷えてたいへん気持がよいのである。

これで帽子をかぶり靴下でもはいたらもっと完全かも知れないが、それまでする必要はあるまい。シャツだけ濡らしたのを着ても身体はかなり冷える。

この方法はたしかに効果的である。ただし、いくら水浸しにしても一時間もすれば乾いてしまう。まあ、これは乾けばもう一度水をかぶれば良いのだからどうってことはない。

ただ、これをやるのは気温の方が体温より高い場合に限られる。気温の方が低いとベタベタして気持が悪いだけだ。

パンタナールは暑いから、訪問客はよくシヨーツや水着で魚釣りに行くことがある。どんな格好をしようとその人の勝手だが、ふだん裸になりつけない人や肌の弱い人は、何か着ていた方が無難である。

肌の弱い人が強い直射日光に晒されると、たった一日でも火ぶくれになることがある。日本の夏と同じように思えても、緯度の低いブラジルでは光線の強さが違う。

北林夫人が魚釣りに行くときは長袖のシャツ、長ズボンゴム長を着用、ツバの広いムギワラ帽子をかぶり、首にタオルを巻いて軍手まで用意する。軍手の方は釣糸で手を切られないためでもある。

「暑い時に外に出るのには、肌を露出しない方がかえっていいんです。それにこの方が蚊やブヨの襲撃から身を守れますからね。夕方、ひどい蚊の大群が出ることがあるんです」

満月に“もの狂い”

かなり以前から気がついているのだが、動物の行動は月の運行、つまり月の満ち欠けに大きな影響を受けている。

わかりやすく言えば、満月になるとたいいていの動物が落ちつかなくなるのである。



満月時には鳥もおかしくなる

バランキンニョのホテルにいる叫び鳥、アニューマのメスは、満月と新月には三日間ぐら

い雲隠れしてしまふ。どこへ行くのかわからない。この期間を過ぎると帰ってくる。

オウムはもともと騒々しいトリだが、満月には二羽のオウムがすさまじい声で鳴き、手のつけられないケンカをする。

水鳥も森の猿もソワソワと落ちつかなくなり、騒ぎたてる。この時期にはおかしなことに魚も釣れなくなる。

よく釣りの本などには満月の時は喰いがよい、などと書いたのがあるが、潮汐（ちようせき）の大きく影響する海でのことならいざ知らず、パシフィックのようには海から遠く離れた内陸の河では、満月時にはまず釣れない。

もつとも、この時期でも鉤にかかるバカな魚もたまにはいる。ところがこういう魚の腹を開けてみると、胃には何も入っておらず、ペタンと潰れているのがふつう。

満月時の魚は動くことは通常より動くものの、ほとんど餌は食べない。食い気より色気なのかも知れぬ。とにかくすべての生物が”もの狂い”する感じだ。

北林夫人の観察によると、ホテルの女子従業員がヒスを起こし同僚と大ゲンカをおっぱじめ

るのも、奇妙に満月と合致するのだそうだ。

動物ばかりでなく、植物も満月時には体内組織の動きが活発になる。材木にする立木を伐る際、満月に伐採すると材にひどい割れが入って使いものにならなくなることがある。

これは私のアマゾン時代の経験だが、樹種による程度の差がある。セندان科のセドロ、アンジロバ、マホガニーなどは割れが大きく、造材した丸太の元口から末口まで裂けて二つに割れてしまうことさえある。

満月時で導管、仮導管がフル・パワーで活動し、地下の養分を吸い上げてパンパンに張切っているところへ斧を入れると、そのインパクトで木が裂けてしまうのである。

「生物の生活のリズムは月の運行に大きく影響される」などといったら、都会に住んで電気などの物質文明を享受し、科学的、論理的思考を得意とする文明人には噴（わら）われるかも知れぬ。

現代のように電気が行きわたった時代になると、特に都会などでは闇夜だろうと月夜だろうと、生活をする上に何ら関係ない。おそらくほとんどの人は、月の存在すら忘れて生活しているにちがいない。

だが、かつて人工の照明などなかった時代、月の光は人間の生活と密接に結びついていたことは疑いもない事実である。

このことは今でも文明に毒されていないアマゾンやパンタナールの奥地で、人間を含めた動物の生態を仔細に観察するとよくわかる。バオリズム（生物の生活リズム）はやはり、月の影響を受けているのだ。

もちろん、太陽の影響は大きいですが、太陽は生物に直接エネルギーを供給するのに対し、月の方は生物のホルモンに働きかけ、性と生殖に関与しているようである。したがって女性の方が影響を受けやすい。

「イルカの子」も満月が原因

月の光が性や生殖に深い関係があったり、人間を含めた動物の精神を狂わせるという言い伝えや考え方は、洋の東西を問わず、世界の各地にある。

「だいたい、月を意味する“ルーナ”は「狂人」「てんかん」のことで、英語のルナチック、ポルトガル語のルナチコ（月の光に打たれた人、精神

異常者)も、ローマ時代から引継がれている古い言葉なのである。「かぐや姫」が登場する『竹取物語』もみかたによれば、月の神秘と生殖に関係した話ともいえる。

平井和正の作品に出てくるウルフガイ(狼男)こと犬神明は、満月になるとパワー・アップし、途方もない不死身の超能力を発揮してバツタバツタと悪人をやつつける。

むろん小説だから、作者の思い通りに主人公を活躍させているわけだが、月に関する昔からの考え方をちゃんと踏まえているところがおもしろい。

ブラジルにも月と性に関する伝説はある。有名なのはアマゾンのインジオの間に伝わる " 水のドンファン"、イルカのセックス・ハントのおはなし。

ご存知ない方もあると思うのでかんたんに紹介しておく。

神秘的な青白い光が輝く満月の夜、インジオの処女が河辺で水浴びしていると、どこからともなく歌声が聞こえてくる。

歌声は天の声かと思えるほど魅惑に満ちたもので、娘は我を忘れて魅了されてしまう。やがて

美声にふさわしいすばらしい美青年が現れ、娘に求愛する。

実は美青年はイルカが化けたものなのだが、天与の美声と容貌、優雑なふるまいに魂を奪われた娘は、どうしても若者の誘惑に抗することができずに抱かれてしまう。

その結果、娘のお腹は膨らむこととなり、やがて月みちて赤ん坊が産まれる。

「父（てて）なし児」だが、イルカに魂をとばされ”もの狂い”になった挙句の結果なのだから、娘に責任があるわけではない。かくて「イルカの子」はアマゾン中にふえて行くことになる。

この話は、いろいろな人がさまざまに脚色して、時代や状況設定をかえて語り継がれているが、もともとの筋はきわめて単純なのである。

それにしても「イルカの子」は現在でも多く、ブラジル奥地で産まれる赤ん坊の半分は「イルカの子」である。

アマゾンではこういうイタズラをするイルカはウイアラという白イルカで、これは女性を狂わす月の精。黒イルカのツクシは逆に女性をかばう方で、ウイアラを追い払う役になっている。

ラプラタ水系にはイルカがいないから、パン

タナールにはイルカと交わるインジオ伝説はない。その代わり大カワウソのアリランニヤや大猿と女性が交わる話があり、やはりこれも満月の夜となっている。

満月が特別の意味を持つのは、あの神秘的な真円の形もさることながら、満月の光がもつとも強く、もつとも明るく、精神を狂わせるにはこの時以外はないということが、誰の目にもはっきりわかるからである。

満月の明るさは少々どころではなく、半月の一〇倍も明るい。十四夜や十六夜の月でも、明るさは満月の八〇パーセント、十三夜、十七夜では六〇パーセントの明るさでしかない。たしかに満月は“もの狂い”させる条件を備えている。

「産婆」もつとめる支配人

バランキンニヨのホテルには支配人の北林夫妻のほか、シーズン中なら二〇人、オフシーズンでも一〇人ほどの従業員がいる。オフでも客はけっこうあるし、牛や羊の世話もしなくてはならないから余り人は減らせない。

北林夫妻はできるだけ若い男を使うことにしており、台所も若い衆にやらせている。夫人の懇切な指導のおかげで、刺し身でもソウメンでも味噌汁でもけっこううまいことつくるし、覚えもはやい。

従業員はすべて男にしたいのだが、客室の掃除やベッド・メーカーキング、洗濯はだめで男はやはりしたがらないしさせてもさっぱりきれいにならない。

そこでこの仕事に限って女を使うのだがこれが頭が痛い。何人入れてもすぐに妊娠して大きな腹になってしまうのだ。これまでに一〇人、一人の例外もなく全員妊娠した。いわゆる「イルカの子」である。

「はじめはびっくりしましてね、いろいろ注意したんですけどどうしようもないんです。何人かえても全員同じ結果になるんでこのごろは諦めて、目立つほど大きなお腹になったらやめてもらうんです」北林夫人もすっかりサジを投げているが、この間珍事が起こった。

一七歳と一五歳の姉妹が掃除係で働いており、どちらも男関係のあるのはわかっていた。例によって二人とも妊娠、妹の方の腹が目立つよう

になったので、そろそろやめさせねばと北林夫妻は話し合っていた。

それにしても一五歳の娘である。心配した北林夫人が「いったいお腹の赤ちゃんの父親は誰なの」と聞いたたら、娘は困惑した表情で、「それがわからないの……三人のうちの誰かなのは確かかなんだけど……」と答えたのだそうだ。



ホテルには若い従業員が大勢いる

ところが、まだ大丈夫だろうと思っていたの
にある夜中、突然産気づいて痛い、痛いと思

じって泣きはじめた。こうなっては仕方ない。あわてた北林旦那は妊婦をトヨタのランクルにのせ、介添えにこれまた腹の大きい姉を連れてカッセレスの病院に向けて出発した。

だが間に合わなかった。半分も行かないうちに破水が起き、赤ん坊の頭が飛び出し、遂に車の中で産まれてしまったのである。

「これにはアワ喰いましてね、とにかく牛飼いの番人が住んでいる掘立小屋まで車を走らせ、そこに担ぎ込んだんです。ところがカボクロ（土民）の小屋ですからね、灯りはブリキ製のカンテラしかないんだから、全然見えやしないです。仕方ないから入口の戸を開けておいて、車のライトを家の中に向けてなんとかやっつけましたけどね……こっちは血だらけ、いや、まったくひどい目に遭いましたよ」

どうもこのホテルの支配人は「産婆」のテクニクをマスターする必要がありそうだ。母親となった女の子はお産の知識もなければ準備もしていない。産衣やおむつの用意さえないのである。

こういう暑いところだから、生まれた赤ん坊が寒がったり風邪をひいたりする心配はないが、

いくらなんでもこのままでは放っておけない。心優しき北林旦那はカッセレスに行つて、赤ん坊に必要なもの一式を買つてきた、さて赤ん坊の父親探しだが、犯人はすぐにわかつた。生まれた男の赤ん坊は、台所に働く十七歳の見習いコックにそっくりな顔をしていた。

たまには“異常”な客もいる

このホテルには世界中からいろいろな人が来る。山小屋のような宿泊設備にせよ、一応客商売なのだから客の批評は避けるべきなのだが、あえて言うならばボード・ウォッチングの人達はどの国でもマナーが良い。

ヨーロッパからも来るが、やはりアメリカが多い。五人から一五人ぐらいの男女で、リタイアの年配者のグループである。リーダーはたいてい、大学で生態学や動物学を教えている教授。

望遠鏡、双眼鏡、望遠レンズ付きカメラ、録音器など、ものものしい器具を持ち込む。彼らの朝は早く夜がやっと明けたところに、セラード濯木林や河沿いの回廊林（ギャラリー・フォレスト）

に徒歩で出発する。

一度この連中と一緒に行ったことがあるが、熱心にしかも手慣れた動作で双眼鏡をのぞき、録音器から囀（おとり）の声を流してトリを集め、写真をとったりノートをやるさまに感心した。

こうして三時間ぐらい、効率よくバード・ウォッチングしたグループは九時ごろにはもうホテルに帰ってくる。朝のコーヒーはそれからである。日中の暑い時間は出かけずにホテルで休み、日が傾く四時すぎに今度はボートで出かける。

目的地にいたら舟のエンジンを切り、静かに静かにボートを流しながら鳥の生態を観察するのだ。

夕食後はミーティング。リーダーを中心に今日の成果を話し合う。こういうグループは気持がよく、こちらもほのぼのとした気分になる。

日本人もおおむね問題はない。だが、ごく稀れに精神状態がおかしいと思えぬ日本人が来て、異常な行動をとることがある。

ホテルの中庭にはシリグエイラ（うるし科）、ジャンプー（ふともも科）、グワバ（ふともも科）

など、枝葉のよく茂る果樹が植えてある。

いつのころからか、この果樹の茂みにムクドリモドキ科のジャブイーラという小鳥の大群がきて毎晩泊るようになった。その数、約一万羽である。そのほかニワトリもこの果樹に留まって寝る。



ホテルの渡り廊下と中庭

夕日が没し、辺りが暗くなりかけると、残照を浴びながらジャブイーラの群れが四方八方から

ホテルの中庭を目指して数十羽、数百羽ずつ集まり、ひとしきりけたたましい鳴き声を上げる。まさに壮観である。

しかし、ほどなく完全に夜になると小鳥の大群は寝てしまい、ひっそりと声もなくなる。ホテルの渡り廊下は一晩中電灯がついているから、まっくらにはならないのだが、それでも小鳥は安心して寝ている。

この寝ているジャブイーラを、わざわざ長い棒で茂みを叩き、大声上げて脅かして歩く日本人の泊り客がいたのには呆れた。もつともその客は驚いてギヤアギヤア飛び回るジャブイーラから糞の爆弾を見舞われる結果になっただけなのだが……。

更にかわったところでは、放し飼いの仔豚の尻尾になんとか火をつけようと、ライターをもって必死に追いかける日本青年がいた。

尻尾に火をつけられるまで待っているようなトンマなトンは一頭もないから、その点は安心なのだが、「いったいどうなっているんでしようね」と北林夫人が嘆くように、どういう精神構造をしているのかはかりかねる。

もちろん、こんなのは例外中の例外である。

インジオと植物

万病に効くジャトバ樹液

パンタナールの雨季が明けて、乾季になると、ジャトバ樹液の時期が到来する。

北林夫人愛用の常備薬である。最初のころはホテルで採取していたが、このごろは付近の住民が採取してビンに入れたのを売りにくる。

ジャトバまたはジュタイという木は、カリブ海から南米の熱帯地域に自生するマメ科の高木で、厳密に分けると一〇種類ぐらいある。

ブラジル全国に分布しているが、やはりアマゾンの熱帯降雨林に自生するのがいちばん大きくて素直だ。パンタナールのように基本植生がセラードのような地域では少々ヒネて、小さくなったり幹が少し曲がったりしている。

材は赤系統の色調でたいへんな銘木。ただし、こういう堅くて重くしかも巨大な樹を伐採して用材にしようと思っても、機械力がなくては無

理である。したがって、ブラジルやカボクロではこの樹を挽材にして用いることはなかった。

インジオはジャトバの樹の皮を剥いでカヌーもよくつくったが、むしろこの樹は食用、薬用樹にて珍重されることが多かった。

ジャトバは開花後、八〜一〇センチのサヤ果をつける。濃褐色の硬いサヤ果で、中に黄色い粉質の果肉がびっしり詰まっており、その中に少しの種子がはいっている。

この粉質の果肉は甘味があって食べられる。おいしいという人もいる。

だが、子供の時から食べ慣れている人ならともかく、はじめてこれを口にする人はまず一〇〇パーセント、ひと口だけで放り出すこと請け合い。

粉質の果肉は大豆のキナ粉の感じで味が特別悪いというわけではない。じつはこの果肉「ウンコ臭」があるのだ。この匂いにヘキエキしてはじめての人はコーサンするのである。

しかし、ジャツカ（バラミツ）だって似たような匂いだし、マンゴウの香りさえ嫌いな人間には悪臭なのである。熱帯果実にはこうした強烈な匂いを持ったものはかなり多い。

大木のジャトバはそれこそ無数にサヤ果をつける。とても人間だけでは食べ切れるものではないから、奥地では放し飼いの豚がこの果肉を食べている。

またジャトバは幹や枝にジュタイシカと称する樹脂を出す。これがブラジル・コパールという、ワニスの原料。ガラス破片状の黄色い結晶をしている。

むかしはこの樹脂の粉末を肺結核の喀血の特効薬に用いたが、ジャトバでなんといっても著名なのは樹液である。

樹液を採取するには、胸の高さのところの樹幹に斧で切り込みを入れる。傷つけるなどという生やさしいものではなく、四〇センチも切りこんで、人工的に樹幹にウロ（空洞）をつくるのである。

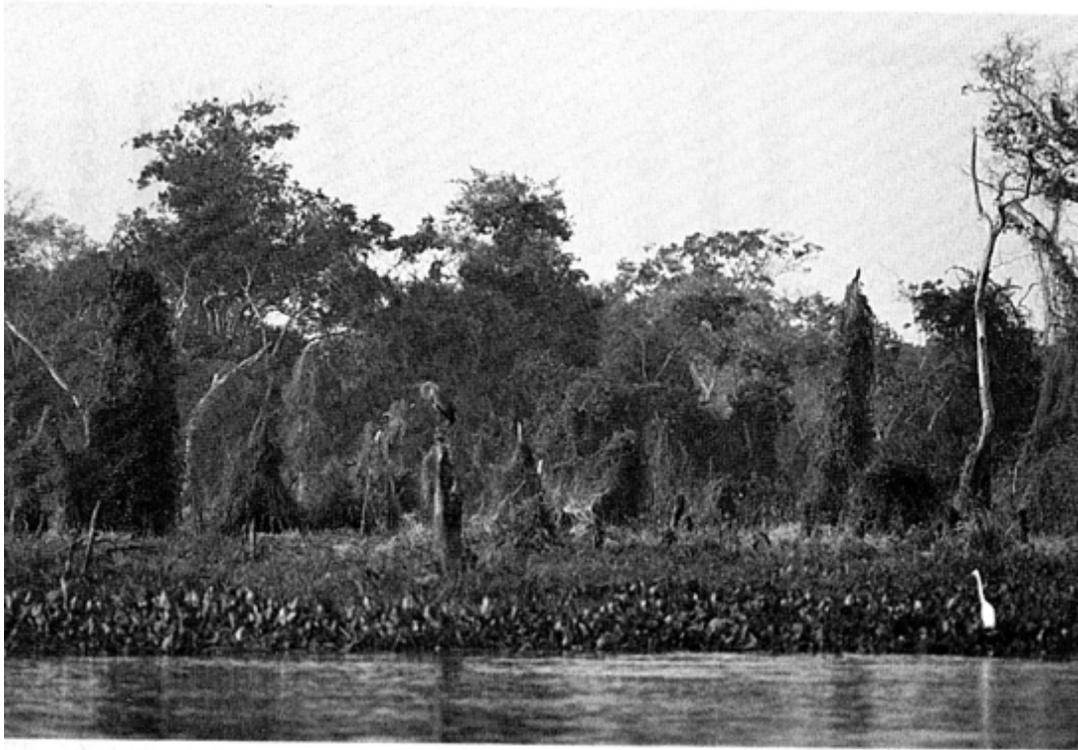
直径一〜二メートルもあるジャトバだからこんなことが出来るので、細い木なら死んでしまう。

ジャトバは切られた傷を癒すために、全力をあげて樹液を分泌し傷をふさごうとする。それで空洞にしよう油状の樹液が溜まるのである。

これは古来インジオが用いてきた万病の薬。

収斂作用の強いところから傷薬としてもよく、
気管支疾患には著効があり、消化器、泌尿器の疾
患にもよい。

市販されているものは薄めたものだが、ここ
のは正真の樹液である。



パンタナールの雨季

食用だった大オニバスの実

子供が乗っても沈まないというアマゾンの大オニバスは、世界的に名の知れた存在である。だが、これはなにもアマゾンだけにあるものではなくて、ギアナにもマツト・グロツソにも自生している。ホテルの近くの “流れ” のないところにも生えている。

ほんとうは、アマゾンとパンタナールでは同じ大オニバスでも種が違う。完全に異種なのか亜種なのか分からぬが、パンタナールのはお盆の緑がアマゾン種より高くかつこうが良い。しかし、一般にブラジルでは、どちらの大オニバスもビトリア・レジアと呼んで区別しない。

じつはこれは学名で、一八三六年にイギリスの植物学者リンドレイが、イギリス領ギアナから送られた標本につけた名前なのである。

時あたかもビクトリア女王の時代だったので、この高貴な花をつける巨大なハスをビクトリア・レジア（ビクトリア女王）と命名したもの。芸のない命名ではある。

しかし、ヨーロッパではこのハスはなかなか花が咲かなかった。気候的に寒すぎるのだ。

そこで腕自慢の園芸家たちの間で開花競争がはじまる。この競争は結局イギリス人のジョゼフ・バクストムが一八四九年十一月に開花させ、勝利をかちとった。

大オニバスの花は径が二五センチから三五センチもあり、一〇〇以上の花卉からなっている。夕方から開花し夜明けと共にしぼむ。最初に咲く花の色は白である。

二日目の夕方にも再び開花するが、花は桃色となりついで暗紅色に変色し夜が明けると枯死する。だいたい四八時間のはかない生命だ。

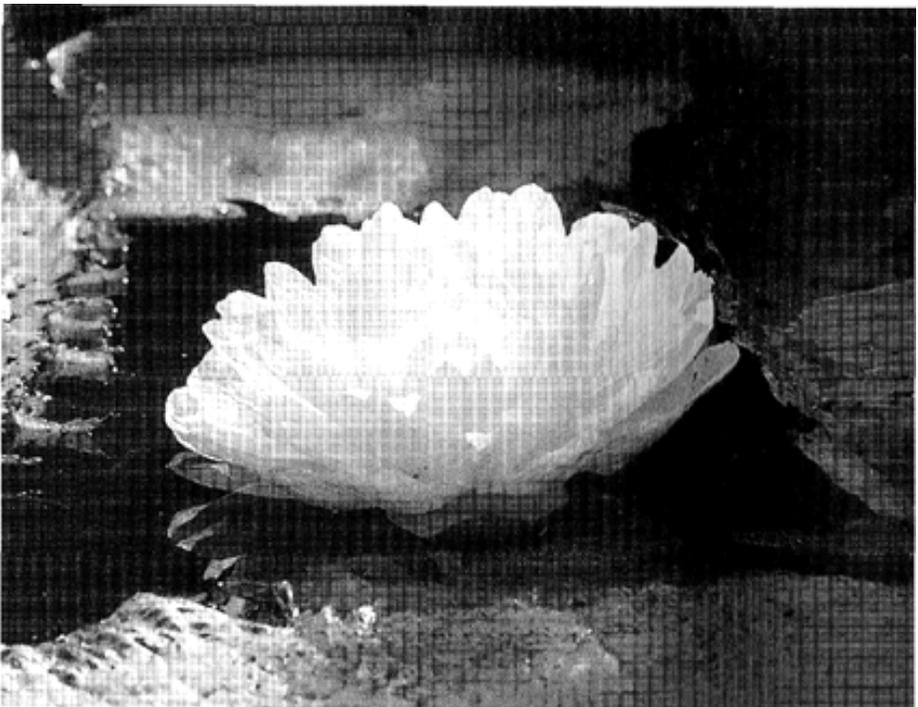
花の落ちたあとに実が残り、この実の種子がこぼれ落ちて水底の泥中にもぐり込む。

この種子がすべて河底の泥中で発芽するならば、あたり一面オニバスだらけになってしまおうはずだが、現実にはそうはならない。

直径五ミリほどの硬い殻をかぶったハスの種子はバクーやタンパキの大好物で、この時期になると大オニバスの下に待機し、種子が落ちるとすかさず食べてしまうのだ。まったく自然の摂理というのほうまくできている。

バクーだけに喰わすのもしゃくなので、当方

も食べてやろうと、狙いをつけておいたオニバスを毎日観察し首尾よく一果の種子を入手した。日干しして完全に乾かし、殻つきのまま、フライパンで煎って食べてみた。香ばしくてなかなかうまい。どんな味かと聞かれてもちよつと答えようがないが澱粉質でほのかな甘みがある。



昔はインジオもよく食べていた。アバチ、ウルペ（水のトウモロコシ）と言って珍重したのである。ただこれはそうたくさんはとれるものでは

ないから、トウモロコシのように主食として常用するわけにはいかなかった。

またインジオは河底の泥中に横たわる大オニバスの根茎も食用にしていた。ヤマイモと同じように蒸し焼きにして食べたようである。

大オニバスは日本でレンコンをとるハスの仲間だから、そうまずくはないと思つて食べるチャンスを狙っているのだが、これが簡単にいかない。

この大オニバスの葉の裏には針のような棘がびっしり生えているし、直径一〇センチにもなる中空の茎にも棘があつて、うかつに触れるわけにはいかないのである。

このハスは一名フォルノ・ダ・アグアともいう。フォルノはかまどのことだが、マンジョカを煎る浅い緑の土鍋または鉄鍋に見たてたもの。ビクトリア・レジアよりこの方が表現としてはわかりよい。

珍種 “水中ラン”

ブラジルが野生ランの宝庫であることはよく知られている。

ラン科はキク科について種類の多い植物で、全世界に七百属二万種、そのうちの六〇パーセント、一万二千種がブラジル原産なのだから、宝庫であることは間違いない。

イメージとしては、アマゾンやパンタナールの秘境の原始林に咲いた方が野生ランに似つかわしいのかも知れぬが、実情は少し違う。

ブラジルでほんとうに野生ランが豊富なのは、ブラジル東北部から南端リオ・グランデ・ド・スール州にかけての海岸を縦走している海岸山脈や、その支脈なのである。

とくに多いのはバイアからサンタ・カタリーナにかけての海岸山脈で、ブラジルを代表するカトレア、レリア、ソフロニチスの、いわゆるカトレア系のご三家のほとんどはこの地域に集中している。

パンタナールのような基本的にサバンナ植生の地域では、ランの種類はうんと少なくなる。

少なくともなるが、こここのランは他の地域では見られない独得の種類だから、希少価値はある。

セラードの疎林に寄生しているカトレア・レピリオールなどは、おそらくカトレア属としては唯一、セラードに生えるランかも知れない。

オンシジュームの仲間でも、セボレタというバルブが棒状になるランが河べりの木にやたらに寄生している。小さな黄花でさっぱり見ばえはしないが、珍しいランであることは間違いない。

また、八月下旬から九月のはじめにかけて咲くシルトポジウム・パルデゴルンもほかでは見られない珍種。

長大な五〇センチを超す紡錘形のバルブと、一メートルに及ぶ花梗を出してたくさんの黄花をつける大型種で、大きな株になると四〇〜五〇のバルブと花梗をつけるから、その開花期は実にみごとだ。

セラード疎林を歩いていてこれにぶつかると、一瞬イペーの花かと錯覚する。ランの愛好家なら例外なく嘆息を洩らす逸品。

ソフロニチスのような小品だと、株やバルブをポケットやカバンに入れて持ち出されるおそれがあるが、このランは一つのバルブだけでも長さ五〇センチ、二〇〇グラムもあるし、株ごと持ち出そうとしたら車でなければ運べない。

それで持れ出す人もおらず当方は頭を痛めず
にすむ。

このランも珍しいが、パンタナールできわめつきの珍種は、アベナリア・アリカエンシスというアベナリア属のラン。一名を手綱ランともいって、花冠の基部から長く伸びる距(きよ)と呼ばれる管のような花部器官のあるのが特徴。

このラン、水中に根をおろし水上に一・五メートルも茎を出して花を咲かせる。植物学者のH O E N E が一九一〇年に発見した珍しい種類。

アベナリア属のランは世界に六百種もあり、日本のサギソウもこの仲間なのだから、属として珍しいわけではない。しかし、水上で花を咲かせるのはこの種だけ。

水上で花を咲かせるといっても、ほんとうは乾季に水の干上がった低地に根をおろし発芽するのである。雨季がきて浸水すると、ランは水没して死ぬのを防ぐためどんどん茎を伸ばして常に水上に顔を出す。

そんなに苦労しなくても冠水しない場所に生えればよさそうなものだが、やはり水が好きなのだ。

奇妙な学名

ランのことをポルトガル語でオルキデアという。英語ならオーキッドとなり欧米諸国ではたいていこの系統の言葉を用いている。

語源はギリシャ語のオルキスつまり男性の辜丸のことで、ラテン語のテステクロと同義。ランの根元についている、丸いバルブを生命の根源である辜丸にみたてたもの。

もつとも、ランにはいろいろ種類があつて、棒状のバルブをつけるもの、紡錘形のバルブを持つもの、あるいはまったくバルブを持たぬものもあるから、かならずしも丸いバルブとは限らない。

動植物の学名は通常ラテン語、まれにギリシャ語でつけられるが、形態的な特徴で名付けられることが多い。したがつて中には随分おかしな名前も登場する。

パンタナールのセラードには、イズメニアとかフェイジョン・ブラボとか称するマメ科の小さなツル草がたくさん生えている。直径五〜六センチの円形の可憐な青色の花をつける。

この植物の学名をクリトリア・テルナチアと

いう。クリトリアはラテン語でクリトリス（陰核）のこと。

この花、誰がどう見ても形状が女性の性器にそっくり。ふざけているわけではない。論より証拠で、一見すれば万人が納得する。全体が青い色の花のほかにも、白い花で中心部だけが濃い赤色という派手なものもある。時なしでたいいてい年中どこかで咲いている。鉢ものに仕立てるとおもしろい。

マメ科、パピリオ亜科、クリトリア属のつる性植物はブラジルに二〇種もあり、いずれも女性自身に酷似した花をつけるから、イズメニアもブラジル土着の植物ではないかと考えている。動、植物の特徴をよく是めそれを生かした名前をつけるのは、ブラジルのインジオの得意技である。

だから、クリトリア属の植物にも何かそれらしい名前があるだろうと思って探したら、いきなり“クニヤン”の名前が出てきたのにはびっくりした。

クニヤンとはツピー語で女性、娘の意である。むろん、この場合は花の形が女性自身に似ているから「女」と命名したのは明らか。

それにしてもこれはまた簡明、直裁、ズバリそのものの命名で、いささかど肝を抜かれる。

インジオはもって回った言い方などしないから、女性のシンボルに似たこの花をストレートに「女」と表現したのだろう。

しかし、このくらい率直かつ正直に名前をつけられると、逆にすっきりしていやらしさが消えてしまう。



クニャン、ことイズメニア

ここで脱線して “クニャン” の説明をしておく。

ツピー語のクニャンは中国語の姑娘（クニャン）と音も似ており、意味も同じである。人

種的にはどちらもモンゴロイドであることから、ツピー語・中国語同一オリジン説の有力なる例証として、常に引合いに出される言葉である。しかしこれはかなり苦しいこじつけで、共通語が五〇も一〇〇もあるならともかく、一つや二つではどうにもならない。

だいいち、クニヤンというツピー語はク（言葉）とニヤン（走る、流れる）の合成語で「おしゃべり」のことなのだ。

未開のインジオ社会にあっても女の姦（かしま）しきは生得（せいとく）のもの。男はほとほと閉口したようである。

アリと共生の野生バニラ

お菓子やアイスクリーム、チョコレートなどの香料に用いるバニラは、中南米特産のラン科植物バニラのサヤ菓を乾燥、調製したものだ。

なんとなく甘ったるいセクシーな香りで比較的女性に好かれる。

最初パンタナールに行った時、アクリ椰子の上にはバニラがたくさんついているのを見て、こ

んなにバニラが良く出来いつそのこと栽培したらどんなものかと、われにも無く助平根性を起こして調べたことがあった。

ところがこれがダメなのである。バニラには違くないが種が違う。現在栽培されているのはメキシコ原産のバニラ・プラコフオリアの改良種であるのに対し、パンタナールのは野生のバニラ・パルマルン。

香料としてのバニラがとれないことはないにしても、バイアのレコンカーボ地方やアマゾンのトメアスーで日本人が栽培しているバニラに比べたら、品質収量とも格段におちる。

バニラというランはもちろん寄生植物だが、おもしろい性質をもっていて最初は土中にひげ根をおろし、地上から生えてくる。

つる性の植物で茎は緑色の棒状、葉はつやのある卵形。葉の根元から白い気根を出してほかのものにからまり、どんどん伸びる。

そして地上部が充分に成長すると、こんどは地中の根が枯れ完全に寄生植物になってしまう。

花はランのイメージに似合わないレモン色とどうか、淡緑色の地味で冴えない花。雌雄異株だから、栽培の場合は人工受粉してやらないと結

実しない。

果実は栽培のは長さ一五〜二五センチ、径一〇ミリほどの三稜形バナナ型サヤ果。黄変した時に摘みとり、ややこしい乾燥、調製をおこなって製品にする。

野生バニラも香料原料として使えないわけではないが、果実が五、六センチと小さいうえ、調製しても栽培もののようにワニリンが結晶して析出することがないから、商品となりにくい。

野生バニラはブラジルには何種類かある。パシタナールではアクリ椰子に寄生する椰子バニラだけで、ほとんどすべてのアクリ椰子に寄生している。

このバニラは一種のアリ植物で、昆虫のアリと共生関係にあり、アクリ椰子の根元にはたいていフタフシアリ科アステカ属のフォルミーガ・デ・エンセルトの巣がある。

かなり凶暴なアリで、うっかり足を踏み入れると喰いつかれてひどい目に遭う。

バニラが熟しサヤがはじけて種子が落ちると、アリは種子を大事に巣に運び発芽させる。

発芽したバニラは日に日に蔓を伸ばし、アク

リ椰子にとりついて成長する。このバニラの若芽から分泌される蜜状の液がアリにとって不可欠の栄養素になっているのだ。

参考までに言うと、アステカ属のアリはブラジルに三種おり、いずれも植物に寄生する。体色は黒いが腹だけ黄色いからすぐわかる。インバウーバ（セクロピア）樹に寄生するのもこの仲間。さて、野生の椰子バニラ、発酵させて香りを出す技術を持たなかったインジオは、香料ではなく薬用として使用した。

薬効は多岐にわたるが、強壮、強精剤として古来定評がある。しかし、生薬は私の専門だから多くを語るのはやめておく。

「絞殺木」 マッタ・パウ

都会のコンクリート・ジャングルに暮らしていては分からぬが、アリと野生バニラの共生関係のような自然の営みの絶妙さには思わず溜息が出る。

それにしてもパンタナールのアクリ椰子はおかしな木で、どういふものかいろいろな植物がやたらに寄生する。

バニラが寄生しているほかに、サトイモ科のフィロデンドロンやウラボシ科の各種シダ類も間違事なく寄生している。また、クワ科のフィゲラにもとりつかれ、遂には締め殺されてしまう。

アクリ椰子はパンタナールではたいへんな有用樹で、房になった果実も煮て食べられるし油もとれる。若葉の芯であるパルミットもおいしい。

椰子の葉は牛馬の飼料になるし、巨大な肉穂花序は蜜蜂が好み、カマラの花と共にパンタナールの重要な蜜源植物となっている。

更にアクリ椰子が自生する土地は土壌がよく作物の栽培に適しているといわれ、いわば作物栽培の「指標植物」ともなっているのだ。

このアクリ椰子を選んで寄生し腕を出してアクリを抱き遂には締め殺してしまう、おそるべき「絞殺木」がマツタ・パウ（樹木殺し）と呼ばれるフィゲラである。

フィゲラというクワ科のイチジク属（Ficus属）の木は、ブラジルではよく知られた木で種類も多い。

ものすごく分枝して、四〇メートル以上も横

に拡がる巨木もある。横に拡がっても枝が折れないのは、幹や枝から出る気根が地面に達して支柱根として非常に発達し、幹や枝をしつかりと支えるからである。

支柱根は奇怪な柱状板根であり、いささか気味が悪い。

すべてのフィゲータが寄生木ではなく、むしろ「絞殺木」のフィゲータは少数派に属するのだが、パンタナールのアクリ椰子はほとんど一〇〇パーセント「絞殺木」に寄生される。

どういうわけでアクリ椰子のみに寄生するのか、そのメカニズムはまだわかっていない。

フィゲータは「絞殺木」であると否とを問わず、ブラジルでは悪木とされており、この木に鳥が巣をつくることはない。乳液状の樹液に毒性があるからである。

フィゲータの仲間には世界の熱帯、亜熱帯を中心に約八〇〇種がある。

沖縄や東南アジアに自生するガジュマル（榕樹）やインド、パキスタンのインドボダイジュもこの仲間で、巨大な支柱根をつくる場所も他の植物に寄生して絞め殺すところも同じ。

インドボダイジュは天竺菩提樹ともいわれ、お釈迦さんがこの樹の下で悟りを開いた「聖なる木」でブラジルとは正反対の評価。

だから、この木の学名はお釈迦さんに敬意を表して、フィクス・レリジオーラ（神聖なるフィゲーラ）とつけられている。まさに「所かわれば品かわる」である。

ただし、この故事に因んで日本のお寺などに植えられている菩提樹は、フィゲーラとはまったく異なるシナ科の木で、シューベルトの作曲した「菩提樹」と同じくリンデンパームの種類。だいたい、熱帯の木であるフィゲーラが日本やドイツで生えるはずがない。こういう間違いはけつきよく「アカシヤの大連」とか「アカシヤの雨が止むとき」の「アカシヤ」もほんものではなくニセアカシヤのことである。

悪草・ホテイアオイ

パンタナールの特産というわけではないが、南米原産の水草にホテイアオイがある。ブラジル語ではアグアペーが一般的な呼び名だ。

現在では世界中に分布が拡がっており、日本

でも金魚鉢に入れる浮草としてよく知られている。

紫色の花をつける一見やさしそうな水草だが、原産地のブラジルではとても金魚鉢に入れるような可憐な浮草ではなく、悪草中の悪草である。

水上に浮いた部分でも六〇センチに達する大きな水草で、まことにすさまじい繁殖力をもっており、半年も放っておくとびっしりとジュウタンを敷きつめたようになる。

ホテイアオイの根は長いヒゲ根で、これがお互いにしっかりと絡み合っているから少々ひっぱったぐらいでは離れるものではない。

アマゾンやパンタナールの水路をふさぐ一番のやっかいものがこれで、カナーや小さなエンジンの舟はもちろん、一〇〇トンぐらいの船でもこの茂みにのり入れたら立往生する。

おまけにこの水草の下は、ワニや大蛇のスクリーが好んで休んでいるところだから、うっかり飛びこむわけにもいかず弱ってしまう。

大きな塊になると、幅、長さとも一〇〇メートルを超すが、こんなのが行く手の水路をふさいでいるとまったくうんざりする。

何時間もかけて擢や棒や山刀で押ししたり、切ったり、悪戦苦闘を続けながら水路を開いてゆくのだが、水草にとまっていた蚊やブヨやその他の毒虫が驚いて飛び上がり、それが人間を襲うのだからたまったものではない。

この作業のつらさは実際に経験したものでなければわからない。

いくら大きな水草の塊でも、完全な浮草となつて少しずつでも流れているのはまだよい。これがどこか、ひっかかって動かなくなると、ホテアオイは細いヒゲ根をどんどん伸ばし、水底の泥中にもぐつてしまう。

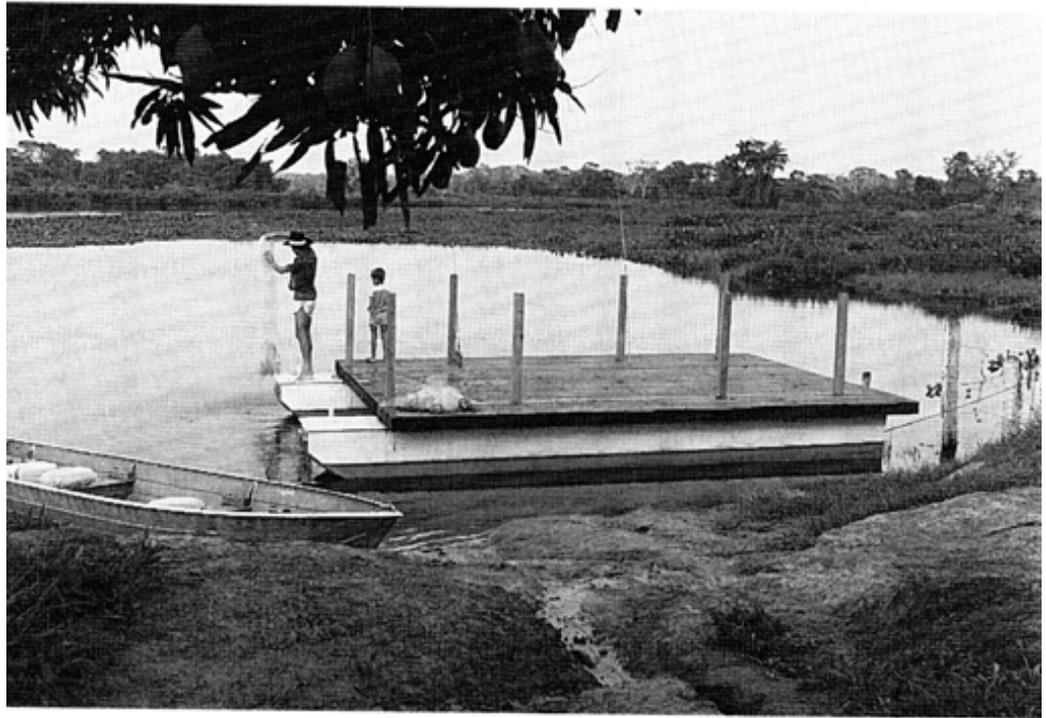
そうになると、ヒゲ根が無数の繫留索となつてホテアオイの塊を固定してしまふ。こうなると人間の力で動かそうと思つても、ビクともするものではない。

バランキンニヨ・ホテルの舟付場の脇にも、数一〇〇メートルに及ぶホテアオイの大群落がある。

それが増殖して舟付場をふさぎそうに困つていたら、水流がちよつと変わったらしく一部が切れてしまい、いい具合に流れ出した。やはり水の力というものは凄いものである。

そのため、現在舟付場は広い入江になってい
る。五年ぶりの変化だ。ただこれから先どのよう
に変わっていくのか、これは誰にも予測できな
い。

水路ふさぎの厄介なホテイアオイも、大自然
の営みの中ではちゃんとした役割を果している。
魚の中にはこのヒゲ根に卵を産みつけるもの
が少なくない。バクテリアが多いから幼魚の棲



ホテルの浮き栈橋

息に適しているのだ。もちろん隠れ場所としても充分役に立つ。

水棲昆虫も多いし、水面上の葉にも多くの虫が寄る。それを目当てに小鳥が集まるというようにホテイアオイの周囲はフアウナが豊かなのである。

また、この浮草は栄養価が高く、牛や豚の飼料となることがわかっている。更に最近ではアルコールをつくるバイオマス原料としても注目されている。”厄介もの”が”救世主”に変身する日は案外早くやってくるかも知れない。

さびれた「吐根」の採取

このパンタナール周辺の特産物で、ほかにはみられない植物にポアアがある。ポアアはパラグアイ河上流のアルト・パラグアイ地方から、アマゾン河水系であるグワポレ河にかけての森林に自生する薬草で、かつてはカッセレスがこの生薬の集散地だった。

アカネ科の植物の根で、ジュズ玉状のコブのついているものを薬用にするのである。

昔、世界中にはやったアmeerバー赤痢の特効薬で、催吐作用のあるアルカロイド、エメチンを含んでいる。日本名は吐根（とこん）で、生薬としてはかなり古くから知られている。

こういうものの常で、ポアエアにもインジオの伝説がある。

インジオの村で飼っていたグワラという名前の犬が病気になったが、あまりに衰弱がひどく、村の誰もがもうすぐグワラは死ぬと思っていた。するとある日、瀕死のグワラが立ち上がり、ヨロヨロと森の方へ歩いていくではないか。

ふしぎに思った一人のインジオがあとをつけてみると、犬は森に入り、ある植物の根を必死に掘り出している。そしてやっとの思いで根を掘り出すと、そのコブのついた根を噛みくだき呑み込んでしまった。

しばらくすると、グワラは得体の知れぬ大量のドロドロしたものを吐き出した。すると驚いたことに、グワラはたちまち元氣を取り戻し、足取りも軽く村へ戻っていった。

こういう薬効のたしかな生薬を、「九世紀から七つの海を制覇したイギリスが見逃すはずがな

い。

「オーロ・ネグロ（黒い金（きん）」の異称でポア
イアを買いまくり、イギリス本国に輸入した。

リオの港から輸出したのでイペカ・ド・リオ
（リオ吐根）の名がある。

イギリスの独占だったから儲けも大きかった
が、もつと儲けようと考えたイギリスは、この吐
根を東南アジアの自国の植民地で栽培すること
にした。アマゾンのゴムを盗み出したのと同じ
やり方である。

一時は栽培に成功し、ジョホール吐根の名で
市場に出たこともあるが、環境に合わなかった
のか次第に出来なくなり、やがて姿を消した。そ
うそう何でもうまくいってはブラジルが困る。

ポアイアは環境条件がうるさく、ブラジルで
もカッセレスを中心にした原始林にしか自生し
ない。

この辺の森林は、アマゾン型の赤道降雨林と
一般の熱帯降雨林との中間型で、気候も暑いが、
南極冷氣団が異常発達した際の北上線の道筋に
あたっており、フリーアーゼンと称して五、六度
に気温が下がることもある特異な地域である。

ポアイアを採取する専門の人間をポアイエイ

ロというが、ポアイエイロは雨季の終わる五月ごろから山に入り、九月ごろまで採取に従事する。

森の中に仮小屋を建て、蚊、ブヨ、ダニ、アブ、ヒル、アリなどの吸血昆虫に悩まされ、オンサや毒蛇の恐怖にさらされての仕事はラクではない。マラリアや黄熱病でやられる人間も多かった。

吐根は塩酸エメチンの原料として需要が多かったのだが、最近では化学合成で出来るようになって需要は激減、専門のポアイエイロもめつきり数が減り、仕事もなくなってきている。

混乱しているカマラの名

カマラの花盛りになっている。この花はイペーと共にパンタナールでは代表的な季節の花である。

イペーはブラジルではだいたいの全国的に見られる、華やかな花をつける樹木として知られているが、カマラの方は植生がほとんどパンタナール地方に限られる。「そんなことはない、カマラなんてどこにもあるよ」と、反論される向きもあるかと思う。だが、しばらく待つてほし

い。

パンタナールのカマラはボキシア科の大木で浸水地を好むから、河べりの回廊林にはこの木がずらりと並んでいる。用材としてはたいしたことではない。それでもまっすぐな材木の得にくいパンタナールでは、けっこう種々の用途に用いられている。

カマラの花は黄色で、ローソクを立てたように穂状に咲く。ひとつひとつの花がきれいなわけでもなく、イペーや日本の桜のように葉の出る前に花が一斉に咲くわけでもない。

しかし、カマラは大木の上にやたらに数が多い。それにこの木はよく分枝して枝を張っているから、無数の黄色いローソクを直立させた姿は実に見事で、パンタナールを彩る独特の風景となっている。

蜜蜂がこの花をたいへん好み、パンタナールではもつとも重要な蜜源植物。当地でふつうハチミツといえば、カマラの花の蜜のことだ。

ところで、カマラまたはカンパラの名称だが、この名前には植物研究者は昔から泣かされてきた。



ローソクを立てたようなカマラの花

カマラという名前の植物がブラジルには多すぎるのである。キク科、クマツヅラ科、クスノキ科、ツヅラフジ科、ボキシア科の植物にこの名前があつて、細かく数えていくと一〇〇以上にもなる。

だから、カマラという名前だけでは具体的にどの植物を指すのか見当がつかないのだ。そうかといって、ほとんどがブラジル特産の植物であるため、代替の名前をつけるわけにもいかない。

カマラはツピー語のカア（森、植物）ンバラー

（色のついた、斑入りの） という意味で、斑入りの花をつける植物、つまり穂状花序のような集合花をつける植物の呼称なのである。

固有名詞ではないのだから厄介きわまりなく、研究者の間でも混乱している始末。インジオも意地の悪い名前をつけたものではある。

パンタナールの大木のカマラ、どういうわけか猿に好かれる。オマキザル科のホエザル、クモザル、オマキザルなどで、とくにホエザルはカマラ専門に棲んでいるような気がする。

カマラが枝を張っているため、猿の棲息に適しているのか、カマラの実を食べるためこの木を選ぶのか、あるいはほかに理由があるのか、今のところ分からない。

動物が寄るといえば、パンタナールの日陰樹であるクマツヅラ科のタルマンの大木の下には、放牧の牛が寄ってくる。

タルマンもよく枝を張る木で格好の日陰樹となるから、それで牛が寄るのかと思ったら、どうもそうではないらしい。だいいち、この木は乾季になると葉をおとして裸になってしまう。

タルマンは黒くて丸い実をつける。この実が

独特の芳香をもっており、牛はこの匂いにひかれて寄ってくるというのが事実らしい。これにも異論はあるから断定はできぬ。

バカにならぬ薬草伝説

ママカデラというセラード特有のクワ科の薬木がパンタナールにある。続けて読まずにママとカデラに分けてほしい。

「犬のオツパイ」という意味で、対生する葉の葉柄の根元から乳首のような黄色い四〜五個の実がつく。なるほど犬のオツパイとは言い得て妙である。

この実、もちろん食べられる。さわやかな芳香を放つ果実で、子供達は好んでこの実を口にす。子供が好むのは食べられるだけではなく、チューインガムの代用になるからだ。

つまり、この実の皮は柔らかいというか硬いというか、長いこと口の中で噛んでいても溶けることがないのである。

かつてはインジオもこの実を口に入れてクチャクチャやっていたようで、ツピー語でこの実をアペーと言った。

アペーというのは、強靱でしかも柔らかい皮ということだから、要するにチューインガムのように、いくら噛んでもなくならないものことである。

もつともチューインガムノキというのは別にあつて、熱帯アメリカに自生している。アカテツ科のサポチとかサボタという樹で、樹幹を傷つけて出る乳液を固めたのがチクル・ガムで、チューインガムの原料になるものである。

これに比べたらママカデラなどは食品工業に利用されるようなものではなく、せいぜい現地の子供が口にする程度のシロモノである。

ところがこの木、薬用としてはたいへんおもしろく、インジオはこの植物の根をつぶし、これを皮膚のメラニン欠乏症である「しろなまず」の治療に用いた。

この療法は東北ブラジルの黒人系住民に受けつがれ、現在でも民間療法として根強い人気をもっている。

ブラジルの医薬学界では、この療法はまったく根拠のないものとして認めなかったが、治験例がたくさん出はじめたので改めて興味を持ち、研究をはじめた。

その結果、根にベルガプテンやフロクマリンという成分があり、これが紫外線を受けると皮膚の色素であるメラニンをふやす作用のあることがわかってきた。

インジオの言い伝えのある生薬類にはいろいろおもしろいのがあって、一見荒唐無稽にみえる伝説の中に案外真実が隠されていることが多い。

大トカゲのテグーにもおもしろいハナシがある。

テグトカゲは気が荒くいろいろな動物とケンカするが、特に折り合いの悪いのがガラガラ蛇で、ハブとマンガースの仇敵関係ほどではないにしてもガラガラ蛇と出合うとたいていひどいケンカになる。

さて、これからがインジオの伝説。

ケンカをすればテグも毒蛇に噛まれて毒がまわる。噛まれたテグは直ちに戦いをやめ、大急ぎで“トカゲのイモ”と称する植物を探し、大きなイモ状の塊根を掘り出して一口かじる。するとたちまち元気回復、ガラガラ蛇の毒などはたちまち吹っ飛んでしまう。そこでテグトカゲは再びガラガラ蛇のところにとって返し、今度

こそは蛇をやっつけてしまおうのである。

トカゲが復讐戦を挑むかどうかは知らぬが、イモをかじるのも治癒するのもほんとうの話。この“トカゲのイモ”には抗蛇毒成分のあることが証明されている。

毒草で対抗するインジオ

インジオが永年にわたって培ってきた生活の知恵はたいしたものである。

私はブラジルの薬草をいささか研究しているものだが、インジオの薬草に対する知識の深さにはつくづく感心させられる。

おそらくインジオは、ありとあらゆる植物の草根木皮を薬用として試みたに違いない。

ただ残念なことにインジオは文字を持っていないから、生薬に関する該博な知識を記録に残しておくことが出来なかつたし、生薬の体系をつくることも出来なかつた。

インジオの用いた生薬は地域によって異なるのが普通だが、毒薬や幻覚薬などにはその地方に原植物がないのに用いられていることがある。

これは明らかにインジオの各部族間に交流

があつた証拠で、昔のインジオは比較的村同士の交易が盛んだつたと考えられる。

パンタナールのインジオのうち有力なのは、ポロロ族と、カヌーづくりのうまかつた、水上生活もするグワットース族である。

ポロロ族はパンタナールからパラグアイ河上流一帯にかけて居住した有力な部族で、かつてサンパウロのバンデランテ達がマツト・グロツソ遠征をおこなつた際に遭遇し、苦戦を強いられたインジオである。

古くから白人に知られたインジオだが、一八世紀にはじまつたクヤバを中心とするマツトグロツソの金ブームの時代には、金掘り奴隷として使われた。

ひとやま当てようという、気の荒い白人が鉄砲とムチでインジオを酷使したのはどこでも同じだが、誇り高いポロロ族はひそかに復讐を考えそれを実行した。

復讐といつても、まともに抵抗したのでは火器をもたないインジオが白人に勝てるはずはない。

ポロロ族は自分達のもっている薬草の知識をいかし、ある種の毒草の根を粉末にして、少しず

つ白人の食べものの中に混ぜ、服用させたのである。

この毒草を服用した白人は、最初は興奮、狂乱症状を呈するが、次第におとなしくなりついで頭の働き、身体の動きがぶくなり舌がマヒしものが言えなくなつて死んでしまう。半年ぐらいでこうなるのだ。

何が原因で死ぬのか白人側にはわからないところがミソで、そのために毎日少しずつ服用させるのである。

この薬草はパンタナールからアマゾンにかけて自生している、エルバ・ギネーというヤマゴボウ科の蔓性灌木である。

ほかにムクラカー、ピピー、チピーなどともいうが、傑作なのはアマンサ・セニョールという異名のあることである。

主人を馴らす、主人をおとなしくさせるといふ意味だが、舌がマヒし、ものが言えなくなつて死ぬのだから、文字通り主人をおとなしくさせる特効薬である。

この薬はその後ゴム景気時代のアマゾンでも用いられたことがあつたが、この時代になると白人にも知られるようになり、ポロロ族はどう

まくいかなかった。

この薬草はリウマチ、関節炎の特効薬であらゆる痛みどめにもなるし、墮胎薬としても卓効がある。ただし毒薬だから量を間違えるとあの世行きになる。

インジオが用いてあまり事故が起きないのは、調合の専門家がいて分量や使用方法を誤らないからである。

“禅味”あるポロロ民話

インジオのポロロ族は早くから白人と接触したため殺されたり奴隷にされたりずい云んひどい目に遭ったが、ブラジルのインジオの中では有力な部族であり、知的水準も高かった。

工芸にもすぐれており腕輪、首かぎりその他装飾品にすぐれた作品をのこしている。

ポロロ族の民話には、なかなか含蓄があつておもしろいものが多いが、ひとつを紹介してみよう。

昔むかしのある日、岩と竹がこれから地上にあらわれてくる人間の生命について、岩と竹のどちらに似るべきかを議論しました。

岩 「人間の生命はワシを見ならうべきだな。なにしろワシの生命は長いからね」

竹 「いやいや、人間の生命はワシにこそ似るべきだよ。ワシは死ぬけど、すぐに次の生命があらわれるからね」

岩 「そんなバカなことがあるものか……。いかい、ワシは吹き荒れる風にも、どんな豪雨にもまけないんだぜ。暑さだって問題じゃないね。ワシの生命は長いというより永遠なんだよ。それにまだ良いことがあるね。それはどんな痛みも悩みも感じないということさ。え、どうだい、どう思うかね……？」

竹 「いや、違うね。人間の生命はやっぱりワシのようにあるべきだよ。たしかに残念ながら死ぬことは避けられないけど、ワシの子供はすぐ生まれてくるからね。えっ、そんなことないって。じゃあワシのまわりを見てごらんよ。やわらかな、白い肌をした子供達がいっぱいいるじゃないか」

岩はなんにも言い返すことが出来ず、怒って黙りこんでしまいました。こうして人間の生命は竹を見ならうようになったのです。

なんだか禅問答風のおもむきがある。

私の創作と思われてはめいわくだから出典をあげておくが、この話は一九四二年発行のエジトーラ、ナショナル社の『オス・ポロロス・オリエンタイス』に記載されている。

このポロロ族に緑の深い、ブラジルの誇る大人物にロンドン元帥がいる。偉大なる軍人であり、博物学者であり、奥地探検家であり、インジオの父といわれるカンジト・マリアーノ、ダ・シルバ・ロンドン將軍は、一八六五年、パンタナールの小集落であるマット・グロッソ州ミモゾ郡のモーロ・レドンドに生まれた。この地方はポロロ族の居住地だが、実はロンドン將軍の母方の曾祖母はポロロ族の女性であり將軍はポロロ族の血をひいているのである。

奥地探検中、しばしばインジオに襲われながら、「必要あらば死すとも、断じて殺さず」とインジオ保護を身をもって実践したすばらしい情熱は、將軍自身に流れる血と無縁ではあるまい。

ロンドン元帥はもともとは電信線架設の工兵将校だが、この人ほどブラジル奥地を実地に踏査した人はいない。

マット・グロッソ、ゴヤスからアマゾン一帯に

かけて四万キロを踏査したのだから、文句なく
奥地探検の第一人者である。

長生きをした人で一九五八年に九二歳で亡く
なったが、先ごろ州に昇格した「ロンドニア」
は、元帥の功績をたたえて命名されたものであ
る。

野生イネを利用する

パンタナールのように、水に恵まれたところ
には野生のイネがあるのではないかと思ってい
たら、やはりあった。

サレジャーノ派の牧師達を書いた、ポロロ族
に関する膨大な研究書に、かつてパンタナール
地方にいたポロロ族や、その他のインジオが野
生の稲を食用にしていたことが記載されている。

現在、世界で栽培されている稲は、西アフリカ
で僅かに栽培されているオリザ・グラベリマ以
外はすべてオリザ・サチバ種である。

水稻だろうと陸稲だろうと、ササニシキだろ
うとコシヒカリだろうと、サチバ種であること
にはかわりはない。

品種改良でたいへんな数の品種が生み出され

ているが、いかなる改良種もすべてイネ科オリザ属サチバ種なのである。

ところがイネ科オリザ属には前述のサチバ種、グラベリマ種以外に一七種もあり、やはりこれもイネの仲間になる。

イネはもともと水草で熱帯、亜熱帯の産だから、アマゾンやパンタナールのような環境にはサチバ種以外のイネの仲間がいくつか自生していた。

有名なのは浮き稲で、増水期になると茎がどんどん伸びて、葉とイネを水に浮かせる形になるのだが、極端な場合には茎が水中で六、七メートルの長さになることもある。

野生種のイネも食用になるが、人間に都合よく改良された栽培種とは違って重大な欠点をいくつか持っている。

まず、一斉に熟さないことである。熱帯のようにいつも暑い気候では、水さえあればイネはいつでも発芽する。したがって熟す時期もバラバラになり大量収穫ができない。

それに野生のイネは栽培イネのように、実の一粒一粒がしっかりと穂についていない。

手でちよっと触れただけでバラバラ下に落ち

てしまおうし、少し強い風が吹けば成熟した粒はすべて落ちてしまう。

野生イネはたいていこういう欠点をもっていたから、食べられることはわかっているけれども、食糧源として大きな存在になれなかった。

それでも、一七種の野生イネのうちいちばんマシだったのが、アマゾン下流やパンタナールにあったオリザ・スプラッタといわれるトゲイネである。

二メートルぐらいになる背の高いイネで、茎は硬く、穂先は下がらず上を向いており、鋭い棘になっている。

この棘に刺されると非常に痛いが、他の野生イネのようにさわっただけで粒が落ちる欠点が無かった。サチバ種より粒が大きく、甘味のあるのが特徴である。

もちろん現在の改良種の稲のようにひとつの穂に沢山の粒がついているわけではないが、丹念に収穫すればかなりの数量を集めることができた。

パンタナールのポロロやグアトース、その他のインジオは、かなり重要な食糧源としてこのイネを利用したと思われる。

ただし、ポロロはその後アラグアイア上流の方に移動するから、現在のポロロ族がこのイネを利用してゐるわけではない。

ブラジルに栽培種のサチバ改良種が入るのは一七世紀の半ばごろで、サンパウロ州の海岸地方イグアペが最初だが、それまでパラヤアラゴアス州で、トゲイネの栽培が試みられたこともあった。

ものぐさ鳥類観察記

屋根で卵を産むニワトリ

北林夫人がエマ（アメリカ・ダチョウ）のヒナを飼いはじめてから二年たった。エマがホテルの動物の仲間入りをし成長するにつれて、一大恐慌をきたしたのがメンドリである。

エマがヒヨコだったころは、むしろニワトリにいじめられていたのだが、二年ほどで、エマは人間の背丈になり、ニワトリなどは問題にならなくなった。このエマ、滅多にはやらないが、よほど虫の居どころが悪いとニワトリやアヒルをパツと一噛みするのである。

「平べったいけど、あの大きなクチバシでしょう。ものすごい力ですからね。パツと噛んですぐ離すんですが、骨が折れたらまず助かりませんね」とは北林夫人の解説。

ニワトリにとってほとんど災難である。が、これは交通事故みたいなもので、そう度々起きることではない。それよりもっと深刻な事態が発

生しているのだ。朝の涼しいうちに河沿いの森林（回廊林）に入って薬草の調査をしホテルに引揚げたら、屋根のひさしから白いピンポン玉みたいなものが落ちて来て足元でつぶれた。

よく見るとニワトリの卵である。早速北林夫人に話した。

「何でニワトリの卵が屋根から落ちてくるんだらうね……」

「メンドリが屋根で産むんですよ」

「どうしてメンドリが屋根で卵を産まなきやならないの……」

「地面に産んだらエマに食べられちゃうからですよ」

「へえー、エマはニワトリの卵食べるの……」

「食べますよ、見せましょうか」

と言って夫人は台所から卵を二つ持って庭に出た。五匹のエマは一五〇メートルぐらい先の草地を歩いている。「エマちゃん！」夫人がカイン高い声で叫ぶと、一瞬エマは立ち止まって首を伸ばす。

そして北林夫人を認めるや否や、猛烈なスピードで五匹とも走り寄ってきた。羽根を拡げて、文字通り飛ぶように走るのである。このトリ

は羽根を自由に操作することによって、急停止も急旋回も思いのままなのだ。

「よく来たわね、エマちゃんタマゴ食べる」

と夫人が卵を握った掌をパツと開くと、オスがサツとくわえ丸呑みにした。くわえるのと呑みこむのと一瞬の動作である。

割らずに丸呑みにするのだから、エマの長い頸を卵がなめらかに降りていくのが外からはつきりわかる。「ハイ、今度はあんたね」と、メスの一羽に掌を広げたら、まったく同様に呑みこんだ。

「今までうちのメンドリは草むらだろうが砂の上だろうが、平気でどこでも卵を産んでいたんです。でもエマが片っ端から卵を食べるようになって、メンドリは大あわてで河べりの草むらとか、物置小屋の中とか縁の下を選んで卵を産むようになったんですが、それでもやられます。それで、高いところ、高いところと探してこのごろはどうとう屋根の上で産むメンドリが何羽かわられるようになったんです」

かわいそうにメンドリには屋根の勾配までは計算できないから、産んで立ち上がった途端に卵は転がって地面に落ちてしまうことに相成る。

しかし、自然界における種族保存の本能は大したもの。このニワトリのように近親交配で劣化した鳥でも、種の存続が脅かされると必死に自衛策を講じ、なんとか種を残そうと懸命の努力をするのだ

配偶者を他に求める

ホテルにいるエマぐらい訪問客のカメラに納まった動物はないだろう。この二年間、五匹のエマはもつとも忙しいモデルをつとめた。

野生動物の生態は自然の状態で観察するのが最良であることは言うまでもない。だが、そうかといって本当に自然の状態ではなかなか観察できないのである。

だいいち、野生動物はじっくり観察できるほど人間を近寄らせてはくれず、さっと逃げ散ってしまう。もちろん身体に触らせるなどは論外だ。そこへいくと、バランキンニヨで飼ったコウノトリ、オウム、サケビドリ、アメリカ・ダチョウ、アルマジロなどは、檻に入れたり囲ったりしないのに逃げないのだから、じっくり生態を観察することができる。

これらの動物は、いずれもごく小さい時に、いろいろなアクシデントで親と離れたため、親代わりの北林夫人のところへ持ち込まれたものなのだ。

「まず、どんな餌を食べるか、それがわかるまでが大変なんです」

というが、たしかに小魚、肉の切り身、虫、野菜、ミルク、パン、水草、木の実、草の葉、ありとあらゆる餌でためしてみるのだからめんどうくさい。

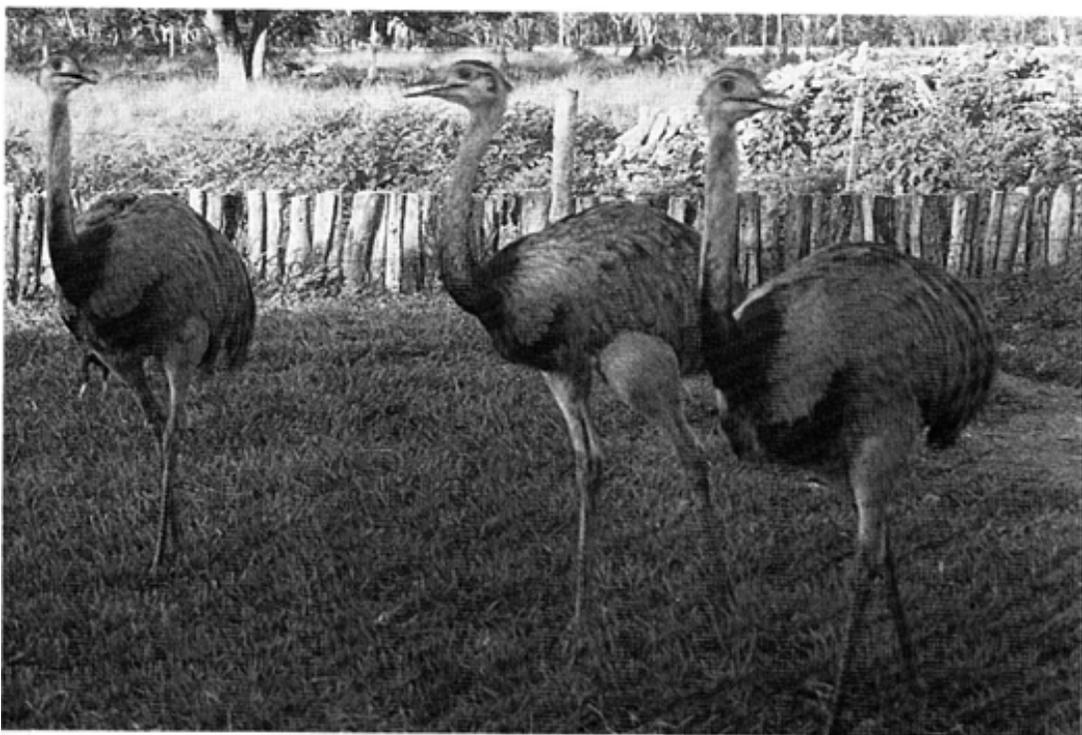
その代わり、そうやって世話をしていると、何を好んで食べるか、どんな習性をもっているのが自然に分かってくる。サケビドリは西瓜に目がないし、エマはパンが大好物である。

ここの野生動物は厳密に言えば飼っているのではなく、馴れているだけなのだ。だから大きくなって性的に成熟すると、配偶の相手を求めて勝手に飛び出し、戻ってこない。コウノトリもオウムもサケビドリもそうだった。

ある時私がホテルに行ったら、北林夫人がばかにしよげている。オウムとサケビドリが家出して帰ってこないのだそうだ。子供のない北林夫妻にとって、我が子のように可愛いがついて

た鳥がいなくなるのは、たまらなく淋しいものらしい。

「ほら、オウムもサケビドリも番、（つがい）というかオス・メスだったでしょう。もつともほんとは兄妹なんですけどね。それが時期がくると、まずオスがなくなるんです。どこへ行ったかというと、それが別のメスのところなんですよ。」



ホテルの人気ものダチョウたち

それでも最初は時々、新しいお嫁さんを連れ

て帰ってくるんですが、お嫁さんは人間に馴れていませんからね。きつと”あなた行きましようよ”とか何とか言われて、オスも寄りつかなくなるんです。やはり親よりお嫁さんがいいんですね……」なんだか人間の社会に似ているように思わず大笑いした。

オウムもサケビドリもオスの方が婿に行く。メスはホテル（自分のテリトリー）に残るが、やがてこのメスにもよそから婿がやってくる。婿は人間の近くにはやってこない。「あなた大丈夫よ」とメスが鳴声をあげて説得するものの、やは。だめ。そのうちに新妻を連れてどこかに行ってしまう。

それにしても自然の摂理は実にうまくできているものをつくづく感心させられる。近親交配を避けて、種の劣化を防ぐシステムがちゃんと遺伝子の中に組み込まれているのだ。

そこへいくと家畜や家禽は節操がない。手当たり次第の乱交や近親交配をくり返している。

種が劣化する家畜

「あのおう、中隅さん、今の日本ではニワトリは見

られないんですか……」

北林夫人がまじめな顔をして聞く。客がいなければ夕食後、チビリチビリとやりながら北林夫妻とよもやま話をするのがホテルにいる時の私のたのしみ。広い食堂の一角に陣どり、足元に日本製の蚊とり線香をおいている。

「そんなことはないでしょう……どうして？」

「でも、ここへこられた日本からのお客さんがこのニワトリを見て、これなんの鳥ですかかって聞くんですよ」

「ハハア……まあ、日本の都会の子供は、生きて走り回っているニワトリなんか見たことがないのかも知れないなあ……」

「いーえ、子供じゃなくて大人、それも一人や二人ではなく、何人にも聞かれるです」

これにはいささか驚いた。

「じゃあ、この鳥、ニワトリじゃなくて何に見えるんだろう」

と聞いたら、夫人の答えがふるっている。

「いえね、ニワトリに似ているとは言うんです。でもニワトリのように白くないし、小さくて形も違う。それにここの鳥は夜、樹の枝に留まって寝るから、絶対にニワトリではないって言うん

ですよ」

そう言われればたしかに日本にはこんなチンケなニワトリはいない。人工交配でつくり出された血統正しき交配種ばかりで、選抜されたニワトリである。

「ま、原種のニワトリとでも言っておくんだね。案外高く売れるかも知れないよ」

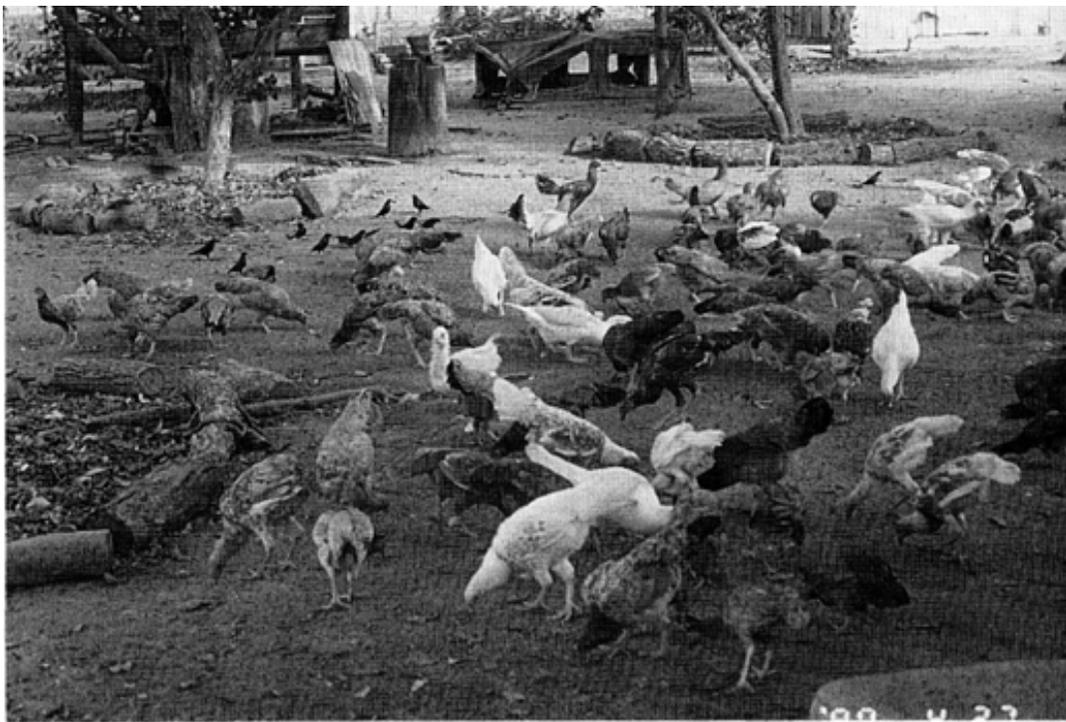
と三人で笑った。ホテルの家畜、家禽は牛、馬のほか、羊、豚、アヒル、ニワトリがいる。このうち豚とニワトリはもう一〇代ぐらい近親交配を繰り返している。

このくらい近親交配を重ねると、明らかに種の劣化が起こり、個体が小さくなる。豚などは成豚でも一五キロ程度。もう何代かすると一〇キロ止まりのミニブタの種が固定するのではないかと思っている。

ニワトリも元の種が何系なのか分からないが、改良の交配種とはまったく違う。身体の小さいのはまだ良いとしても、体型が細くてスマートな「クイナ型」で、ずんぐりむっくりの「ニワトリ型」ではない。

動作は敏捷だし、飛翔力は弱いものの、樹にも飛び上がる。したがって、通常のニワトリのイ

メージと合わないのも無理はないのだ。



ニワトリも野の鳥も一緒に餌を食べる

「ここらのカボクロ（土民）は、ニワトリとア
ランクアンという野生の鳥は交配するって言い
ますけどね……」

これは北林の旦那。しかし、キジ目ヤケイ科の
ニワトリと、キジ目ホウカンチョウ科のアラン
クアンが交配できる筈はない。科の下の属の段
階ならともかく、科が違っているのに交配でき

るということは生物学の常識では考えられないことなのである。

だが、あとで確かめたことだが、ここらの住民はニワトリとアランクアンは交雑すると信じて疑わない。

誤解だ、迷信だと片付けるのはかんたん。しかし、このテの観察にかけては住民はけっこう鋭いから、一概に「そんなバカな……」では済まされぬところがある。

この件、まだ確認がとれていない。案外、アランクアンをホウカンチョウ科に分類した学者の方が間違っていた可能性もなきにしもあらずだ。

乱舞する水鳥

パンタナールのファウナ（動物相）のうち、一番特徴的なのは何かとの質問を受けたが、答えはアビ・ファウナ（鳥の生物相）というのが適当だろう。

パンタナールを旅行して、一番先に目につく動物は鳥である。鳥といってもいろいろあるが、「うわ あー！」と思わず感心するのは湿

原を乱舞する水鳥の大群である。

この水鳥にも多くの種類があるのだが、パンタナールの場合、特に目立つのがサギ、ヘラサギ、トキ、コウノトリといったコウノトリ目に属する大型、中型のトリである。

これらのトリが各自、自分達のナワバリの樹に何百と留まったり群舞したりするさまは、まさにパンタナールならではの景観である。

コウノトリの仲間はだいたい身体が大きい上、純白やピンクなど非常に鮮やかな羽毛をもっており、大きな羽根を拡げてゆっくり舞うと実に優雅な感じになる。それにこの鳥は樹上に巣をつくり採餌以外は樹で休むからよけい人間の目につきやすい。

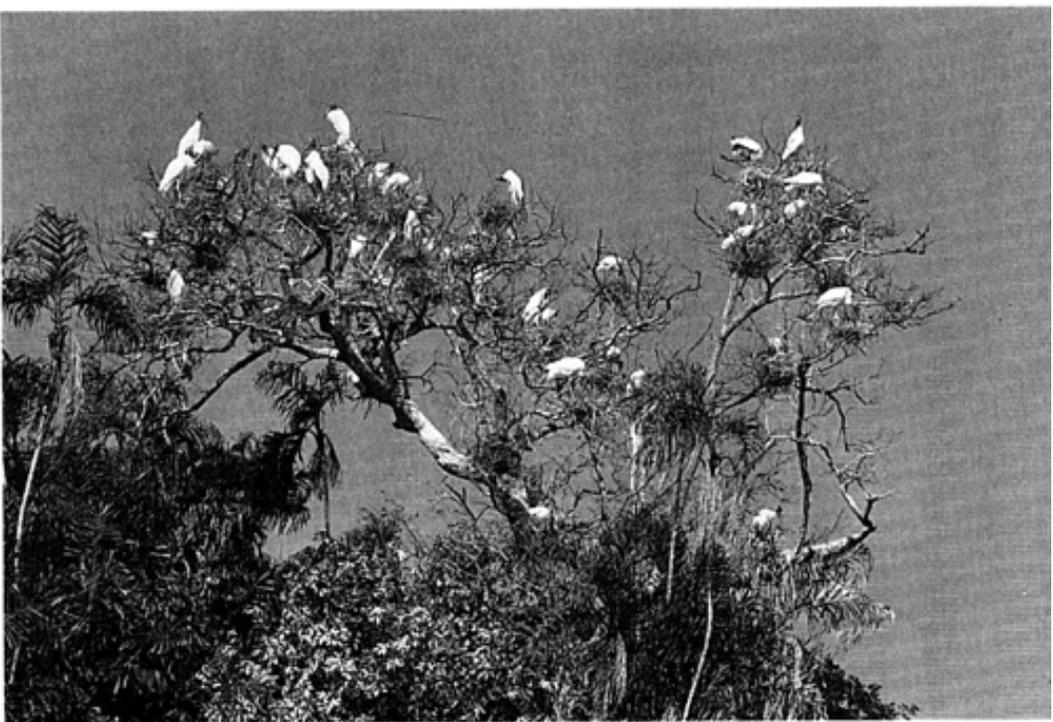
コウノトリ目の鳥はブラジルでは全部で三五種いるが、パンタナールにいるのはそのうちの二五種である。ただし、パンタナールにだけいる固有種はない。

パンタナールのコウノトリ目の壮観さは、種類の多様さもさることながら、ひとつひとつの種類がそれぞれに多くの個体数をもっていることである。

もちろん、アマゾンにだってこの種の水鳥は

たくさんいる。

ところが、アマゾンの場合にはガルサ（サギ）ならガルサ、ジャブブルー（コウノトリ）ならジャブブルー、コリエレイロ（ヘラサギ）ならコリエレイロだけが集まっているのでパンタナールのように二五種ものコウノトリ目のトリが一堂に会し、その光景が果てしもなく続いているというようなことはない。



コウノトリの営巣

アマゾンはパンタナールの二八倍もあるから、

アマゾン中のコウノトリ目のトリを全部集めれば、種類も個体数もパンタナールを凌駕するだろうが、単位面積当りの“鳥口”密度は圧倒的にパンタナールが高い。

パンタナールの属するセラード地帯は、ブラジル全体からみたら鳥の種類がそう多いところではない。ブラジルのトリは全体で二〇〇目・二五五〇種だが、セラードの鳥は二〇目・二五五〇種で、これはブラジル全体の三六・六パーセントでしかない。

コウノトリ、青サギ、ゴイサギなどの大型涉禽類の採餌は個人行動で、河べりに立って日がな一日じつとしている。あんなもので魚がとれるのかなと思うのだが、注意して見ていると、足元の小魚を器用に捕食しているのがわかる。

この間、大きな青サギが飛び立とうとして飛べずに暴れていた。近寄ってよく見たら、釣師の捨てた釣糸が肢にからまって飛べないのである。たぐり寄せて糸を切ってやったが、このごろこういう事故がふえている。

受難の歴史もつ白サギ

ブラジルではエマ（アメリカ・ダチヨウ）について大きい鳥はトウユユ（アマゾンならジャブルー）で、体長は一、二メートルほどに達する。

コウノトリ目、コウノトリ科の水鳥で、コウノトリと呼んでもさしつかえないが、ほんとうは新大陸独特のコウノトリであって、赤ん坊を運んでくるというヨーロッパのコウノトリとは少し違っている。

ヨーロッパのコウノトリはクチバシが赤く首と肩が白く、体が黒であるのに対し、ブラジルのトウユユはクチバシと首がまっ黒で、首のつけ根が赤いネッカチーフでもまいたように赤く、体はほとんど白で、まるでアベコベの色である。

トウユユはクチバシと首が黒いため一見すると覆面をしたように見え、ヨーロッパのコウノトリのような華やかさが無い。

トウユユは美しいとは言いかねるが、パンタナールにはベニヘラサギという首が白く体がバラ色の美しい渉禽（しろうきん）がいる。コウノトリ目、トキ科で、ブラジルではコリエレイロ

というが、クチバシが平たくサジ状というかヘラ状になっており、沼地の小魚をあさりやすいようになっていいる。

コウノトリ目のトリは体色の白いのがふつうだが、このトリはコウノトリ日中の紅一点で、文字通りパンタナールを彩る異色の存在である。

通常一〇〜三〇羽の小集団で生活するが、繁殖時にはコウノトリ科のカベツサ・セツカやサギ科の白サギなどと共にコロニー（集団営巣地）を形成する。

ベニヘラサギはたいへんな人間嫌いというか極端に神経質なトリで、人間を含めた外敵が巢に近付くと、せっかく孵化したヒナをクチバシで突き殺して飛び立つ習性をもっている。

産卵は一年に一度である。この時にヒナ殺しをやられると個体数は激減する。鳥類学者の見通しは悲観的で、一〇年後にはほとんどいなくなるかとみている。

沼地の魚や貝や水棲昆虫を餌にしている渉禽類（コウノトリ目やチドリ目）のトリは肉がまずく人間の食用には適さない。

食用にならなければ人間に殺されることもなく、無事に一生を過せそうなものだが、そうは問

屋がおろさなかつた。

食用にすることをあきらめた人間は、その代わりに水鳥の羽毛を利用することを思いついた。まことに人間の悪知恵には限りがない。

なかでも狙われたのはガルサ・ペケーノというサギ科、シラサギ属の南米原産の小さなサギである。

このサギはシラサギ属の中でも特別優美で、なにより背中についている純白の飾り羽根が他に比類ないほど美しい。とくに交尾期になると色つやもよくなり、まさに清楚かつ華麗という感じになる。

クジャクの羽根はなるほど絢爛豪華だが、乙女の清らかさはあわせ持たない。その点、シラサギの純白無垢の飾り羽根はぴったりである。

一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、ヨーロッパの貴婦人たちは帽子の飾りにこのシラサギの羽根を利用することを考えだした。

美的感覚としてはすぐれているが、迷惑をこらむつたのは南米のシラサギである。ベネズエラでは一八九八年たった一年間で、一五〇万羽のシラサギが殺された。

ツバメの大集結

十一月になるとアメリカから、ツバメの大群がブラジルに移動してくる。いったいどのくらいのツバメが渡ってくるのか、はっきりしたことは分からないが、何十万の単位であることは間違いない。

カンビナス市には有名なカーザ・ダス・アン
ドリンニャコヤス（ツバメの家）があつて、
渡ってきたツバメが三万羽もこの家に泊る。

そのほかにブラジル各地にも何万羽かずつ飛
来し、町の建物や公園の樹木などに大コロニー
をつくっている。

パンタナールの北限の町カッセレスにも、十
一月になると大群のツバメがやってきて、公園
の樹木を文字通りまっくろに覆いつくす。

もちろん公園に一日中いるわけではなく、日
中は分散してパンタナールに出かけて餌の虫を
食べ、夕方になると帰ってくるのだ。ここの公園
は四月になるまでの半年間、ツバメに占拠され
る。一羽のツバメの鳴き声は小さいが、何万羽の
大群になると「ザアーツ」という潮騒（しおさ
い）に似た重く響く音となる。

この時期には、公園のベンチに座って愛を語り合うというようなロマンチックなこととはできない。



パンタナールに出動するツバメ部隊

ツバメの「糞害」でいたたまれなくなるからだ。

ツバメがこれほど群居しようとは知らなかった。種差による習性の違いがあるかも知れない

が、日本ではこういう光景にはお目にかかれ
ない。

どうしてだろうとホテルに来たアメリカの鳥
類学者に聞いたら、それは種による違いではな
く、ツバメにとってブラジルは母国ではないか
らだとのこと。

季節によって渡りをする渡り鳥にはどちらが
母国でも良さそうなものだが、実は営巣、産卵、
育雛という繁殖行為をする土地が母国というか
マザーランドなのだそうだ。

そういわれて得心した。なるほどブラジルに
渡ってくるツバメはブラジルでは営巣しない。
母国であるアメリカが寒い間、避寒のためブラ
ジルに滞在しているに過ぎない。

ツバメは土で深い椀型の巣をつくって四〜六
個の卵を産み、抱卵、育雛をする。こういう繁殖
にかかわる一連の作業はなかなかたいへんなの
だ。だから繁殖は暖かくなつた母国のアメリカ
に帰ってからやればよいので、旅先のブラジル
ではもっぱら餌を食べて体力をつければよいの
である。そのためには集団で行動した方が効率
的なのである。

夕方、カツセレスの公園に集結するツバメは、

朝になると三〇〇から五〇〇の小部隊に分かれパンタナールに出かける。バランキンニヨのホテルは直線にして三〇キロぐらいだから十分ぐらいで到着する。

よく観察すると、ツバメの部隊は一羽のリーダーによって統率されており、一糸乱れぬ行動をとっている。

パンタナールのような環境では餌の昆虫が豊富だから、餌探しに苦勞することはない。それでもリーダーが餌の多い方向へリードし、空中で採餌している。

こうやって各方面に出動したツバメの部隊は、夕方にカッセレスに戻ってくる。これがまた壯観で、各部隊が渦を巻くように上空を飛びながら集結し次第に数を増していく。

そしてすべての集結が終わった時点で、総リーダーが全軍を率いて矢のように公園の樹に降下する。

何回見ても見あきない一瞬である。

タカを追い払うカモメ軍

雨季が終わって水がひき出すと、パラグアイ河のような大きな河では浅瀬が干上がって洲ができる。

岸から張り出した浜辺もあれば中洲もある。これが毎年くり返されるわけだが、去年と同じ場所に今年も砂洲ができるとは限らないというより毎年かわるといった方がよいかも知れない。

このカモメの営巣地である河の中洲にボートを着けて、人間がカモメの巣を見に行くと、カモメの親たちは鋭い警戒音を発して一斉に舞い上がり、上空に輪を描く。

この時に注意しなければならぬことは、飛べずに地上を逃げまどうヒナを追いかけないことである。そんなことをすればヒナもかわいそうだし、人間も危険。子供を奪われまいと必死の親が、あの鋭いクチバシで人間の頭や顔を狙って突っ込んでくるのだ。

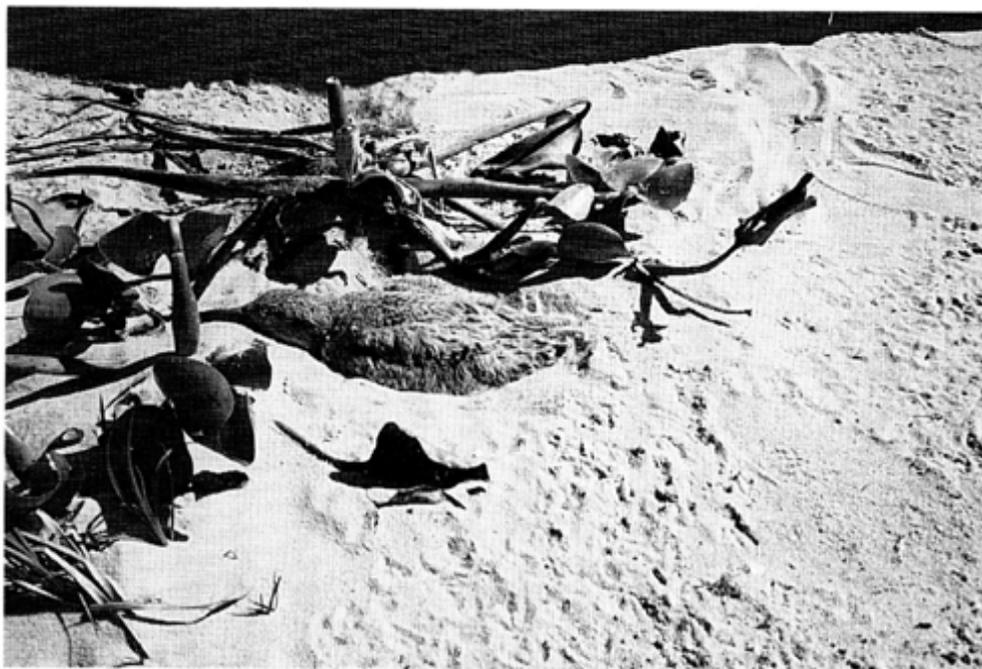
もうひとつ、孵化したばかりの綿毛につつまれたヒヨコはかわいいものだが、絶対に拾い上げて胸に抱いたりしてはいけない。むろん、またそっと元の巣に戻してやるにしても、ヒヨコに触ってはだめなのである。

人間の方は運よく親に襲われなくても、人間の匂いのついたヒヨコをカモメの親は許さず、突き殺してしまうのである。

「かわいいから何の気なしに抱くんでしようが、そこが野の鳥のきびしさなんです。とくに群棲する鳥にこの傾向が強いようです」

北林夫人も一度失敗している。

さて、乾季に河から顔を出す砂地の中洲はカモメの絶好の繁殖地となる。



かえったばかりのターリャ・マールのヒナ

カモメが河にいるのはおかしいなどと言っ
てはいけない。かつて海だったアマゾンやパン
タナールには、淡水に馴化したもと海の生物はい
くらでもいるのである。

ただ、いくらアマゾンやパンタナールが広い
といっても、海のようなわけにはいかないから、
個体は海のものより一回り小さくなる。

パンタナールのカモメは二種類いる。正確に
言うと、一種類はガイボツタといわれる通常の
カモメだが、もう一種はアジサシ亜目のトリで、
ブラジルではタリーヤ・マールと言われる。

アマゾンにはいないカモメの種類で、パンタ
ナールをはじめとするブラジル中西部から南部
にかけて棲む鳥である。

二種のカモメは同じ場所に仲良く集団で営巢
する。仲良くといっても行動は別で、ガイボツタ
の群れにタリーヤ・マールが混じって飛ぶわけ
ではない。

巢は砂をごく浅く掘った皿状の穴ともいえぬ
穴で、ここに二〜四個の卵を産んで、雌雄が交互
に抱卵する。

姿をかくす草や樹などまったくないむき出し
の砂地だから、卵やヒナを外敵に襲われる危険

はもちろんある。

しかし、河の中洲を選んで営巣しているの、陸上の動物に対しては比較的安全。危ないのはカラカラやカビオン・ベロのようなワシタカ科の猛禽類で、ヒナを狙って上空を舞いはじめる。

ところが実際にタカがヒナ獲りに成功することとはほとんどない。二種のカモメの迎撃部隊が出撃し、鋭い声で鳴きながら果敢にタカに向かつていく。一対一ならカモメは到底タカの敵ではないが、一〇羽を超えもカモメに次から次に突っ込んでこられると、いかにタカが強くても退散せざるを得ない。

とはいうものの、ワニやアナコンダにはやられる。それで数のバランスがとれているのである。

気の荒いチドリの仲間

パンタナールの水辺でよく見かけるトリにジャサナンがいる。一名カフエジンニヨともいって、クチバシの回りが赤、頭から胸までが黒、胸から下は茶色という派手な配色である。

チドリ目レンカク科のトリで日本名はレンカ

ク、漢字で書けば蓮角である。肢も長いが蹠と爪がとてつもなく大きく、蓮のような水草の上のれるようになっていいる。

ジャサナンは飛べることは飛べるものの、飛翔力が弱くそう大しては飛べない。その代わり長い肢を利用して走ることは得意である。

水辺の草むらとか泥の上とか、極端な場合はオニバスの葉の上に二〜三個の卵を産むが、巢もつくらなければ卵を抱きもしない。そのまま放っておくのだ。

卵は爬虫類の卵と同様、地熱や外気温でかえる。しかし親が一切世話しないから、外敵にもやられるし、水に流されることもある。醇化率が悪ければ当然種の保存がおびやかされる。そこでこのトリは、いったん孵化したヒナを徹底的に保護することによって種の保存を図っている。

つまり、ジャサナンの親はヒナが外敵からの危険にさらされるとヒナを自分の羽根の下に入れ、走って逃げるといいう変った特技をもっているのだ。

この場合、ヒナを羽根の下にはさんで羽根をつぼめたまま素早く走る。もつとも羽根を拡げたらヒナは落ちてしまうのだが……。

パンタナールにいるほかのチドリで有名なのはケロケロだろう。チドリ目チドリ科ケリ類の鳥。

ハトより一回り大きく、肢が長い。首筋から背中が濃い灰色、羽根は緑、腹は白、頭のうしろに数本の冠毛がとび出している。通常は番（つがい）で行動する。

とにかく鳴き声のやかましい鳥で、人間に限らず何か他の動物が近寄ると、常に敵の正面を向いてカン高い、突き刺すような声で鳴き続ける。

ケロケロ（欲しい、欲しい）というのは鳴き声からきた言葉でポルトガル人にはケーロケーロと聞こえるらしい。ツピー語ならテウーテウーとなりこれも擬音である。

しかし、日本人である私にはピーヨピーヨと聞こえるばかり。この声は一種の警戒音で、同時に他の動物に対する示威行動でもある。

ケロケロは草原の乾燥地の浅い窪みに、四個ほどの卵を産む。チドリの卵はおいしいので他の動物に狙われやすい。この敵を追い払うためにけたたましく鳴くのである。

小さいくせに気が荒く、大きなエマにも叫び

ながら向かっていく。他になににも武器を持たず、叫ぶのが武器という鳥も珍しい。

このトリは飛翔力も強く走るのも早い。神経に触るようなカン高い声で鳴き続けながら追い回すのだからたまったものではない。大きなエマでも遂には逃げ出してしまおう。

北米にはギルデアーリ（鹿殺し）と鳴く有名なケリがいるが、だいたいこのケリの仲間は鳴き声のやかましいことでは共通している。

ケロケロは叫び声だけではひるまぬ相手に対しては擬傷動作をする。つまり自分が傷ついて飛べないというような格好をしてバタバタ地上で暴れるのだ。

外敵が飛びかかるとさっと逃げ、また同様の行為をして敵の注意を巣からそらすのである。

「ダニ食い鳥」のアヌー

アヌー、またはアヌンという鳥がいる。中南米の特産である。

尾の長い、全長四〇センチほどの真黒い鳥で、草原やセラード（サバンナ）を好む。サンパウ

ロ近郊の牧場にだっていくらでもいる。むろんパンタナールにも多い。

ツピー語のアヌーなる言葉は文明人には響きのよい音ではない。ラテン語系のアヌス（肛門）がすぐ連想されるからである。

むろん、インジオが悪いわけではない。アヌーというのはアナン（真に濃い）とウ（黒）との合成語で、「ほんとに黒いやつ」というほどの意味なのである。

ホトトギス目ホトトギス科のこの鳥は、いろいろ変わった習性を持っている。

まずアヌーは「ダニ喰いドリ」で、牛や馬の皮膚に喰いついて吸血しているダニを食べる。釘抜きのように太く、短く、鉤状に曲がった頑丈なクチバシでいとも簡単にダニを引きはがし、食べてしまう。

牛馬はダニをとってもらうのだから、うるさがることもなく、気持よさそうにじっとしている。また、牛馬が歩くと足元の草むらからバツタのような小虫が跳ぶが、これもアヌーの餌になる。

牛馬とアヌーのような補完関係を「共生」という。

パンタナールでは、アヌーのほかには小さな白い小サギが牛馬と共に草原をよく歩いている。これも共生だが、小サギはアヌーほどダニをとってやらない。

中南米に牛馬が導入される以前のアヌーは、もっぱらアンタ、カピバラ、鹿のダニを食べていた。

これは今でもパンタナールなら観察できるのだが、パンタナールにいるアヌーは牛馬と共に一いるよりも、カピバラの背中でダニをとっていることがずっと多い。カピバラの方が牛馬より通常ダニが多いからである。

ついでに言うと、野生動物の中で一番ダニにたかられるのはアンタ（アメリカ・バク）で、アンタのツピー名であるタピールは「ダニのため、皮膚がぼこぼこになっている動物」のことをいう。

ただし、アンタはアマゾンのような森林地帯を好むから、パンタナールには数が少ない。

さてアヌーだが、灌木の枝にかなり大きな巣をつくって卵を産む。紺色がかった濃緑色で、表面に白いうすい膜がある。卵の数は一五〜二〇個とばかに多い。

どうやら複数のメスが同じ巣に産むらしいのだが、メスが交互に抱卵するのか、オスも加わるのか、よくわかっていない。なにしろカラスと同じで外見からは雌雄の区別がつかないのである。

カラスで思い出したが、アヌーもカラス同様、漆黒の羽根である。日本には「カラスの濡れ羽色」という、緑の黒髪を形容する言葉があるが、アヌーにも同じ形容があつたのはおかしかった。 ” Negros luzentos como as penas molhadas do Amu ” (アヌーの濡れ羽色のような漆黒の……) というのである。

こういうまつ黒いトリはカラス同様、あまり縁起のよいトリとはされない。卵をとるとたたきがあるとか、鳴き声を聞くと人が死ぬとか言われる。

か細い 「ウイー、ウイー」という声で、陰々滅々という感じ。さすがの北林夫人もこの声は好きになれないそうだ。

また、アヌーの心臓や肝を女性が食べると淫乱になるといふ言い伝えは、広くインジオの間では信じられている。

カラスのいない中南米

ブラジルにはカラスがいない。カラスは世界中にいくせに、中南米とニュージーランドにはいないのである。

これはおかしなことで、熱帯だろうと寒帯だろうと、低地だろうと高地だろうと、どこへでも棲める適応力と幅広い食性をもったカラスが、中南米に棲めないはずはない。それが現実にかラスがいないのは、中南米にはカラスの代わりにウルブー（コンドル）がいるからである。

ワシタカ目コンドル科のウルブーと、スズメ目カラス科のカラスとの間に形態的、系統的類縁関係はほとんどない。しかし、習性或食性、それに行動様式などのニッチェ（生態的地位）がおどろくほど共通している。

頭のよさでも両者はずば抜けている。案山子（かかし）でスズメはだませてもカラスはだませない、ウルブーはほんものの銃と木銃を見分け、銃に似せた棒を構えて脅してもさっぱり効きめはない。

こういう、カラスとウルブーの類似点は、最初にブラジルにやってきたポルトガル人もすぐ気

がついた。

ヨーロッパにはいないトリで、名前がなかったからウルブーをコルポ（カラス）と呼び、「このコルポは大きくてクチバシが曲がっている」などと書いている。

今でもコルポ・ド・ブラジルなどと言うこともあるが、ツピー語のウルブーの方が一般化してきた。似ているというだけで、ウルブーとカラスを同じ名称にしたのではややこしくてかなわない。

コンドル科のトリには六種ある。有名なのはアンデス山中を上昇気流にのって飛翔する、翼開張三メートルを超す大コンドルと、その近縁種で北米のカリフォルニア山地に棲息するカリフォルニア・コンドルである。両種とも数が少なく、国際保護鳥になっている。コンドルという言葉はインカ帝国時代のケチュア語“クントウル”に由来する。インカでは聖鳥だ。

二種の大コンドル以外のコンドルはブラジルにいて、いずれもウルブーの名前がついている。

このうち、人間の生活地域までやってきて、街のゴミ溜め、肉市場、屠殺場にも大挙して群がるのが、黒コンドルことウルブー・プレットで、通

常ウルブーといえればこのトリを指す。

他の三種は奥地に棲んでおり、群れもつからないから、人目に触れることが少ない。パンタナールには三種ともおり、むろんこの外に黒コンドルがわんさといる。

カラスと競合するのはこの黒コンドルの方。生活力、繁殖力旺盛で大群をつくるウルブーの領土内には、さしものカラスも入りこめない。また逆にウルブーもカラスの領土に入れないし、入ったら大戦争になる。

おそらくカラスとウルブーの代表が国境近くで会談し、お互いの領土を確認して「相互不可侵条約」を結んだのだろう。会見場所はメキシコ南部辺りではないかと思う。

こういう現象を生物学では「すみ分け」という。つまり、食性その他の生活様式が同じである二種以上の生物は、本来なら同じ場所に棲めるのに、競争の結果として棲む場所を分けるのである。

発生の順序からいうとウルブーの方が古く、カラスは後から出現したのだから、厳密な「すみ分け」とは言えぬかも知れぬが「すみ分け」の一種であることは間違いない。

王様ウルブー

コンドル科の六種のトリの食性はいずれも腐肉食で、動物の屍体ならなんでも食べる。

一般にウルブーやカラスのように死肉を食べるトリは、腐臭あるいは屍臭にひどく敏感で、ごく僅かな匂いにも反応して屍体を探し当てるといわれている。

なるほど、ウルブーが動物の屍体のある上空に集結して、ぐるぐる飛翔するのを見ると、匂いを嗅ぎつけるといふのはいかにもほんとうのようにみえる。だが、実はこれは違うのだ。

ウルブーは匂いで食物をみつけるのではなく、あのとびきり良く見える目で発見するのだ。

空を飛んでいるウルブーの目は、地上の動物が生きてぴんぴんしているのか、病気や怪我で弱っているのか、死にかけているのか、あるいは死んでいるのかを正確に見分けることができる。

ウルブーだけの特技ではない。鳥類はもともと典型的な視覚動物だから、食物の発見や害敵の認知はほとんど目にたよっている。聴覚もまあすぐれている。しかし、嗅覚の方は哺乳類と比

べるといちじるしく劣っている。

もつとも鳥によっては例外があつて、中にはカモやシギのように嗅覚の優れているものもあるのだが残念ながらウルブーはこの例外には入らない。それでも現実には、森の中にあつて上空から見えないはずの動物の屍体でも、ウルブーはなんなく見つける。

そこで、ウルブーには、ふつうの五感のほかに超感覚の第六感があつて、それで食べものの存在を察知する、という論が出てくることになるのだが、さて、どんなものだろうか。

パンタナールでは、黒コンドル以外の三種のウルブーが観察できる。このうちなんととっても珍しいのは王様ウルブー（ウルブーレイ）だろう。

なにしろ色どりとかがっこうがかわっている。まず頭と首には毛がなく、首と顔は赤とトキ色の二色に分かれている。

クチバシはトキ色、首のつけ根の羽根はグレイ、胸毛と腹毛はまっ白、翼は半分がやや汚れた白で、先は黒である。頭には肉冠があり、胸も一部が裸出して肉色の肌が垂れている。

コンドル科のトリはアンデスの大コンドルを

含めて、どれも黒が基調の地味な色がふつうなのに、王様ウルブーだけは唯一カラフルなコンドルとなっている。日本語ではトキイロコンドルという。

このコンドル、なぜ王様といわれるかというと、ひとつにはふつうのウルブーの倍も身体が大きくて、堂々としていることである。それに王様ウルブーは群れをつくらず、一羽かせいぜい番（つがい）で、常に孤高を保っているから貫禄があるのだ。

もうひとつ、王様ウルブーの王様たるゆえんは、王様ウルブーが獲物の側に降り立つと、今まで獲物に群がって饗宴をたのしんでいた黒コンドルが、一斉に獲物から離れてしまうのである。つまり、王様に席を明け渡すわけで、王様はゆうゆうと正餐をたのしむことができる。王様が飽食して飛び立つまで、兵隊の黒コンドルは整列して待っているのだ。

通常、人間がウルブーを殺すことはない、たたりがあるとか、ウルブーを殺した鉄砲は使えなくなるとか言われるが、気味が悪いからだ。その中でも王様ウルブーを殺すことは絶対のタブー。

中毒しない腐肉食動物

獲物にたかって、われ先に肉を喰いちぎる貪欲な鳥のことを日本ではハゲタカ（禿鷹）と言
い、そういう行為を「ハゲタカのような……」と
形容する。

こういうと、日本にはいかにもハゲタカとい
う特定の鳥がいそうに聞こえる。

だが、実際にはハゲタカという鳥は日本には
いない。ハゲタカはコンドル、つまりウルブーの
ことだからである。

それに、現在では“ハゲタカ”は死語で、分類
学上でも使われていないのが実情。コンドルは
独立したコンドル科に属しており、ワシタカ科
とは明らかに異なるから、ハゲタカなどという
まざらわしい言葉は避けるのである。

しかし、ハゲワシ（禿鷲）ならいる。れっきと
したワシの仲間で、ユーラシア大陸南部にいて、
コンドルと同じく典型的な腐肉食の鳥である。
ただし数は少ない。

ここでも黒コンドルのウルブー以外は数が少
なく、国際保護鳥になっているくらいだが、黒コ

ンドルことウルブーだけは、人間の生活環境にうまく適応して、今のところ大勢力を誇っている。

ウルブーは「牧場の掃除人」ともいわれ、病気や怪我で繁れた牛馬の屍体を短時間で片付けてくれる。

動物の屍体を放っておくと、炭疽菌に侵され、汚染する危険がある。この菌は人畜共通の伝染病である炭痕の病源体で、とくに家畜に伝染すると大被害を蒙ることがある。経皮伝染だから、炭疽菌を持った屍体に触れると次から次へと伝染するのだ。

一八八一年にパスツールがワクチンをつくってから大幅に減ったが、ブラジル奥地では今でもこわい病気のひとつ。

この炭症菌の発生源である動物の屍体を食べてくれるウルブーは益鳥ということ、ウルブーが保護された時代もあった。だが、ほんとはウルブー自体も、炭疽菌やその他の病原菌をばらまいているのである。

ふしぎなことにウルブー自身は炭痕菌におかされることはない。

動物が死ぬと、肉のタンパク質が分解してサ

ルモネラ菌、黄色ブドウ状球菌、大腸菌が発生するし、アミノ酸から生ずるヒスタミン、チラミンなどの強力な有毒物質も出てくる。

むかしはこうした有毒分解物を総称してプトマイン毒（屍毒）と言った。人間が食べたら命とりになることは間違いない。

この点、ウルブーはプトマイン毒に対してはじめから免疫があり、どんなに腐った肉を食べても平気なのである。

哺乳類の野生動物にもハイエナやジャツカル、コヨーテのように屍肉を食べるのがいる。これらの動物もプトマイン毒に強い耐性をもっている。

新大陸の哺乳類は、タテガミオオカミのようなイヌ科の動物でも腐肉を食べないから、腐肉食獣はいないのかと思っていたらやはりいた。

それがイヌ科、ネコ科、イタチ科のような食肉目の動物ではなくて、貧歯目のタツ（アルマジロ）であったのは意外だった。

タツの食性はむろん腐肉専門というわけではない。しかし腐肉もけっこうなメニューのひとつで、おまけに穴掘りが得意だから墓荒しを

やることがある。

だからインカのインジオは絶対にタツ―を食用にしなかった。

珍鳥スマイレコンゴウ

「こんなことを言ってきた日本人がいるんですよ……」

憤慨に堪えぬといった面持ちで、北林夫人が訴えた。

「ほう、どうしたの……」

客がいないのを良いことに、食堂で晩飯をたべながら、いつもの通り三人の長話しがはじまる。

「いえね、この間きた日本人が、アララ・アズール（スマイレコンゴウインコ）を獲ってくれないかって言うんですよ。お金を払うから是非生け捕りにして欲しいって」

「アララ・アズールを獲ってどうするんだらう……」

「売るんですって、アメリカに。ほんとにひどい話ですよ」すると旦那が「いや、こういうことなんです」と、以下のような説明をしてくれた。

スマイレコンゴウは、ここいらでこそ普通にみかけるトリだが、世界的にみれば珍鳥中の珍鳥である。

ブラジルでも捕獲することはもちろん禁止されている。ワシントン条約にもひっかかるから、外国に持ち出すことも、売買することもできない。そこで密輸が幅を利かせることになる。



ねぐらに帰るスマイレコンゴウの家族

スマイレコンゴウの場合、雌雄一番（ひとつがい）の相場はアメリカに持ち込んで五千ドルだそう。捕獲は夜、網を使用するのがふつうで、鳥モ

チを使うこともあるらしいが、それはあとでなかなかモチがとれないので嫌われるとのこと。

とったスマレコンゴウの足と羽根を縛り、全体にうすく食用油を塗っておく。別に脱脂綿に水を含ませオウムのクチバシに噛ませる。こうするとサルグツワになって声が出せないと共に、水分が鳥の体内に入るため死ぬのが防げるらしい。

尾を折らぬよう細心の注意を払って細長い箱に入れ、機内持ち込みの手荷物として飛行機で運ぶ。

オウム目の鳥は「オウム熱」というおそろしい病気の恐れがあるため、どの国でも持ち込みを厳禁している。だが、シヨルダー・バックなどに入れ、そ知らぬ顔で通関すると、案外かんたんに通ってしまいうらしい。

「そんなことをして持ち出しても、環境の違う場所で飼うことなんか出来ませんよ……」

北林夫人の怒りはなかなかおさまらない。

このスマレコンゴウ（ヒヤシンスコンゴウ）はオウム目三二五種中最大の鳥で、尾の先までの全長一一〇センチ、体重九〇〇グラムに達する。

全身濃いブルーで、目の回りと下クチバシのヘリだけが黄色いというきわ立った特徴をもち、ブラジル中西部からボリビア、パラグアイにかけてのセラードにしか棲んでいない。

二羽から六羽ぐらいの小ファミリー単位で生活する。行動範囲のテリトリーがきまつている鳥だから スミレコンゴウの生態を見ようと思つたらパンタナールに出かけるより方法がない。

餌はヤシの実で、通常ブリチー椰子の実を主食とするが、ここではブリチーが少ないのでアクリ椰子を食べている。

大形のコンゴウインコ属としては、このほかにカニンデーと呼ばれる腹の黄色いルリコンゴウインコがいる。この方は棲息範囲が広く、ほとんど南米全域に分布している。それに移動性で次々にテリトリーを移してゆく。

稀有な生態系を守れ

バッタ退治の煙霧

一九八七年の山焼きの煙はひどかった。マツト・グロツソ州の首府、クヤバの空港などは煙のために延べ二〇日も閉鎖された。

ひどい時には六日間も連続で空港が閉鎖される始末で、前代未聞の珍事となった。

なにしろ地上にいても二〇〇メートル先がぼうつとかすんで見えないのである。おそらく視程は1か2 kmだろう。これでは飛行機は降りられない。

いわゆる煙霧という現象だが、ブラジルの奥地の場合、七く九月の乾季には毎年山焼きをするのでから、現象自体が珍しいわけではない。ただ、この年はそれが特別ひどかったのである。

ひどかったのは、煙霧発生を助長するあらゆる気象条件が全部揃ってしまったからである。

ふつう大気の温度は地上から上空に行くに従って低くなる。ところが、乾季に高気圧が張り出し地上部が冷えこむと、地上に近い空気の層

も冷えて、上層の空気より温度が低いという現象がおきる。

この場合、地上に近い空気の層を逆転層という。こういう状態の時に山焼きをすると、煙は逆転層に抑えられて下に下にと溜まり、上層に抜けることができない。無風状態が何日も続くと、煙霧は次第に濃度をまし、遂には地上についてしまう。気象学用語ではこれを接地逆転層といつている。

一九八七年はこの接地逆転層がマット・グロツソ州一帯に拡がり、パンタナールでも、地上にいて煙が目にも染みるほどひどかった。まず史上稀な煙霧だったことは確実。

それでもまだ奥地のことであり、有毒物質をそれほど含んでいない山焼きや、野焼きの煙だったからよいようなものの、これが都会地だったら工場の煤煙や排気ガスで、たいへんな公害を引き起こすところだった。

一九八七年のマット・グロツソ州の煙霧は、いくつかの気象条件が重なった結果であるのは間違いないが、ひとつには人間の側にも原因がある。

つまり人間が、現在マット・グロツソの奥地に

大発生したバッタを退治しようと、草原に火をつけて特に念入りに焼いたためでもあるのだ。

ブラジル語でガファニョット・デ・プラガというこのバッタは、昔から農作物の最大の敵として恐れられていた害虫である。

ブラジルのは、「南米飛蝗（バッタ）」と呼ばれる直翅目バッタ上科のトノサマバッタで、これはもともとはボリビアのチャコ地方が原産。リオ・グランデ・ド・スール、パラナ、ミナス、マト・グロツソ、ゴヤスの草原やセラードの草を食べながら移動していたが、大豆や稲などの栽培作物ができはじめると食性を作物にかえ、大被害を与えるようになった。

このバッタ、卵から孵化しても、第四齢に脱皮するまでは羽根が発達しないので飛ぶことができない。バッタ退治はこの時期を狙って火をつけ、焼き殺すのである。

このバッタ、漢字で飛蝗という字を使うためイナゴと思っている日本人も多いようだが、同じバッタ科でもバッタとイナゴでは属がちがう。

ただし信州人がイナゴを食べるように、マツトグロツソのナンビクアラ族のインジオもこのバッタを

食べる。それもかなり旨い食べ物として賞味しているらしい。

佃煮にすると案外いけるかもしれぬ。

生態学の野外教室

このところパンタナールの自然を守れという動きがさかんになってきた。目に余るワニの密猟がきっかけとなって起こってきた運動で、どうやら政府も本腰を入れる気配である。

たしかに結構なことだが、それで密猟が取り締まれるとは思えない。パンタナルは広すぎるし、密漁者の手口も巧妙になるだろう。

密猟対策として、いつそのこと大量にワニを飼育したら、とうかという論がある。

たしかにこれはひとつの方法である。これでワニの密猟が防げ、ブラジルとしては貴重な外貨を稼ぐことができるのなら、密猟と取り締まりのいたちごっこよりはよさそうだ。

ワニは四〇から五〇ぐらいの卵を産んで、地熱でかえす。自然界では他の動物が卵を狙うし、かえったばかりの仔ワニも食べられるから、平均すると二匹ぐらいしか成長しない。

それでバランスがとれているのだが、人工的に卵を保護してやればほとんどの卵はかえる。哺乳動物とちがってワニの場合は増殖はいたってかんたんである。

問題はワニの飼育コストである。ある学者は安上がりなワニの飼育法として、実に奇想天外ともいうべき方法を考えた。

自然の大きな池を飼育場にし、池に出入りする小川に金網をはり、この中にピラニアを入れる。ワニの餌はもちろんピラニアだが、ピラニアの餌には殺して皮をはいだワニを与えるのだそう。うだ。ワニとピラニアが喰い合いするわけで、ほんとにこれでワニが飼えるなら、たしかに餌代のいらぬ安上がりの養殖法といえる。

しかし、この学者自身も言っているように、生態系の食物連鎖は複雑かつ微妙だから、こんな単純な方法で成功するかどうかは不明である。

それに養殖などというのはあくまで次善の策で、最善の方法は生態系をいじらないことであることは言うまでもない。

わがバラキンニヨのホテルが、今後どのような役割りを果たすことになるのか、うかつな予

測は出来ないが、生態系の観察拠点になればと思っ
ている。



美しい自然を今のままで残したい……パラグアイ河の夕日

ホテルの存在そのものが生態系の破壊につながるとい
う、いわば諸刃（もろは）の剣的な危険はたしかにある。
しかし、パンタナールの大自然

を愛する北林夫妻がいる限り、それほど心配することはあるまい。

我々の願いは、ここを訪れて、動物学や植物学、陸水学など総合的な生態学を研究する学徒がふえ、ほんとうにパンタナールの自然の営みが解明されることである。

そして、それこそが生態系の聖地パンタナールを保護する早道だと思うのだが、急がないと年々早まっていく自然破壊のスピードに負けてしまうことにもなりかねない。

(了)

あとがき

パンタナールに関しては、日本ではあまり知られていない。まったく知られていないわけではなく、度々はテレビ、映画、雑誌などに取上げられたりする。ところがわずかな例外を除くと、パンタナールは、故意にと言うか意識的にと言うか、アマゾンの一部として紹介されているのが通例である。

これではあまりにもひどいので、最初のころは私もいちいち注意したり、抗議をしたこともあった。すると、あるテレビ局のディレクターにあっさりといなされた。

「いやあ、要は知名度の問題ですよ。パンタナールなんて言ったって、日本じゃ誰も知らないけれど、ネーム・バリューのある大アマゾンと言えど子供でも知っているでしょう。視聴率を上げるには、パンタナールをアマゾン奥地に仕立て上げることが必要なんですよ。それに、どっちにしろ似たようなもんじゃありませんか……」

なるほど、そう言われればそんなものかも知れぬ。パンタナールをアマゾンの一部として紹

介するのは、商業政策上、許されたテクニックなのだろう。釈然とはしないが、私にも彼らの立場と理屈は理解できる。

しかし、永年ブラジルに住み、ブラジルの奥地を調査している私にはそんな、鹿を指して馬とというようなことは到底できない。

だいいち、映し出された映像のワンショットを見れば、それがアマゾンかパンタナールかは一目でわかってしまう。つまり、それほど違いがあるということなのだ。

アマゾン水系とラプラタ水系では、フローラ（植物相）もファウナ（動物相）もはっきり違う。アマゾンの基本植生が典型的な熱帯降雨林であるのに対し、パンタナールの植生はセラード（サバンナ）灌木林であり、河の縁にだけ森林の茂る、ギャラリー・フォレスト（回廊林）が特徴なのである。

さらに文化の差ともなると、両者の違いはいつそう顕著になってくる。アマゾンの文化は、白人の影響をほとんど受けていないインジオ文化が主流となって形成されている。

一方パンタナールは、征服者であるポルトガ

ル人やその子孫が武力でインジオ狩りを行い、彼らの土地を奪取し、自分達の白人文化を植えつけた新開地なのである。言うならばパンタナールは、サンパウロの文化圏にあるということだ。別に知識をひけらかしているわけではない。ブラジルの奥地を歩いていけば、このくらいのはことは常識としてわかってくる。

本書の母体をなすものは、私がブラジルの日本語新聞である「サンパウロ新聞」に一九八四年から八五年にかけて八〇回に亘って連載した「世界最大の湿原　パンタナール」と同じく八七年六〇回連載した「折ふしのパンタナール便り」である。この連載では、単なる旅行者や訪問者ではなく、永年ブラジルに住んでブラジルの歴史、地理、風俗習慣、動植物に興味を持っている人間の視点で、パンタナールを解説したつもりである。

この度一冊の本にするに当りかなりの加筆訂正をしたが、基本的な立場は変わっていないつもりである。ただ、出来不出来の方は当人にはわからない。

本書の上梓に当っては、無明舎出版の安倍甲氏に貴重な助言をいただいた。

バランキンニョ・ホテルで頑張る北林夫妻と共に、本書の出版を衷心より喜ぶものである。

一九九〇年 七月

中 隅 哲 郎

本文カット 〓 岩城良一

カヴァ装丁 〓 武藤正彦

著者略歴

中隅 哲郎（なかすみ てつお）

1936（昭和11）年東京都に生まれる。明治大
学政経学部卒業。1959（昭和34）年渡伯。以来、
新聞記者、商事会社勤務を経て、現在は（株）ウニベル・
ツール取締役、ブラジル生薬研究所代表。

著作に「ブラジルの経済生薬」「ブラジルの民間薬」
「アマゾン学のすゝめ」「ブラジルのたべもの考」（以
上「サンパウロ新聞」掲載）、研究論文に「パンタナー
ルの動物分類」「ブラジルの民族構成とその文化的影
響」「イスラムとブラジル」などがある。

パンタナール

定価一五五〇円

一九九〇年十二月二十一日 初版発行

著者 中隅 哲郎
発行者 安倍 甲
発行所 (有)無明舎出版

秋田市広面字川崎二二二一
振替/秋田七ー四四八七
電話/〇八〇三二一五六八〇
FAX/〇八〇三二一五一三七
写植 藤庄印刷株式会社
印刷 新日本紙工株式会社
製本 新日本紙工株式会社

© Tetsuo Nakasumi

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取り
替えいたします。